2022（令和４）年度

兵庫県 NIE 実践報告書

「教育に新聞を」実践　高等学校編

◇新聞の持つ高い表現力を学ぶ　（兵庫県立伊川谷高等学校）

◇新聞活用と総合学科の学び　（兵庫県立須磨友が丘高等学校）

◇NIE 活動を通して社会問題への興味・関心を高める　（兵庫県立加古川西高等学校）

◇NIE で育む NeoMAKS～新聞で育成する多様な視点・価値観を持ったグローバル人材～　（神戸市立葺合高等学校）

◇新聞を活用して、社会の課題を考える　（神港学園高等学校）

◇NIE 活動を通した「非認知能力」の育成　（クラーク記念国際高等学校）

「教育に新聞を」実践　中学校・高等学校編

◇学校教育における新聞活用の可能性　（神戸山手女子中学校高等学校）

「教育に新聞を」実践　特別支援学校編

◇社会人としての幅広い知識や感性を身につける
一つのツールとして新聞に触れよう　（兵庫県立播磨特別支援学校）

兵庫県ＮＩＥ推進協議会

教科学習にNIEをプラスする！

～学習の場を開く　＆　セーフティーネットにアクセス～

会長　秋田久子

2022 年度の実践報告集をお届けします。報告をお寄せくださった学校そして先生方ありがとうございます。心から感謝申し上げます。

さて、22 年度の実践発表会は上に掲げたテーマでした。

釈迦に説法で失礼します。「学習指導要領」は昭和 33 年に公示されて以降ほぼ 10 年ごとに改定を重ねています。学習指導要領の検討にあたっては、50 年後の社会を想定して議論がなされます、平成の中ごろまでは・・・。それ以降は、25 年先の想定だそうです。とはいえ、もう今は 15 年先くらいしか想定できていないのではないかと耳にしたことがあります。

では、15 年先を確かに想定できたとして、その学習指導要領実施後に高校に入学した生徒の場合、彼らが 30 代に入るころの社会が想定されているということになってしまいます。

んー・・・先のほうが長いなあ・・・。これからも平和で民主的な社会で、彼らも幸せに生きていってほしいなあ。そのために私たちが今できることは何だろうか。

その一つがNIEで「教科学習と社会をつなぐ」ことではないかと私は考えています。

教科という棚に整理された知識をもとに、実際の社会の動きを知り考える、すなわち「探究」する。今はもう、知っているというだけでは知識の活用は難しい。

「教科知識」にNIE で培った「社会的関心」がくっついて初めて、「問題意識という『気づき』」が生まれ、「表現という『周囲への働きかけ』」の力が育つと思います。

そう考えると、NIEはとりもなおさず、児童生徒の意識の中に社会へのアクセス端子を創る活動ということになります。アクセス端子は彼らの行動と協働の工夫を支えます。困った時には支援を求めやすくもします。アクセス端子は知識と現実を、自分と関係機関を、夢と社会の動きや協力者とをつなぐものです。

アクセス端子を付けて学校から社会へ出ていくのと、知識学習ベースで社会へ出ていくのとでは大きな違いがでてくると思いませんか。

実践資料集にはさまざまな取り組みが満載です。

新聞（=生きている情報）に親しませる、教科学習と関連付けて紹介する、新聞を資料に用いて感想を発表させる、社会課題を設定し解決手段を考えさせる、実際に関係機関と連携してみるなど、児童生徒の発達段階に応じた取り組みが紹介されています。どうぞ、活動の参考になさってください。

管理職の先生方、展開してくださる先生方の背後に、学校を越えて先生方の輪が広がっていく様子や、外部と連携した生徒の活動までも見えて頼もしくなります。

ありがとうございます。これからもご一緒に、よろしくお願いいたします。

＜目 次＞

巻頭言　「 教科学習にNIEをプラスする！　～学習の場を開く＆セーフティーネットにアクセス」　兵庫県NIE推進協議会会長　秋田　久子……1

2022年度兵庫県NIE実践指定校　……4

【小学校】

「新聞の魅力を味わい、新聞を楽しく読もう」～自分の興味・関心に合わせて新聞を進んで活用していくことのできる児童の育成～　神戸市立淡河小学校……6

社会への関心を高め、自分事として考えを持つ　尼崎市立立花南小学校……10

NIEの実践を通した「対話力」の育成　養父市立宿南小学校……14

社会に目を開き、自分の考えを発信できる子供の育成　神戸市立白川小学校……18

新聞に慣れ親しむ子供たちの育成～主体的な学びにつながるさまざまな活動を通して～　神戸市立横尾小学校……22

新聞に親しもう！読もう！学ぼう！　姫路市立大塩小学校……26

【中学校】

新聞を活用した情報リテラシー教育実践　神戸市立神陵台中学校……32

新聞を活用し「言語能力・情報活用能力」の育成を図る　尼崎市立南武庫之荘中学校……36

NIE活動を通して、時事問題に興味・関心を持たせ、主体的に学習を深めようとする態度の育成の継続　加古川市立志方中学校……40

新聞の良さを発掘する　神戸市立丸山中学校 西野分校……44

新聞から考えを深める～NIEスクールとしての取り組み～　加古川市立加古川中学校……48

自分ごととして捉え行動できる生徒の育成　南あわじ市・洲本市組合立広田中学校……52

【中学校・高等学校】

学校教育における新聞活用の可能性　神戸山手女子中学校高等学校……58

【高等学校】

新聞の持つ高い表現力を学ぶ　兵庫県立伊川谷高等学校……64

新聞活用と総合学科の学び　兵庫県立須磨友が丘高等学校……68

NIE 活動を通して社会問題への興味・関心を高める
兵庫県立加古川西高等学校……72

NIE で育む NeoMAKS～新聞で育成する多様な視点・価値観を持ったグローバル人材～
神戸市立葺合高等学校……76

新聞を活用して、社会の課題を考える　神港学園高等学校……80

NIE 活動を通した「非認知能力」の育成　クラーク記念国際高等学校……84

【特別支援学校】

社会人としての幅広い知識や感性を身につける
一つのツールとして新聞に触れよう　兵庫県立播磨特別支援学校……90

【兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校】

NIE と学校図書館を中心とした課題解決能力の育成　姫路市立豊富小中学校……96

SDG s の視点に基づく全校的な教科横断的探究学習―NIE を活用した課題設定と調査結果のまとめ―　兵庫県立兵庫高等学校……100

新聞を活用した「地域社会学」への取り組み　兵庫県立西宮高等学校……104

【2022 年度兵庫県ＮＩＥ実践指定校】

通常枠 20 校（◆は継続校　◇は新規校）兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校 3 校

〈通常枠〉小学校６校

◆神戸市立淡河小学校	神戸市北区淡河町萩原
◆尼崎市立立花南小学校	尼崎市三反田町
◆養父市立宿南小学校	養父市八鹿町宿南
◇神戸市立白川小学校	神戸市須磨区白川台
◇神戸市立横尾小学校	神戸市須磨区横尾
◇姫路市立大塩小学校	姫路市大塩町汐咲

〈通常枠〉中学校６校

◆神戸市立神陵台中学校	神戸市垂水区神陵台
◆尼崎市立南武庫之荘中学校	尼崎市南武庫之荘
◆加古川市立志方中学校	加古川市志方町志方町宮山
◇神戸市立丸山中学校西野分校	神戸市須磨区大黒町
◇加古川市立加古川中学校	加古川市加古川町備後
◇南あわじ市・洲本市組合立広田中学校	南あわじ市広田中筋

〈通常枠〉中学校・高等学校１校

◇神戸山手女子中学校高等学校	神戸市中央区諏訪山町

〈通常枠〉高等学校６校

◆兵庫県立伊川谷高等学校	神戸市西区伊川谷町長坂
◇兵庫県立須磨友が丘高等学校	神戸市須磨区友が丘
◇兵庫県立加古川西高等学校	加古川市加古川町本町
◇神戸市立葺合高等学校	神戸市中央区野崎通
◇神港学園高等学校	神戸市中央区山本通
◇クラーク記念国際高等学校	芦屋市公光町

〈通常枠〉特別支援学校１校

◆県立播磨特別支援学校	たつの市揖西町中垣内乙

兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校３校

姫路市立豊富小中学校	姫路市豊富町御蔭
兵庫県立兵庫高等学校	神戸市長田区寺池町
兵庫県立西宮高等学校	西宮市上甲東園

【 小 学 校 】

「新聞の魅力を味わい、新聞を楽しく読もう」

～自分の興味･関心に合わせて新聞を進んで活用していくことのできる児童の育成～

神戸市立淡河小学校　　校長　　黒井　陽子
教頭　　阪本　考義

１　はじめに

本校は神戸市の北部に位置し、山々や田畑に囲まれた自然豊かな環境にある。児童は全校生が 46 名の小規模校である。

本年度はNIE 実践指定校２年目ということもあり、昨年度の経験を生かし児童の実態に即した取り組みを行った。校内の研修テーマである「NIE を活用した言語力の育成と言語活動の充実」に迫ることができるように、全学年が教育課程の中で発達段階に応じた新聞活用の取り組みを行った。本年度の授業や学級経営において新聞を使った取り組みを紹介する。

２　実践の内容

（１）　いつでも見られる新聞コーナーの設置

新聞をより身近に感じることができるよう、全校生が毎朝通る廊下にNIE コーナーを設置し新聞を置いた。昨年度からの取り組みということもあり、休み時間になると当たり前のように児童が読みに来る。そして、教師も活用の意識が高まり、あらゆる教科の学習で活用できるようになった。

（２）　新聞記事を利用した言葉に興味をもつ学習（1 年生）

１年生の段階で記事の内容を理解して学習に生かすことは難しい。しかし、新聞記事の語句の多さを言葉の学習で生かせないか検討した。そこで、授業で習った片仮名や漢字を記事の中から見つけ出す活動に取り組んだ。児童は楽しみながら広い紙面の中から言葉を探し出していた。

（３）　新聞を利用した体ほぐしの運動（幼稚園・１年生）

本校は隣接している幼稚園と交流を綿密に行っている。

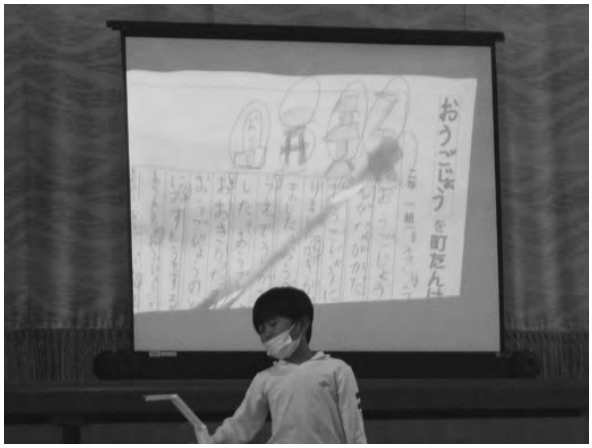
幼稚園児と１年生がグループになり、体ほぐしの運動を行った。新聞紙を細く丸めてリング状にし、輪投げにしたりバトンにしたり、丸めて障害物にしたりと場に応じた工夫が見られた。１年生が新聞を手に取って、幼稚園児に工作を教える様子も見ることができ、楽しく活動することができた。

（４）　新聞を使った造形遊び（みんなの学級）

特別支援学級（みんなの学級）では、新聞を使った獅子舞作りに挑戦した。本校で実際に使っている子供用の獅子頭をもとに作成した。この作品は、神戸っ子アートフェスティバルに出展し表彰され、地域の獅子舞保存会の方々からも高評価を頂いた。

（５）　地域探検のまとめとして（２年生）

１０月に地域で有名な和菓子店を見学した。饅頭を形成したり蒸したりする機械、倉庫などを絵や文で記録した。他学年がいつでも見ることができるように、新聞にしたものを掲示した。作成時には神戸新聞発行の写真ニュースを参考にした。児童は、張り切って取り組み、自分でも新聞を作ることができた喜びで満足の表情であった。



（６）　新聞記事の紹介（３年生）

社会科や総合的な学習で、見学したことや体験したことを学習新聞としてまとめた。教師がデジカメで撮った活動の様子の写真を児童が選び、３つ記事を書いた。４コマ漫画や俳句、クイズなども織り交ぜ、興味を引き付ける手法を学んだ。年間で 10 枚ぐらい書き、最近では、書くのにも慣れて、１時間ほどで完成させる児童も増えてきた。

新聞をお互いに読み合い、感想カードを書いたり、見学先にお礼の手紙と一緒に新聞のコピーをつけてプレゼントしたりした。学年末には、新聞学習のまとめとして、神戸新聞の「週刊まなびー」（子ども新聞）から３つ記事を選んで新聞を書かせた。

駐在さん、ありがとうございました。
見学したことを新聞にしたよ。

地域の方からみその作り方を教わりました。

（７）　福祉学習・環境学習の成果に（４年生）

４年生はプレゼンテーションで効果的な発表を求められる初期の学年に位置付けられる。その発表のために内容を決めて情報を集め取捨選択し、まとめていく学習活動をするにあたり新聞づくりは有効と考える。

社会科のごみの学習をきっかけに、新聞を作ったことで情報が整理され環境問題や SDGs について深く学び発表することができた。また、盲導犬と直接触れあったことから、ハンディキャップについて新聞にまとめた。そこからクラスにいる一人一人の個性や成長について確かめ認め合うことができた。

（８）　NIE 出前授業から（５年生）

朝日新聞社神戸総局長の堀江泰史さんに講

師を務めていただき、新聞の見方や作り方について説明を受けた。新聞社によって一面に載せる記事や文章量が違うこと、新聞を体に見立て「カタ」や「ヘソ」の部分に何を注目して紙面を見ればよいのかなどお聞きすることができた。また、子供たちは取材用のカメラを実際に触り、記事の書き方や新聞が家庭に届くまでの大変さを知ることができた。

（９）　歴史学習と新聞作り（６年生）

５月中旬に、県立考古博物館、五色塚古墳に行き、見学したことを新聞にした。縄文時代の狩猟や大歳山古墳の竪穴住居、弥生時代の米作り、高床式倉庫、戦いの様子、古墳時代の円筒埴輪、古墳埋葬者の身分などを、児童それぞれが割付を考え、図や絵の配置を工夫し発表する授業を行った。

３　２年間の実践を終えて

～新聞作りは情報を整理する能力を養う～

近年の授業では小学校でも児童のアウトプットを要求されるものとなっている。コミュニケーション能力、プレゼンテーションの方法を児童に身につけさせて主体的に行動できるように、教師がそのプロセスを具現化して授業で提供していく必要があると考える。そこで学習を進めるにあたり、何について調べるのか児童が把握し、情報を集めるため調査する。その集めた情報を児童の観点で分別してまとめて、発表できるように構成するのだが、その過程を新聞を作る工程に例えると、記者が情報を集め編集者が読者を考えた文面に整えるようにすることに近い。児童の学習で新聞を仕上げていく過程は、情報を精選して知らせたい内容は何かを明らかにしていく思考があると考える。そして、発表した後も学習したことを振り返り、新たな問題を発見して解決に挑む姿に成長させたい。

知識重視の時代から情報利用・情報整理の時代にあるとされている現代で、児童の段階では新聞作りは時代に合った必須の手法であり、新聞はその手本であると考える。今後も学習で利用していきたい。

神戸市立淡河小学校は、令和５年度に 150 周年を迎えます。

社会への関心を高め、自分事として考えを持つ

尼崎市立立花南小学校　校　長　平岩　健太郎
主幹教諭　山川　和宏
教　諭　西井　安美
教　諭　大串　洋介

１．はじめに

本校は、昨年度創立 50 周年を迎えた尼崎市内中央に位置する中規模校である。一昨年度より、コミュニティ・スクールのモデル校となり、地域の方々と連携しながら教育活動を行っている。

昨年度より NIE 実践校としての取り組みを始め、「新聞を通して、社会への関心を高める取り組み」を研究テーマにして、新聞記事を紹介する活動を中心に実践を重ねた。今年度は、社会で起こっている出来事と自分とをつなげ、自分の考えを持てるような実践を試みた。実践の担当教員は、３名である。

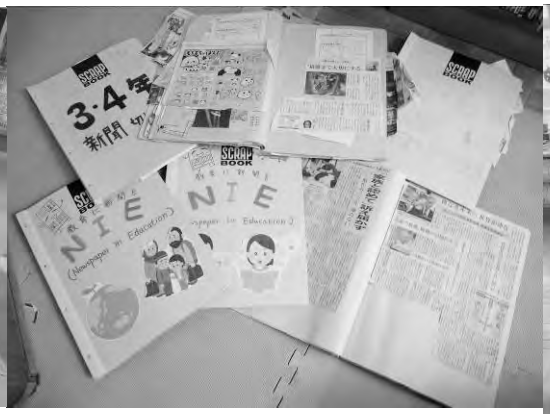
２．具体的な取り組み

（１）新聞記事の紹介

①図書室の活用

昨年度より、毎日届けられる購読紙（２紙）を児童が自由に閲覧できるように図書室に「新聞閲覧スペース」を設けている。また、一定期間が経過した新聞は、気になる記事を切り抜いてスクラップしていけるように、スクラップブックや新聞記事の紹介ワークシートを用意した。さらに、図書の時間には、絵本の読み聞かせだけでなく、気になる新聞記事を紹介することも行なった。そして、人権教育にかかわる記事については、別にスクラップブックを用意し、必要に応じて授業で活用した。

そのように身近な場所に常に新聞があるという環境が子どもたちに新聞そのものへの興味を喚起し、低学年の子を中心に、とても熱心に新聞記事の切り抜き紹介記事を書く姿が見られた。新聞記事を紹介すると手作りのしおりをもらえるという仕組みにしたことも子どもたちの励みになっていた。



②２年生の活動

図書の時間を中心に、低学年の子でも新聞を身近に感じられる環境を整えたが、さらに自分ごととしての考えを持つために、気になる新聞記事を模造紙に張っていって、そこに自分なりのコメントを書いていくという活動を行った。

とはいえ、２年生の子にとって、一般紙の記事を読んで理解することは難しい。しかし、大きなニュースは、大きな写真やイラストが添えられている。そこで、写真やイラストに着目して、記事を選ぶようにさせた。次に、写真とともに、見出しにも着目するようにした。すると、テレビで見たニュースやお家の人から聞いた情報とつなぎ合わせて、大まかな内容をつかむことができるようになっていった。

特に、プロ野球の新記録やサッカーのＷ杯などのスポーツの話題はどの子にとっても関心が深く、大変意欲的に記事を紹介しようとする場面が見られた。そこから世界の国々の国旗を調べたり、習い事を始めたりする子があらわれて、自分の興味を広げていくことができた。

また、新聞の４コママンガを使って、与えられた４つのコマの順番を考える活動や、伏せられたセリフを考える活動を行った。起承転結の流れや、それぞれのコマの役割について子どもたちなりに考える機会になったことで、国語の「お話のさくしゃになろう」の学習につなげることができた。

また、記者になって興味ある対象を取材し、新聞を書く活動も行った。低学年のうちから新聞に親しむ機会を持ったことで、今後も世の中で起こっている出来事へのアンテナを張り、社会への関心を深める効果を期待している。

（２）新聞を書く

①５年生の活動

１学期は、自分の気になる新聞記事を見つけ、ワークシートに分かったことや考えたことを書く取り組みをした。新聞を初めて読んだという児童もおり、内容をしっかり読んで選ぶというより、写真を見て選んでいる児童が多かった。また、体育大会を終えて、「体育大会新聞」を自分で作成する活動も行った。

２学期は、神戸新聞社の記者の方に出前授業をしていただいた。そこでの学びを活かして、自然学校終了後、自分で「自然学校新聞」も作成した。また、夏休みや冬休みにも新聞作成に取り組むとともに、理科や社会科の調べ学習ではタブレットを使ってレイアウトした新聞を作成することにも挑戦した。

３学期は、自然学校の班に分かれて、大きな模造紙に自然学校のまとめ新聞を作成した。一人一つずつ、印象に残っている自然学校の活動について記事を書き、新聞の構成は自分たちで工夫して考えた。完成した新聞は４年生に発表する資料として活用した。

②新聞記者の出前授業

神戸新聞社の記者の方に来ていただいた。実際に新聞を手に取りながら、新聞の構成を知ったり、記事の見出しのつけ方などを学んだりすることができた。

新聞に興味を持つきっかけになり、今後の新聞作りに活かしていこうとする意欲につながった。

私は、夏休みの宿題の新聞で、見立しの書き方があまり分からなくて、いつも何て書けばいいか分からなかったけど、昨日見立しの書き方を聞いて、見立しのコツが分かったので、宿題で新聞を書くときがあれば、見立しを工夫して書きたいです。楽しかったので、また話を聞きたいです。

新聞記者の人が、分かりやすく、見出しやリード分についてもくわしく教えてくれたし、黒くぬりつぶされた題を考えたりするのが楽しかったです。これで新聞に興味がわいたのでまたじっくり読みたいです。

（３）掲示板の利用

職員室前の掲示スペースを使用して、1年間を通じて新聞記事を紹介したり、子どもが書いた新聞を掲示したりした。たくさんの記事が写真とともに常に掲示されていることで、子どもたちだけでなく、保護者や学校関係者にとっても、世の中の動きに注目する機会となっていた。また、子どもたちが学んだことや体験したことを定期的に新聞に書いて人に知らせることで、見出しや写真などを使ってより効果的な伝え方を学んでいた。

（４）その他の取り組み

情報モラルの学習の中で、ネットに上げられている情報と新聞の情報を比較した。SNSなどによって、ネット上に情報が広がるスピードは近年大きな変化を遂げた。その一方で、情報の正確さや信憑性については、ネット上の情報だけでは不安がある。そこで、複数の情報を比較することの大切さに着目して、学習を行なった。

３．成果と課題

教職員による年度末のふり返りの中で、「図書の時間に、図書室の新聞記事に興味を持って読んだり、スクラップにしたりする児童がたくさんいて、社会的関心が深まりました。読み聞かせや新聞記事の紹介もとてもよかったです。ありがとうございました」という意見が出た。子ども同士の日常会話の中でニュースの話題が出ることも多く、世の中の出来事が身近に感じられるようになってきたようである。

その一方で、子どもたちに関心を持ってもらいたいニュースを積極的に紹介したものの、それがどの程度子どもたちの中に広がり、自分ごととして定着していったかというと心もとない。これまでの実践をきっかけに、子どもたちに社会的関心がさらに広がり、自分ごととして考えていけることを願っている。

４．おわりに

冬休みに、「冬休み新聞を書く」という宿題を２年生に出した。すると、多くの子が「自分が体験した事実」と「意見」を分けて書いていた。新聞に慣れ親しんだことで、「事実」と「意見」を整理する習慣が身についたようである。

新聞は人に読んでもらうために発行される。この２年間の実践が、子どもの表現力の成長につながったといえる場面が、これからさらに出てくることを期待している。

NIE の実践を通した「対話力」の育成

養父市立宿南小学校　　校　　長　　増田　真知子
主幹教諭　　栄羽　麻里

１．はじめに

本校は、養父市北部に位置する、全校児童２４人の小規模校である。地域の先人である江戸時代の儒学者、池田草庵先生の教えをもとに、家庭・地域とのつながりを大切にしながら学校教育を推進している。

NIE 教育には、子どもたちの「読む」「感じる」「伝え合う」力の育成をめざして昨年度から取り組んできた。教室の近くに新聞を置くことで、毎朝新聞を開いて写真を見たり、１面のニュース記事を読んだりする子が増え、以前より世の中の動きや大きな出来事に関心を持つようになってきたことを実感している。また昨年度は、情報交流の機会作りとして、NIE に取り組んでいる３校（神戸市淡河小、有馬小、淡路市大町小）とオンラインでの交流を図った。５・６年の児童が、地域の歴史や産業について調べたことを新聞にまとめ、記事の内容を発表したあと、質問や感想を述べるようにした。子どもたちは、新聞記事の作成を通じて見聞を広げたり、調べたことを伝え合ったりする楽しさや、遠く離れたたくさんの仲間とつながる喜びを味わうことができた。

本年度は、さらに対話力の向上をめざして、授業において NIE の実践を行っていくことにした。この取り組みにより、子どもたちにとって新聞がより身近になり、たくさんのことを知ったり感じたりしてほしい、そして自分の考えをまとめ、友だちと積極的に意見を交流しながら、さらに考えを広げ深めてほしいと考えたのである。取り組みの内容については、年間の推進計画を参考に、学年の実態に応じて工夫していくようにした。

２．実践の概要

（１）各学年の取組

①１年生　○国語「カタカナをみつけよう」　　新聞記事の中からカタカナをみつけた。
②２年生　○国語「おすすめの新聞記事」　　新聞からおすすめの記事をみつけた。

カタカナを○で囲んでいる１年生

おすすめの記事をさがしている２年生

③３・４年生

○新聞記者派遣事業　　令和４年１０月１２日（水）

神戸新聞養父支局長の桑名良典氏に来校していただき、「自分らしい新聞を作ろう」という学習を行った。日頃から新聞に興味を持ち、学習の中でも新聞作りに取り組んできた子どもたちは、この日の授業をとても楽しみにしていた。

今回は、「運動会の思い出やがんばりをどのように新聞にまとめるか」というテーマで学習し、見出しやリード文のまとめ方、写真のレイアウトの工夫について教えてもらうことができた。神戸新聞の記事を参考にたくさんの助言をいただき、子どもたちにとって大変学びの多い時間になった。

児童の感想・・・

○　神戸新聞の記者の方が来られて、新聞の作り方について教えてくださいました。むずかしかったことは、文章を考えることです。どんなことを書けばいいのかわかりませんでした。でも、教えてもらうと書けるようになりました。

○　印象に残ったことは、新聞記者は現場に行ってインタビューしていることです。新聞にはむだなことは書かず、見出しもスポーツの場合は「○○チーム初の優勝」と、大切なことを書くということを知りました。

新聞の作り方について学ぶ子どもたち

○研究授業　　令和４年 11 月４日（金）

今回は、総合学習「里山体験」での思い出や学びを途中までまとめた新聞をもとに、それぞれの子どもたちが新聞作りで悩んでいることを出し合い、友だちにアドバイスをしてもらうという内容で授業を進めた。

一人一人の新聞を、順番に大型モニターに映し出し、みんなで友だちの悩みを確認していった。子どもたちの悩みの多くは、リード文のまとめ方と写真の選び方であった。それについて、これまでの学習で学んだことや気がついたことを、友だちに一生懸命伝えようとする姿が見られた。

次時の授業では、助言を参考に６名全員が思いのこもった新聞を作成することができ、満足感でいっぱいになった。

しぜんいっぱい　キノコや落ち葉がたくさん

里山新聞

10月20日に、口三谷で里山体験が行われた。里山は維田さんとスタッフの方で散策をした。途中、ヒルがいたけど、無事に山の頂上に到着した。山を降りるときにいろいろなキノコが見つかった。例えば、「ムラサキフウセンタケ」や「ベニタケ」などであった次に、罠にかかった鹿を見に行った。檻に激しくぶつかっていた。

里山の感想

里山体験がありました。キノコや落ち葉がたくさんありました。柿取りもしました。捕まえたヒルは塩の中に入れました。ベニタケもありました。火起こしもしました。煙がきて目が痛かったです。焼き芋も食べました熱かったけどおいしかったです。来年の里山体験も楽しみです。

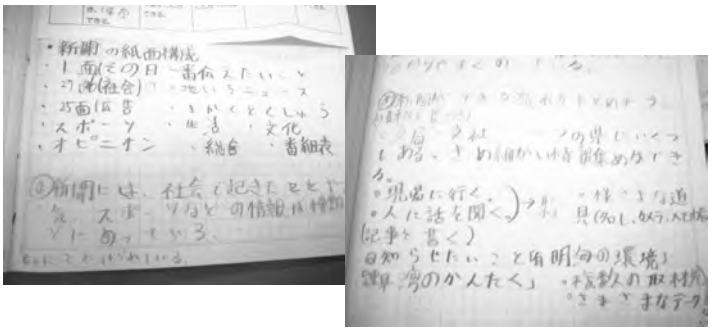
見出しやレイアウトを
工夫しながら作った新聞

里山新聞

楽しかった里山体験

④５年生　　社会「情報をつくり、伝える」　マスメディアの特徴について学んだ。

メディアによる影響について学ぶ子どもたち



新聞作成の流れや
紙面構成についてまとめたノート

⑤６年生　　国語「私たちにできること」

この単元は、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）という国際的な取り組みと結び付けながら、児童にとって身近な問題とその解決に向けて自分たちにできることを考え、相手に伝わるように工夫して書くことがねらいとなっている。自分たちの考えを、筋道の通った文章にまとめ提案できるように、課題意識と相手意識を持ちながら集めた情報を整理し、文章全体の構成や展開を思索する力が必要となる学習である。

２グループに分かれた子どもたちは、身近な問題として、自分たちの生活に直結している「節電」と「節水」について考えていくことに決めた。まず、新聞記事やネットニュースを読みながら現状について３人で確認し合った後、問題点を探り出した。そして、今自分たちに何ができるかという具体的な取り組みの内容について考え、提案文書を作成した。

グループで、「節電」「節水」について話し合っている子どもたち

節電をよびかける
ポスター

【児童がまとめた提案文書】　『電気の大切さを知り節電しよう』

1　提案のきっかけ

提案のきっかけは二つある。一つ目は、新聞に「電気の使いすぎで電気の供給が難しくなってしまう」という記事を見つけたからだ。二つ目は、夏や冬は電気の消費量が多いので、夏場に近い今にぴったりのテーマだと思ったからだ。また、最近とても暑くなってきたので、クーラーや扇風機を使うようになり、その分消し忘れも増えている。教室を移動する時に、電気を消すようにするという呼びかけが徹底されていないことが考えられる。さらに、クーラーをつけているのにドアをあけっぱなしにしていることも問題だ。以上のことから、私たちのグループでは、次の二つの提案をする。

2　提案

（1）　ポスターをはる

みんなが節電を忘れないようにするために、各部屋のドアの近くに節電ポスターをはる。ポスターをはると、ドアをしめる時に電気を消し忘れていないか確認できる。

具体的には、次のようなことを考えている。

・電気の使いすぎを注意するポスター

・教室を出るときに気づけるポスター　※節電ポスターをはることで、少しでも消し忘れが減ることを期待する。

（中　略）

3．成果と課題

NIE を推進して２年目の本年度は、日々の授業に NIE の要素を取り入れ、新聞を活用しながら対話力の向上を図っていくことをめざした。特に、３・４年生については、新聞記者派遣事業で「自分らしい新聞作り」について学んだことを体験学習のまとめに生かし、個々に作成した新聞を通して対話していく方法で学習を重ねていった。他の学年も、朝のスピーチに新聞記事を取り入れたり、記事からカタカナやおすすめの記事をみつけたりするなど、学年の実態に合った内容で新聞にふれる機会を多くもった。その結果、個々の児童に新聞を読む力や、新聞から学んだことを友だちに分かりやすく伝えようとする力がついてきた。実践をよりよく進めていくためには、全職員で取り組みの目的や活動の方向性についてしっかりと共通理解し、お互いの取り組みを自由に交流しあうことが大切であると感じた二年間であった。

NIE は、子どもたちの読解力を培いながら「新しいことを知る」、また「自分の思いを発信する」ための大事な学習である。その上で、お互いの思いを「伝え合う」場としてさらに充実したものとなるよう、今後も研修を積んでいきたい。

社会に目を開き、自分の考えを発信できる子供の育成

神戸市立白川小学校　　校　　長　　長﨑　康子
主幹教諭　　勝田　耕介

１．はじめに

本校は明治６年に白川村で創立し、その後ニュータウン建設に伴い校舎が移設され、令和５年度には創立 150 周年を迎える歴史ある学校である。校区内には、ニュータウンの街並と豊かな自然の両面がある。地域の方は、本校の教育みを支えようという熱い思いがあり協力的である。

本年度は、15 クラス、全校生 385 名、各学年２クラスであり、子供たちは幼小より互いのことを知っている。言葉を十分に交さなくても分かってくれるだろうという安心感があるためか、表現力が十分とは言えず、トラブルになることも多い。また、多様な考え方に触れる機会も少ない。

子どもたちに相手に分かるよう言葉で伝える力や、多面的な見方・考え方、将来たくましく生きていく力を育てたいということが教師の願いである。

そこで、指定校１年目は、「社会に目を開き、自分の考えを発信できる子供の育成」を研究テーマとして掲げ、できることから取り組むこととした。

２．実践内容

（1）新聞を手に取って

①　新聞に親しむ

新聞は、５年生の教室前の廊下に置き、いつでも手に取れるようにした。休み時間などに興味のある記事を読む子どもが徐々に増えていった。

低・中学年においては、コウノトリ、宇宙、オリンピック・パラリンピック、SDGｓなど教科学習に関する記事や子どもたちの関心のある記事などを教室に常掲するようにした。

新聞を眺めながら友達との会話する様子も見られ、新聞を読むことへの関心は高まったと感じる。

②　新聞を比べる

５年生は、社会科の学習の中で、同じ日の４社の新聞の１面を比較した。新聞によってトップ記事が違う。見出しも違う。トップ記事が占める割合も違う。何日間か比較することで、各社それぞれに記事の取り上げ方に違いがあり、意図をもって掲載していることに気付いた。

そこから、「実際に記者のお話を聞いてみたい」「どんな意図をもって記事を書いているのか知りたい」という思いがふくらんだ。そこで次に述べる「記者派遣」の学習につないでいくこととした。

（2）記者派遣事業

～ニュースって楽しい！～

産経新聞神戸総局の入沢亮輔記者に来ていただき、５年生を対象とした学習を行った。

「新聞記者ってどんな仕事？」をテーマに入沢記者の話を聞いたりクイズ形式で記者のかばんの中身を想像したりした。びっしりとメモされた取材ノートを目にし、子供たちは驚きとともに記者の仕事の大変さを想像していた。

また、「自分の知りたいと思うことを調べることができ、それをみんなに伝えることは楽しい」というお話を聞き、記者としてのやりがいを感じ取っていた。

この実践を行うにあたって、事前に入沢記者と打ち合わせをしたことがよい活動につながったと感じる。教師がねらいとすることや子どもの実態を記者に知ってもらったうえで、どんな話をしていただくか検討した。記者と担任が役割分担をすることで子供たちの集中力を持続させるようにすることができた。

記者派遣事業は、記者の方にお任せする活動ではない。記者と学校とが共に創り上げていく活動であると再認識した。

（3）新聞を作ってみよう

４年生児童は、国語「新聞を作ろう」の学習のなかで、班ごとに模造紙１枚の壁新聞を作成することとなった。この学習は、学校司書が中心となって進めた。

まず、あらかじめ壁一面に子ども向け新聞を貼り出した。できるだけ写真が多く掲載されているものを選ぶようにした。児童が新聞を読む時間をしばらく取ったうえで、関心のある新聞記事を選ばせ手に取らせた。

次に、班ごとに持ち寄った記事を並べ、どのような１枚に仕上げていくかコンセプトを話し合い、新聞のタイトルを考えた。「今年活躍した人新聞」「命は大切新聞」「自然災害新聞」などなど多様なタイトルの新聞が並んだ。そして、記事を切り抜き、模造紙上に並べて割付を考えた。構成が決まったら、見出しを付けたり、補足説明を入れたり、色を付けたりと工夫して書き加え、壁新聞を仕上げていった。

最後に、班ごとに出来上がった壁新聞を見せながら工夫したところを発表し、それぞれの新聞のよさを共有した。

「大見出し」「小見出し」をどのような言葉にするか、班で随分話し合っていた。インパクトのある短い言葉を考えることは簡単なことではない。考える際には、実際の新聞を大いに参考にすることとなった。

出来上がった壁新聞を見合うことでどのような新聞が見やすいか改めて気付くことができた。それと同時に、実際の新聞は、大事な記事を大きくしたり、読みやすく割り付けをしたりと工夫されて作られていることにも気付くことができた。自分たちで新聞作りをしたからこそ実感することができた気付きであったと思う。

（4）震災学習

①　写真パネルを見て

全校生が神戸新聞社の震災の写真を見学した。１年生にとっては初めて見る写真が多く、担任が「このときはね…」と自分の体験も交えながら１枚１枚説明した。子どもたちは多くのことを感じ取りながら黙って写真に見入っていた。

②　記者のお話を聞いて

神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーが講師を務め、体験談を交えながら「自分と家族、友達の命を守ろう」と５年生全員に呼び掛けた。

大震災当日、神戸・三宮の本社で宿直勤務だった三好アドバイザーは当時の写真を見せながら、「激しい揺れで窓ガラスが粉々に吹き飛んだ」「発生時刻に起きていたので助かったと思う」と振り返り、「あの日から 28 年がたとうとしている。大切なのは記憶を語り継ぐことだ」と話された。

また、「震災直後の取材では辛い現実もあったが、『救助された』『新しい命が芽生えた』『小学生が避難所でボランティア活動をしている』『復興住宅ができた』など、みんなが希望をもてる記事も書いてきた。人々を元気にすることができるのが新聞記者としてのやりがいだ」とのお話に児童は聞き入っていた。

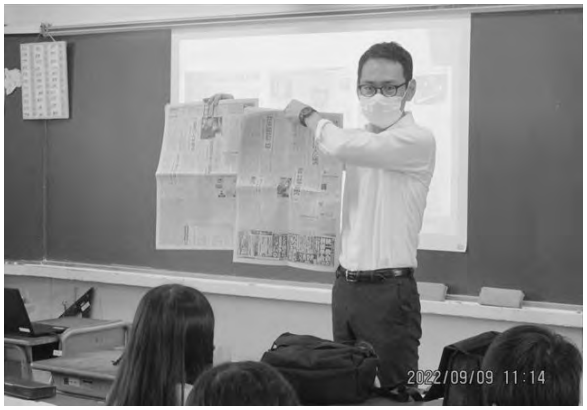
「各地で豪雨災害などが相次いでいる。災害知識を身につけないと命を危険にさらすことになる」という点についても強調された。

学習後に書いた子どもたちの感想文には、「阪神・淡路大震災の被害について知らない人に伝えたい。」「6434 人が亡くなったことを知って怖くなった。災害に対して恐怖心をもちたい」と書かれていた。１年生の感想にも「地震は急に起こるからこわい」「もうだれ死んでほしくない」と書かれていた。「命の大切さ」を感じ取ることができた学習であった。

３．成果と課題

児童にとって、新聞を目にする機会が増えた１年であった。たとえ読めない漢字があったとしても、写真を見たり見出しを読んだりすることで記事の内容はおおまかに分かる。日頃から新聞を目にすることで新聞を読むことに抵抗感がなくなったことは大きな成果である。

また、記事を切り抜いて壁新聞を作成する学習では、どのようなコンセプトの新聞にするか、見出しをどのような言葉にするか、割り付けをどのようにするかなど、班で話し合う場がたくさんあった。分からないなりにも何とか自分の考えを発信しようとする姿が見られた。研究テーマである「社会に目を開き、自分の考えを発信できる子供の育成」という点においては、まだまだ課題はあるものの、活動を通して少し前進できたと感じている。



新しい学習指導要領のもと「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指している。

入沢記者との学習では、取材とは相手との対話の中から驚きや面白さを聞き出していく活動、つまり主体的に自ら追い求めていく活動であり、それが非常に意義のあることであることを学んだ。自分たちも自ら学び取る学習を進めていきたいという意欲につながった。

また、三好シニアアドバイザーによる震災学習では、実際に震災を経験した方のお話を聞くことで知らなかった事実にたくさん出合うことができた。阪神・淡路大震災の話だけでなく、その後も日本の各地で起こっている自然災害について触れていただいたことで、子どもたちは「自分ごと」として災害をとらえることができた。知らなかった「社会」に目を開くことができたと感じる。

教師の工夫次第で、教科学習と新聞をリンクさせることはいくらでもできると感じた。子供たちに社会に目を開かせることを目指すとするならば、まずは教師が社会に目を開きたくさんのことを感じ取ること、そしてそれを子供たちにどう出会わせるか創意工夫すること、その創意工夫を教師が楽しむことを目指すことからではないか。

次年度は様々な学年で、教師の個性ある工夫がさらに発揮できるような学習活動を展開していきたい。

新聞に慣れ親しむ子供たちの育成

～主体的な学びにつながる様々な活動を通して～

神戸市立横尾小学校　校長　酒井　秀幸
教諭　吉川　拓郎
教諭　楠本　千歳

１．はじめに

本校は、神戸市須磨区の横尾山のふもとにある自然豊かな地域で、横尾団地を校区にもつ、全学年２学級、285 人の児童が学ぶ小学校である。本年度初めて NIE 実践指定校として新聞を活用した研究を始めた。

本年度は５年生と６年生の二つの学年が、新聞を使って学習指導要領で明記されている「主体的な学び」の推進に向けて、さまざまな場面で新聞を使うことから始めた。そして、児童の活字離れが進んでいる現状を踏まえ、学習の中でいかに抵抗なく新聞から情報を集めたり、読み取ったことを生活に活かしたりできるのか、そしてどうすれば児童が少しでも新聞に興味をもつことができるのかを試みた。

まず初めに、本校の５年生児童 42 名に日々の生活の中で児童がどんなことに関心をもち、それらをどうやって情報収集しているのかといった現状把握を行うためにアンケートを実施した。

それによると、「家庭で新聞購読している」と回答したのは 13 名で、約３割の児童の家で新聞を読む環境があることがわかった。同時にこの 13 名の児童は、新聞以外にテレビやインターネット等でも情報を得ていると回答しており、新聞購読環境と社会事象への関心の高さとの相関関係が伺える結果となった。

次に、興味があって知りたい記事内容を問うたところ、スポーツ・事件や事故・神戸市の様子と続いており、身近な事や習い事で行っているスポーツ等に関心が高いことが分かった。また、新聞に掲載されている４コマ漫画にも興味をもっている児童が多かった。

そこで、日頃は新聞に触れることのない児童にも新聞を手に取ってもらい、少しでも新聞に慣れ親しんでもらえればと思い、本年度の実践を始めた。

２．実践の内容

①日常的に新聞記事を選んで朝の会で伝える活動　「わたしの気になる新聞記事」

まず、子供たちが新聞に興味をもつためには、身近なところから継続して新聞記事を扱う活動が大切であると考えた。６年生では朝の会で自分が気になった新聞記事を切り取り、自分の考えを書き入れる活動を行った。朝の会で日番になった児童が、自分の選んだ記事の内容について調べ、皆の前で紹介した。

初めは記事を探すことに難しさを感じていた児童も、「スポーツ」や「世界情勢」「歴史」といったジャンルを決めて選んだり、見出しから選んだりするうちに、記事を探すことに慣れ、次第に堂々と発表できるようになった。また、聞き手を意識した発表

ができるようになり、聞き手も社会事象への関心の高まりが見られた。さらに発表後の黒板掲示によって、休み時間に再度内容を確かめようとする児童も見られた。

②４コマ漫画を使った読解力向上
「よみときチャレンジ」

アンケート結果からも、児童は漫画に興味関心が高い。以前にも試みたことがある「よみときチャレンジ」を今年度も実施した。これは４コマ目の登場人物の台詞を消した用紙を準備し、漫画全体からその台詞を予想して書き込むものである。今年は校長室の前に問題用紙と応募箱を置き、全校生対象で行った。

第１回目から５・６年生以外のさまざまな学年の児童が参加し、四つの場面から空欄のせりふを考える姿が見られた。実際の漫画と同じせりふではなくても、同意語や考えられる内容も大いに認めたところ、低学年でも毎回楽しみにしてくれるようになった。また応募された用紙にはコメントを書き、返却をしていくことで、さらに参加者が増えていった。家族で考えたり、本校職員も参加したりと、幅広い層の参加となり、回数を重ねていくうちに登場人物の表情やしぐさなどからも台詞を読み取れる児童が増え、読解力向上につながっていった。

１週間に１枚のペースで行ったが、次回の実施日を待ち遠しいと感じてくれる児童もいて、新聞に慣れ親しむ活動となった。

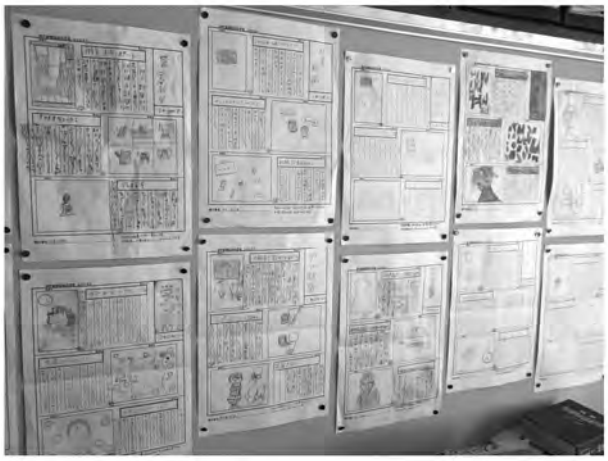
③新聞記者派遣事業とキャリア教育

２月中旬に５年生対象の新聞記者派遣事業を受けた。この事業は、３学期の社会科「私たちのくらしと通信」の授業に合わせて行ったものであるが、実際に第一線で働く新聞記者が来校し、新聞記事を作るまでの苦労話や、実際に使うカメラや筆記用具、取材したことを書き込むノートや PC の充電器等の取材に欠かせない道具の説明を行って下さった。日頃は新聞記者と直接話す機会がない児童にとって、この活動はとても興味深いものとなった。

記者が「情報を正しく、より分かりやすく伝えるため、自分が理解できるまで丁寧に取材する」というお話に、児童の真剣に耳を傾ける姿が見られた。また、「記事を書くのに要する時間は?」との問いに「１行１分を目標にしている」と答え、児童から驚きの声が上がるなど、日頃の教室の雰囲気と違った時間を過ごすことができた。同時に新聞記者という職業に興味をもった児童もいて、キャリア教育にもつながる活動であった。

④新聞社見学後の学習新聞づくり

５年生が社会科の学習のまとめとして市内の新聞社に見学に行き、そこで学んできたものを新聞にまとめる活動を行った。



あらかじめ担任の方で枠組みされた用紙を準備したが、内容や記事の配置については児童に任せた。児童は、これまでの新聞についての学びを活かし、一番書きたいもの・伝えたいことを見出しを付けて上部に配置したり、色を塗って目を引く工夫をしたりして新聞にまとめた。また、文章も限られたスペースに上手に書き入れ、どの児童も意欲的に取り組んだ学習活動となった。

⑤小高連携授業を通して、多角的なものの見方・考え方を養う。

本年度の大きな取り組みの一つに、小高連携授業がある。これは近隣にある県立須磨友が丘高校の生徒 20 名が本校５年生児童に授業を行ったものである。初めに宮城県石巻市にある大川小学校での深刻な津波被害について説明を聞いた後、グループワークを行った。学級を６つのグループに分けて、１人ずつ高校生が入り、それぞれが阪神淡路大震災当時の記事を使って調べたことを児童に伝えていった。同時に「みんなならどうする？」などと問いかけ、児童の目線に合わせた活動を展開した。

高校生にとって、小学生に自分たちが調べたことを伝える活動は初めての試みであったが、事前に綿密な準備のおかげで、実り多い活動となったようである。本校児童にとっても、高校生とともに学ぶ機会がなかったため、

授業後は、ほとんどの児童が有意義な時間だったと感じていた。児童は授業後に、次のような感想を綴った。

> ○班の人と一緒にライフラインのことをいつもより深く考えて発表することができました。高校生の人たちの説明はわかりやすかったです。
> ○避難所のことを教わって、避難した人たちは頭が真っ白になって何も持って行けなかったり、持って行った人も全然足りなかったりして、その人たちのことを思うとつらいです。
> ○災害や事実の恐ろしさを改めて知ることができました。ラジオで 12 日間も放送を続けてくれたのも、市民のためにやってくれたのだろうなと思いました。

（児童の感想より一部抜粋）

今回の小高連携授業を通して、同じ神戸の子どもたちが校種を超えて神戸の震災について学び合うことの意義を感じることができた。「震災」という一つのテーマに絞って様々な切り口を高校生が考え、小学生にアプローチしていくといった活動を考える中で、どうすれば伝わるだろうかと試行錯誤を繰り返し、高校生たちが伝えたい気持ちをもってしっかりと本活動に取り組んだ証しは、児童の感想にきちんとつづられており、実り多い連携授業となった。

３．おわりに

本年度はコロナ禍での制約が少しずつ緩和され、ここ数年できなかった教育活動が少しずつ以前のように取り組めるようになり、社会見学後のまとめの活動として学習新聞づくりを行う機会が増えた。本活動を通して新聞に触れる機会をもったことで、児童が学習新聞にまとめる際、目を引く見出しの付け方や伝えたい内容をどのように記述するか等、これまであまり意識してこなかった視点で作成する姿が見られたことはとても有意義であった。また、児童が端末を駆使して様々な教科学習のまとめや係活動の成果物としてまとめる際も、レイアウトを工夫する等、表現内容に変化が見られたことは喜ばしいことである。

社会の流れは思っている以上に早く、大きな変化が次々とやってくる時代に、子どもたちは身を置いて生活していかなければならない。さまざまな情報を取捨選択する力、情報を有効かつ正確に活用する力、得た情報を発信する力などが求められる今、児童が学習場面で新聞を活用することによる効果は大きいと考える。本年度、本活動に取り組んだことで児童が主体的な学びにつながる力をどのように育んでいくのかを考えるきっかけとなったことは大きな一歩である。

指定２年目を迎える来年度も小高連携授業を含め、より一層、児童が新聞に関心をもち、新聞を通して学ぶ場面を増やしていく。そのためには教員の創意工夫が不可欠であることを追記し、本年度のまとめとする。

新聞に親しもう！読もう！学ぼう！

姫路市立大塩小学校　　校　　長　　岡﨑　由佳
主幹教諭　　金澤　智子

１．はじめに

本校は姫路市の東の端に位置し、南には大塩海岸が広がっている。また令和４年度には開校150 周年を迎えた歴史のある学校である。祭りのさかんな地域で子どもたちは地域の方々に愛され、祭りと共に成長し、学び続けている。

本年度は NIE 実践指定校 1 年目ということ、ＴＶのニュースやネットニュースに触れることはあっても新聞を読む機会はほとんどないという実態であるというところからのはじまりであった。そこでまずは、新聞に触れる、目を通すというところからスタートし、各学年の成長段階に合わせて新聞に親しんでいった。

２．　実践の内容

１年生

１年生は、子ども新聞を読んで、新聞に親しむことをした。このときに初めて新聞を読む児童も多くみられたが、大きな新聞にくぎ付けになって読んでいる姿が見られた。友達同士で、「ここにこんなことが書いてあったよ」などと、新聞を通して交流する姿も見られた。「新聞に迷路があるなんて知らなかった」「おすすめの本があって読みたくなった」「プラスチックごみの環境問題のことがあって、心配になった」などの様々な感想が出て、「もっと読みたい」と新聞への関心が高まった。

４年生

４年生は、国語「新聞を作ろう」で、事実を分かりやすく報告する新聞を作るために、記者派遣事業を活用して学習を行った。今回は、書写山で行われる林間学校について、３年生に向けて報告する新聞を書くこととした。

まず、林間学校に行く前に、神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーに来校していただき、取材を行う上で大切なことについて教えていただいた。ニュースの基本である「５Ｗ１Ｈ」や、周りの光景や音などにも意識を向けながら「なぜおもしろかったのか」等、感じたことを具体的に表現するための取材のコツについて、プロの目線から学ぶことができた。この学習をもとに、実際に林間学校で取材を行った。

次に、記事を書く際にも三好アドバイザーに来校していただき、割り付けやインパクトのある見出しづくりについて教えていただいた。児童は、実際にグループで作る新聞の内容を話し合ったり、見出しの言葉についてアドバイスをいただいたりしながら、記事作りについて学習することができた。

これらの学習を通して、多くの児童が、事実を分かりやすく伝える新聞の作り方を学ぶだけでなく、興味をひきつけるような文章を書くためには、言葉を大切にし、よくある表現を自分なりの言葉に言い換えてみることの大切さを感じたり、新聞作りの面白さに触れたりすることができた。

記事であることに興味をもって学習することができた。また、既習事項を生かして、なぜその見出しを選んだのかについても本文の内容だけではなく、使われている資料や言葉にも着目して理由を述べることができた。

授業の振り返りには、「新聞記事を書いている人は、見出しや使う資料についても考えなければならないことが分かった」「見出しや資料に注目して新聞を読みたい」「今度、新聞を読んでいきたいと思った」などが書かれていて、児童の新聞に対する関心が高まっているように感じた。

②新聞記事から自分の考えをもとう

授業外の時間で、新聞記事を読んで、自分の考えを書く活動も行った。ここでは、３つの条件を意識させて取り組んだ。①150 字以内で書くこと・②１段落目に記事から自分が分かったこと・③２段落目に記事から自分が思ったこと（感想）を書かせて、教室前の廊下に掲示した。

児童全員が同じ記事を読み、自分の考えを書かせることで、他者との比較をすることができ、色んな考えにも触れることができる良いきっかけ作りにもなった。

次は、どんな記事について自分の考えを書くのか、楽しみにして待つ児童も増えた。

５年生

①新聞記事を読み比べる

５年生は、１学期の国語で「新聞記事を読みくらべよう」と「固有種が教えてくれること」を学習した。

この既習事項を生かして、兵庫県の人口が減少していることが分かる記事の読み比べをした。そして、２つの記事の見出しはどちらがふさわしいかという学習を行った。

児童は、自分たちの地元の課題についての

６年生

（１）新聞を手に取って

①新聞に親しむ

６年生の教室前の廊下や教室内に「新聞コーナー」を設置し、児童がいつでも新聞を手に取れるようにした。休み時間などに興味のある新聞記事を読んだり、気になる写真や数独パズルを切り抜いたりする児童が徐々に増えていった。

また、話題の記事や授業で習ったことに関する記事、地域に関する記事を取り上げて紹介したり、自分たちの掲載された記事を教室に掲示したりするようにした。新聞を見ながら友達と会話する様子も見られ、新聞を読むことへの関心は少しずつ高まっているように感じた。

（廊下の新聞コーナー）

②新聞スクラップ

朝の学習の時間に、気になる記事を探して新聞スクラップ学習を行った。たくさんある新聞記事の中から自分の興味のある記事を選び、要約し、読んだ感想や意見をまとめた。児童は新聞記事を読み、「自分もこんな風にしていきたい」、「コロナウイルスはまだ続くけれど、感染対策をしっかりして学校行事を楽しみたい」、「なぜこんな事件が起こってしまったのだろう」等、知識を得るだけでなく、今後の生活について考えたり、社会で起こっている出来事に目を向けたりすることができた。

また、家庭での自主学習ノートにも新聞スクラップをしている児童が見られた。学校だけでなく、家庭でも新聞に関心をもつ児童が増えたのは大きな成果だと感じた。

（２）記者派遣事業

６年生は今年度２回、記者派遣事業を行った。まずは産経新聞神戸総局姫路駐在の小林宏之記者に「新聞を読んでみよう」をテーマに授業をしていただいた。新聞社の仕組みやそれぞれの部署、記者の役割などの説明、また小林記者の職歴や取材に使うツールの変化なども紹介していただいた。児童たちは「取材のために現場に一日中いることも・・」「取材を断られることも・・」というお話を聞いて、記者の仕事の大変さを想像していた。最後には、児童たちの住む大塩町で取材した、のじぎくの群落や七夕飾り、初盆提灯などの記事も見せていただいた。家で実際に七夕飾りを飾っている児童は、

感想に「私の家でも七夕飾りをしているので、良い風習だと言ってもらえて嬉しかった。」と書いていた。児童たちは普段あまり出会うことのない新聞記者の方の話を直接聞いて、新聞を読むことや新聞記者の仕事、新聞の読み方に興味をもった様子であった。

12月には神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーに「播磨の戦争遺跡と平和の遺産」をテーマに授業をしていただいた。三好アドバイザーは自身の祖父が戦死したことや、小学生のときに沖縄がアメリカから返還された記憶をたどり、「記者になった原点は世界の平和を願う気持ち」と話された。児童たちは、姫路でも空襲があり、たくさんの人が亡くなったこと、兵庫県内にも戦争の記憶を受け継ぐ遺跡が残されていること等、知らなかった事実をたくさん知って、驚きと同時に戦争の悲惨さや恐ろしさを実感していた。「平和の大切さ」を改めて感じ取ることのできた学習であった。

〈児童らが掲載された記事〉
（教室掲示）

＜児童の感想の一部＞

- 新聞を見たことは何回もあったけど、作る側のことは考えたことがなかったから、いい機会だった。
- 「新聞は社会を動かす」という話が心に残っている。社会を動かすことができるなんてすごい仕事だなと思った。
- 昔戦争があったということを忘れずに、いろんな人たちに受け継いでいくという言葉にまさにそうだなと思った。自分たちもなにかできることはないかなと考えるきっかけになった
- 改めて戦争をしてはいけない、戦争に得はないと思った。今世界で起こっている戦争が一日でも早く終わるように願いたい。

MEMO

【 中 学 校 】

新聞を活用した情報リテラシー教育実践

神戸市立神陵台中学校　　校長　　常光　由起子
教諭　　山元　公大

１．概要

本校は、令和３年度より NIE 実践指定を受け、本年度で２年目の実践指定である。本校では NIE 実践指定以前より、各クラスに新聞を一部配架し、生徒が新聞に親しむ環境構築に努めてきた。昨年度からのＮＩＥ実践指定を受け、より一層生徒が新聞に親しめる環境づくりを目指すとともに、新聞をきっかけとした情報の取り扱い方・情報リテラシーの向上を目指してきた。

現行の学習指導要領においても、情報の項目が追加されており、情報リテラシーの向上が社会からも求められている。本年度はじめに実施した新聞の活用状況アンケートにおいても、新入生を中心に多くの生徒が、新聞が持つ情報価値に気づいておらず、インターネットという特定の情報源から情報を得ていることがわかった。反面、昨年から NIE に取り組んでいる２、３生では新聞の持つ情報的価値に気づき、少しずつ活用しようとする様子も見られるようになった。本実践においては昨年度に引き続き、生徒が新聞の持つ情報価値に気づくとともに、新聞以外の情報との向き合い方を指導していくこととなった。

２．新聞に親しむ環境づくり

これまでも行ってきた各クラスに１部ずつの新聞配架を継続するとともに、本年度は各教室に新聞を蓄積し、より多くの新聞が常時教室内にある状況を作った。また、廊下に新聞を置いておくなどして、各クラスにおいてより一層「新聞に親しむ環境づくり」に努めた。例えば、担任が毎日気になった記事を教室に掲示し、ＳＴ等の時間でその内容について触れることや、定期的に新聞を読む時間を意図的に作ることで、生徒にとって新聞がより身近なものであるようにした。

図書館においても、実践指定以前から２社の新聞を１部配架していたが、５社の新聞を毎日配架するコーナーを設けた。図書館内には、学校司書が、生徒が興味のありそうな記事や、図書と関係のありそうな記事を掲示することにより、生徒が新聞に触れる機会を増やしている。また、図書館内だけでなく、廊下や図書館前のスペースにも学校司書が中心となり新聞記事を多く掲示した。

毎日、新聞を教室教卓横に置いておき、生徒が自由に読めるようにしている。また、新聞は教室にストックしていき、いつでも過去の新聞を読めるようにしている。

図書館前の掲示板に、学校司書が選んだ記事や、文化委員の生徒が興味を持った記事を掲示した。

生徒が興味のありそうな記事を積極的に掲示し、生徒の新聞に対する興味を高めた。

図書館に並んでいる図書と関連のある内容の新聞記事を随所に掲示。

複数の新聞社の新聞を常に生徒が見られるように開架。また、生徒が興味のありそうな記事を学校司書が図書館にて紹介するコーナーも設けた。本・新聞を分け隔てなく開架することで、様々な情報源から生徒が必要な情報を得られるようにした。

３．授業における新聞の活用

本年度は全学年で新聞を用いた授業を積極的に行った。例えば２年生の総合では、グループで考えたテーマに関する新聞記事を、グループで探し、集まった新聞記事を分類・整理する取り組みを行い、情報の分類・整理の仕方について学んだ。

グループで決めたテーマに関する記事を集める。

グループで集めた記事を分類・整理する。

また、２年生国語では単元「意見文を書こう」において、自分が選んだ新聞記事について、感じたことや考えたことを小論文にまとめるといった学習活動を行い、生徒が情報に対して批判的に向き合えるよう指導を進めた。

自分の興味のある記事について、意見文を書く学習活動。

また、学校・学年行事等の事前・事後学習と絡め、自分たちで新聞を書くという学習活動を推進した。初めて新聞を書く生徒たちは、難しさを感じていたが、徐々にどのスペースにどの内容を記載するか、興味深く吟味するようになり、他者が書いた新聞記事に興味を持って読むようになった。また、一人一台端末を活用し、文書作成ソフトで新聞を作成することも行った。

3年2組新聞

京都観光について

京都には観光出来るところが沢山あります

例えば金閣寺や清水寺とかです

伏見稲荷大社とかも有名です

金閣寺

清水寺

伏見稲荷大社は千本鳥居がある有名な神社です

「鳥居を献ずることによって願いが通る叶う」と言われています

伏見稲荷大社

清水寺は北法相宗の大本山の寺院のことです。丘にあるのが有名です

金閣寺は池に一つだけ金のお寺がある建物です

1397年足利義満が作り、いまも残っています

発行年月日 2021年4月25日

[redacted]

みんなの京都観光ランキング

1. 清水寺
2. 嵐山
3. 金閣寺
4. 二条城
5. 銀閣寺

修学旅行前に、行き先について調べ、新聞にまとめる。

野外活動後の事後学習「野外活動の思い出を新聞にまとめよう」

２年生３学期に進路学習に一環として興味のある高校について調べ、新聞にまとめた。

２年生トライやる・ウィークの事後学習で、トライやる・ウィークの思い出を新聞にまとめた。

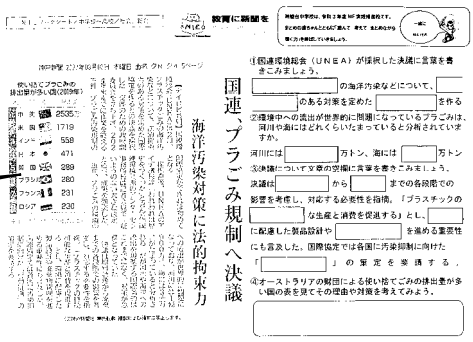
社会科の授業においては、昨今のニュースについて新聞を提示しながら説明したり、社会科の授業において株式について学習した際に新聞に掲載されている株価の面を掲示したりした。音楽科の授業においては著名な作曲家や音楽について新聞形式にまとめるなど、様々な教科の授業において新聞を活用した実践が行えた。

４．記者派遣事業

１年生を対象に、朝日新聞社神戸総局の堀江総局長に来校いただき、「情報リテラシー」をテーマで講演をしていただいた。講演では新聞記者ならではの情報の集め方や、実際に世の中に広がってしまった偽の情報の事例について触れ、世の中の情報との接し方について教えていただいた。その他、新聞社の概要や新聞がどのように作られるのかを学ぶ機会となった。

５．新聞記事をまとめる学習

朝の学習時間において新聞記事の内容をまとめ、文章を書く力をつける「まとめの達人運動」を年間を通じて展開した。



新聞記事を読み、内容をまとめるワークシート

６．おわりに

２年間の実践指定の成果により、多くの生徒が新聞を身近に感じ新聞を読もうとする態度を育てられた。今後もNIE実践を継続し、生徒が新聞に親しめる環境を充実させたい。

新聞を活用し「言語能力・情報活用能力」の育成を図る

尼崎市立南武庫之荘中学校　校　長　屋敷　成治
主幹教諭　中嶋　勝

1.　はじめに

実践内容を報告する前に、本年度の卒業式で述べられた学校長式辞の一部を引用させていただく。

「国語科を中心にNIE(新聞を教材として活用する活動）を取り入れ、言語能力や情報活用力の育成にも力を入れてきました。新聞記事を要約し、グループ討議を繰り返し、ノートにまとめて発表し、地球温暖化や森林破壊、SDGs、いじめ、SNSなどのテーマに意欲的に取り組んでくれました。成果として、表現力や創造力、協力して課題を解決する力が身につき、結果として学力も向上しました。入試前に面接練習をしていても、暗記したうわべだけの答えでなく、しっかりと自分の考えが述べられる生徒が多いのに驚きました。また、練習にも熱心で、校長面接を何度も申し込んでくる生徒がたくさんいました。面接や作文中心の推薦、特色入試では、３年間地道に取り組んできた結果が顕著に出て、多くの生徒が合格を手にしました。生きていく力の基礎を中学校で着実に身につけてきた皆さんは、自信をもって、明日の入試はもちろん、４月からの新しい環境で、次のステップに進んでください」（令和４年３月９日）

NIE に取り組んできた成果を具体的に捉えることは難しく、学年末を振り返ってみると頭を悩ませる課題であるが、学校長式辞にあるように、２年間の NIE 活動が「表現力や創造力、協力して課題を解決する力が身につき、結果として学力も向上」させたといえるのではないだろうか。

【南武庫之荘中学校実践計画の概要】

実践指定２年目であるので、昨年度とほぼ同じ概要である。

１　国語科を中心にNIE活動に取り組む。

２　さまざまな分野の新聞記事を掲示し、世の中の動きに関心を持たせる。

①校内のさまざまなコーナーに新聞を掲示し、社会の動きに関心を持たせる。

②新聞を使った生徒作品やスクールサポーターが作成したものを廊下に掲示する。

３　コンクール等に応募する。

①日本新聞協会主催「いっしょに読もう新聞コンクール」

②神戸新聞主催「ひょうご新聞感想文コンクール」など

③新聞社への投書

４　新聞の構成や特徴、新聞記者の思いを学ぶために新聞記者派遣事業を利用する。

５　国語科の授業実践例

見出し作り・ハガキ新聞作り・新聞紹介・新聞ノート・コラム写し・まわし読み新聞・新聞スクラップ作り・各紙の記事比較・投書欄への投稿・社説の要約と比較など

３年生を対象に学年末におこなったアンケート結果は以下のとおりである。(169 人回答)

【質問 1】３年間の NIE 活動を振り返って、新聞を読むことや社会問題に興味を持てましたか。

a. 興味を持てた　35.5%　(60 人)
b. 少し持てた　58.0%　(98 人)
c. あまり持てなかった　4.1%(7 人)
d. 持てなかった　2.4%(4 人)

a と b 合わせると 93.5%にあたる生徒が興味を持つことができたと回答していることから、NIE 活動を通して、ほとんどの生徒が新聞を読むことや社会問題に興味を持てたといえる。

2.　本年度の実践内容

以下、生徒の感想をもとに実践内容を簡単にまとめさせていただく。本年度は主にコラム写しと、「新聞ノート」に取り組んだ。

⑴「新聞ノート」

１学期は昨年度同様に、自分が選んだ記事のをワークシートに沿ってまとめていた。[①記事を選んだ理由②新聞記事の見出し③記事の要約（100 字以内）④気づき（新しく発見したこと・驚いたこと・なぜと思ったこと）⑤課題あるいは感想や意見。（200 字以内）⑥疑問な点を調べたこと（インターネットや他の記事などで知ったこと）または、今後調べてみたいこと]

しかし、2022 年８月の NIE 宮崎全国大会に参加させていただき、宮崎西高等学校の発表から学んだことを２学期以降の新聞ノートに反映させた。

<u>２学期　新聞ノートについて</u>　　2022．8.29

①ノート左側に記事を貼る。
　大切なところなどにラインを引く。枠を囲む（蛍光ペンや赤ボールペン）

②ノート右側は、今まではワークシートを使って要約、感想を記入していたが、２学期からは、以下のようにする。
　(ア)ノート上段に　新聞名、記事の日付、ノートの記入日を記入する
　(イ)記事の内容をまとめたり、図にしたり、イラストを描く。自分の意見も書く。
　(ウ)色を付けるなど、見やすく工夫する。

③提出日は、全員、毎週月曜日の朝　国語係が集めて、２階控室前の長机の上に置く。
　（毎週、金曜日までに返却する）
　時間に余裕のある人は、月曜日だけでなくその他の日も出して構わない。

④評価
　(ア)提出回数
　(イ)ノート右側の内容　とした。

１学期までの新聞ノートとの違いは、自分で記事を選び自由にまとめることである。特に色ペンを使って記事の内容をイラストや図表にまとめ、相手に分かりやすくまとめることは、生徒たちの創造力を育てることにつながり、さらに深く考える力を培うことができたと思われる。また、分かりやすくまとめられた新聞ノートを、廊下にたくさん掲示することで、他の生徒が選んだ記事や、まとめ方を知り自分のノートに活かすことができた。

【生徒感想】

■　最初はなんでこんなことしないといけないのかと思っていたけど、回数を重ねるごとに自分が取り上げた記事について気になったことを調べたり、自分の考えを持つようになったりして知識欲が満たされていって楽しかったです。特に自分で記事についてまとめるのは試行錯誤が必要なので普段の授業のノートもきれいにまとめられるようになりました。

■　重要なことを自分でまとめ、見た人にも記事の内容を読まなくとも伝わるように作るのが楽しかった。また、廊下に貼られている他の人の新聞ノートを見て、自分も参考にしてみようと積極的に取り組めた。正直サボりたくなるときもあったが、先生からのちょっとしたメッセージでやる気になれた。

■　週末の課題として出されていて少し面倒くさいと感じることもあったけど新聞ノートのおかげで、自分で調べてそれを自分でまとめるという能力がついたと思うのでちゃんと毎週やっていてよかったと思います。

■　新聞に目を通す機会が非常に増えました。新聞ノートをするまでは、新聞の表紙の記事に興味があったら少し読むという感じだったが、興味がなくても、読むことで自然とその記事の内容が気になったりして読むということがとても増えました。新しく興味が湧いたジャンルもたくさんあります。高校になって新聞ノートをしていなくても継続していきたいです。また、要約する力もつきました。この力は高校や大学にも大切な力だと思うので大切にしていきたいです。

■　１、２年生では文章を構成するのが上手になり、他の文章を書く機会でも応用できた。３年生では絵や図表を使いわかりやすくまとめられるようになった。プレゼンテーション

のスライドを作る要領に似ているものがあり、これからも使えると思う。

⑵「コラム写し」

朝学習の時間、基礎学力の時間、自習時間などを使って１年生の時から、新聞コラム写しに取り組んできた。コラム写しで培う力は、語彙力や文章構成力である。生徒たちは初めはやらされ学習という捉え方であったが、コラムを写して感想を書く、知らない語句を調べるという課題が、自分の文章を磨くために大変有益であると気付き、主体的にこの課題に取り組んでいた。3 年生の推薦入試で出題される記述問題や小論文対策にとても役に立ったと、振り返りに書く生徒がたくさんいた。

【生徒感想】

■　コラム写しでは、記者の人の気持ちなども描かれており、読むととても面白く興味へとつながりました。さらに、コラムを写すことにより、自分が書き写しながら文の構成を知れたり、内容を知れたりできました。他にも、自分で見出しを考えたり、感想を記入したり、自分で語彙を調べることで、自らで何かをする力が強まり、とても良い経験でした。

■　読むだけではなくて、書くと自然と頭に入ってきた。見出しを考えるのは大きな内容をまとめる力が必要になってくるからとてもよかった。また、３行感想も文章を長々とかけないから、自分の意見を端的にまとめる力がついたと思う。わからない語句は調べたので、この３年間でたくさんの言葉の引き出しを増やせた。

⑶「記事の紹介」

本年度はあまり実施できなかったが、新聞ノートでまとめたことを制限時間内（２分）で発表する。新聞ノートをプロジェクターで投影し、記事の内容と自分の意見を伝える。これにより、記事に書かれた内容をより深く理解し、考えを明確にして相手に伝える力が培われた。

【生徒感想】

■　自分で一から作り出したプレゼンを、いろんな人に聞いてもらうのが楽しいと感じた。はっきりと自分が思っている意見を発表できる機会があるのは、素晴らしいなと思った。相手と意見を交流できる場にもなっていたから、いろんな人の意見を聞けて楽しかった。

■　人前に出て、発表するのは緊張したけれどスライドを工夫したりどうやったらまわりの人が理解しやすいか考えたりするのはとても楽しかった。少しずつ慣れてきて最後には周りを見ながらリラックスして話せるようになったと思う。班の人と協力して楽しく学べて良かった。

⑷新聞記者派遣

２年間で「阪神淡路大震災」「主権者教育」「いじめと SNS」「ウクライナ侵攻」「新聞記者の仕事」をテーマに、新聞記者の方に講演していただいた。新聞記者の方がどのような思いで記事を書いておられるのかを実際に聞くことで、社会への関心を深めることができた。

【生徒感想】

■　「主権者教育」では、投票することの意味や大切さが知れた。18 歳になったら、選挙に行ってみようと思った。

■　１年以上続いている一方的な戦争について記者目線で僕達に丁寧に説明してくださってとてもわかりやすかった。また、戦争の悲惨さや無意味さなどを改めて感じることができ、早く戦争が終わればいいと心から強く思うことができた。

■　自分たちと年が近い記者が丁寧に新聞記者という仕事について語ってくれて新聞記

者という仕事についてイメージが湧きやすかった。

■　新聞記事を作った人や実際に取材に行った人の意見を聞くことができて、より身近に感じられた。特に「阪神淡路大震災」は体験していないのでわからないことがたくさんあったけれど、当時の様子や街の様子を知ることができて地震の怖さを感じた。

⑸「壁新聞掲示」

本校スクールスタッフの田中さんが、生徒たちの意識を高めるために、投書欄、学習、生き方、SDGs など生徒たちの興味を引くような記事、また、読んでほしい記事を選び、壁新聞にまとめてくださった。そのおかげで、休み時間や移動教室までの隙間時間に多くの記事に触れることができた。

【生徒感想】

■　移動教室のとき、並んでいる時や帰ってきたときに読んでいます。教室の近くにあるクイズも、色がついていてとても見やすいし、私が知らなかったことばかりでとても面白いです。いつもと同じ廊下でも、新聞が貼っていてしかも面白い記事ばかりなので廊下を歩くのが楽しいです。

■　廊下に貼られている新聞はマーカーや色ペンでわかりやすくまとまっていて、つい立ち止まって読んでし合うような魅力があります。たくさんの良い記事をわかりやすく、教えていただきありがとうございます。

■　僕は朝登校するのが早く、友だちが来るまでは一人です。しかし、その間に壁新聞を読み、最近起こったことや、注目されていることなどを知れて、とても良かったです。

最後に、本年度末の生徒アンケートの抜粋を紹介して報告のまとめとしたい。

【３年間の NIE 活動を通じて、どんな力が身についたと思いますか。できるだけ具体的にかいてください】

■　要約したり、自分の考えを書いたりする力がついた。それが受験の小論文の練習にもなった。記事の中でどの部分が大切で伝えたいことなのか、読み取ることができた。

■　要約や自分の考えを書くことによって、文章を読むのが早くなりました。私は元々文章を読むのが苦手だったけれど、入試の小論文でもスムーズに自分の意見を書くことができるようになりました。この NIE 活動を通して読解力がついた気がします。

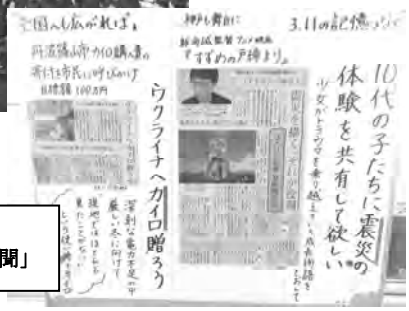
■　記事一つ一つに取材者の気持ちがこもっているのを知って、新聞の裏側を知れた気がしました。新聞は情報をただ得るものだと思っていましたが、その裏側にはいろんなストーリーがあることを知って新聞自体に興味を持てました。知らないことを知ったときの嬉しさや納得できたときの気持ちの良さを学びました。

■　文の量が多くても、内容を要約する力が身についた。また、多くの新聞に触れることで、情報を理解する能力が身についた。他にも、社会の情勢を掴んだりする情報把握能力も身についた。

【まとめ】

以上、本年度の NIE 活動を生徒たちの感想をもとにまとめとさせていただいたが、新聞を活用した授業を組み立てることは、思考力・判断力・表現力を高め、本校の研究テーマである「言語能力・情報活用能力の育成」につながるということは、生徒たちの感想からうかがうことができる。今後も工夫しながら NIE 活動を継続していきたい。(2023.3.31)

三好記者の講演
「ウクライナ侵攻について」



スクールサポーター
作成の「壁新聞」

NIE活動を通して、時事問題に興味・関心を持たせ、主体的に学習を深めようとする態度の育成の継続

加古川市立志方中学校　　校　長　　廣居　洋三
教　諭　　小山　真輔

１．はじめに

本校は、NIE 実践指定校２年目となった。本校は加古川市北部に位置する全校生徒 183 名の学校である。小規模校ではあるが、生徒同士の仲はよく、生徒と教師のコミュニケーションもよく取れており、生徒の様子も比較的に把握しやすい。また、「人の心がわかる　あたたかみのある人づくり」を学校教育目標として、人権を尊重する学校文化を築くための人権教育や道徳教育に力を入れている。

昨年度から引き続き、新聞（紙面・電子版）を購読していない家庭が約半数ほどある。新聞を家庭で購読していない生徒の中には、新聞に触れる機会がほとんどない生徒もいる。

そこで、生徒が新聞に興味・関心を持たせることが必要であると考え、昨年度から継続して、実践のテーマを「NIE 活動を通して、時事問題に関心を持たせ、主体的に学習を深めようとする態度の育成の継続」とした。

そのテーマの下に、社会的事象や時事問題を授業中に扱うことで、様々な視点から物事を考え、考察し、多角的な視野を持って、正しい判断ができる生徒の育成を目指して今年度も活動を行った。NIE 活動を通して、興味・関心を持ち、社会的事象や時事問題について、主体的に調べ、自ら学習を深められる生徒の育成を最終的な目標とした。

まず、「新聞閲覧コーナー」を設置した。本年度は、昨年度の反省から閲覧コーナーを１カ所ではなく、各学年に設け、生徒が新聞にふれる時間を十分に確保できるようにした。こうすることで社会的事象や時事問題などをより身近に感じられるように考えた。また、社会科や総合的な学習の時間などの授業では、新聞記事や各新聞社が作成した NIE ワークシートを活用して、新聞記事や時事問題に興味・関心を持てるように促すことも継続して進めた。以下の実践報告でより詳しく内容を紹介していく。

２．実践報告

さて、本年度の NIE 活動・実践の報告として、６つの取り組みを詳しく紹介する。

①新聞閲覧コーナーの設置

新聞に興味関心を持ち、新聞が日常的にある環境をつくるために、各学年の廊下に「NIE 新聞閲覧コーナー」を設けた。前日の夕刊、当日の朝刊（土日分は月曜日にまとめて提示）をそれぞれ、６紙のうち、２紙ずつ配置するようにした。

昨年度は１カ所のみに設置したが、各学年に設置したことで、新聞を購読していない家庭の生徒もこのコーナーで新聞に触れ、興味のある記事を見つけ、新聞を読む機会を与えることができた。また、３年生では、平和学習や公民的分野と関連する記事を授業で紹介するなどして、新聞記事の内容や時事問題に興味を持たせることに努めた。その結果、新聞の報

道に興味を持ち、毎日、新聞に目を通すようになった生徒も増えたように思われる。

また、新聞６紙を日替わり設置することで、それぞれの紙面に触れる機会があり、同じ事象を違った視点から報じていることにも興味を持つ生徒も増えたように思われる。

各学年に設けた新聞閲覧コーナー

さらには、興味や関心のあった記事について、友達同士で会話をしている姿も見られ、教師が声をかけるとその内容について教えてくれる生徒も増えたように思われる。授業で生徒が読んだ記事を話題に出すと、その内容について、考えたことを授業後に報告しにくる生徒がいたり、また興味を持った違う内容の記事について報告をしてくれたりする生徒もいた。これらにより、生徒とのコミュニケーションする機会がより生まれ、生徒理解を深める良い機会となった。

②授業や総合的な学習の時間における新聞ワークシート・新聞記事の利用

社会科の授業をはじめとし、各教科に関係のある新聞記事や新聞ワークシートを利用して、各単元への導入などを継続して行った。

また、総合的な学習の時間では、平和学習において、戦争体験者の体験談や平和式典などの記事をあつかった新聞ワークシートや新聞記事を利用した。そこに書かれたことを読み取ったり、記事を読んだ感想を書いたりすることで、戦争や平和に関する知識や平和を願う思いを強くすることにつながったように思われる。

本年度はウクライナとロシアの戦争に関する記事を目にする機会が多くあったり、授業中に新聞記事を使い、戦争についての話をしたりすることで、世界各地で、戦争は「今、この時」にも起こっていることを実感する機会になったようである。夏休みの人権作文や平和に関する作文では、ウクライナのことをテーマとして掲げ、新聞記事の内容を使った作文を書く生徒も多かった。

今後も新聞記事や新聞ワークシートを効果的に利用した授業ができるように検討していきたい。

③新聞読書感想文

昨年度は、３年生のみを対象として実施したが、本年度は全校生に募集をかけて、新聞読書感想文に取り組んだ。新聞を購読していない家庭もあるので、夏休みの自由課題として実施した。夏休み中に新聞を読む機会が増えたという生徒がいた。参加した生徒の感想文には、自らの生活と結び付くような話題を扱った記事について感想を書いたり、自分が知らなかったことや疑問に感じた内容の記事を取り上げたりする生徒も数名いた。自由課題として設定したので、家庭での新聞購読の関係もあり、全員の参加とはならなかったが、新聞記事や社会的事象に興味・関心を持たせる良い機会となったように思われる。

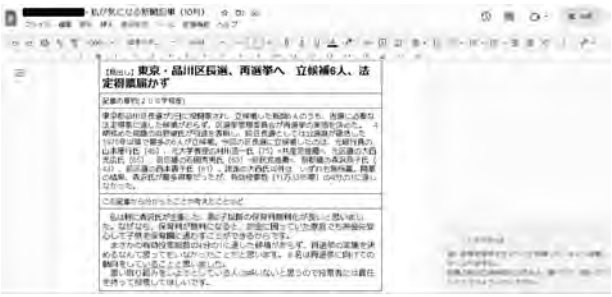
④興味ある新聞記事についてのレポート

３年生を対象にして、自分が興味を持った新聞記事についてのレポートを作成した。様式を指定して、２日間分の新聞

記事をレポートにまとめた。レポートには、記事の内容の要約、記事を読んだ感想やそこから考えたこと、わかったことを記入した。そして、Google Classroomを用いて提出する形式をとった。

時事問題を扱った記事を取り上げてレポートを作成した生徒が多くいた。レポートの提出を 10 月末に設定していたこともあり、梨泰院の事故の記事を取り上げて、過去の明石での歩道橋事故と関連付けたレポートが多く見られた。事故の記録を関連付けた感想や同じような事故が起こらないようにするにはどうすべきかを自分なりの言葉で書くことができた生徒もいた。

また、ウクライナとロシアの戦争について取り上げた記事のレポートも多く見られた。ここでも平和学習で行ったことや考えたことが活かされ、時事問題に興味・関心を持ち、自ら調べてみようとする主体的な態度の育成につながったように感じられた。



Google アプリを使った「興味ある記事についてのレポート」と添削

レポートの中でも選挙関係の記事を選んだ生徒が考えたことは、「私は、第２子以降の保育料無料化が良いと思いました。なぜなら、保育料が無料になると、経済的に困っている家庭でも安心して子供を保育園に通わすことができるからです。しかし、まさかの有効投票総数の４分の１に達した候補がおらず、再選挙の実施を決めるなんて思ってもいなかったことだと思います。悪い取り組みをしようとしている人は、いないと思うので投票は責任を持って投票してほしいです」とあり、政治に関する興味や関心がみられ、自分の意見をしっかりと書けていることがわかった。

⑤記者派遣事業

１月 18 日に兵庫県NIE推進協議会事務局長の三好正文氏を招いて、「震災学習～阪神淡路大震災 28 年目～」と題して、授業形式の講演をしていただいた。

コロナ禍であったので、１・２年生の代表生徒 10 名が三好氏とともに阪神淡路大震災などについて学習をした。その講義の様子を１・２年生の教室にオンラインで配信した。事前資料とパワーポイント資料、1 月 18 日の朝刊などを用いて学習が進められた。

そのなかでもとくに三好氏が神戸新聞社で体験された阪神淡路大震災当時の様子やその後の取材の様子について話をされる内容から、生徒たちは当時の震災被害の大きさや震災を体験された人々の思いに寄り添ながら、考えを深めたり、今後の自己の生き方について考えたりすることができた。

生徒の感想を一部紹介すると、「いつ地震が発生するかは、誰にもわからない。地震に巻き込まれたらきっとパニックになってしまうので、日頃から避難訓練でその時のことを考えたり、家族で話し合ったり、しっかりと備えておこうと思う」や「阪神淡路大震災は（体験していないので）私たちにはわからないような大きなゆれで、多くの人々の心や思い出、神戸の街に傷あとを残したことが分かりました。多くの被害を受けて、つらい思いをした人々がいることを忘れずに、このことを私たちが次の世代へ伝えていかな

ければならない」などがあった。

阪神淡路大震災を風化させてはいけないという思いを持つことにつながった。

記者派遣事業での授業の様子（コロナ禍であったため、代表生徒が講義を受けている）

各教室で新聞記事に目を通す生徒の様子

⑥社会科「EUから地域統合を考える」授業実践

１年生の社会科地理的分野、「ヨーロッパ州」の単元において、加古川市がすすめている協同的探究学習を行う際に、資料として新聞記事を用いた。学習内容については、EU（ヨーロッパ連合）による地域統合から、世界各地ですすめられている地域的な統合が何を目指すべきかを考えることである。

この学習においては、イギリスのEUからの離脱やRCEP（包括的地域統合）についての新聞記事を資料とした。中学１年生にとっては、記事の内容が少し難しかった様子ではあったが、内容を要約したものを併記し利用したので、いろいろな意見や考えを発表することにつながった。

その意見をもとにして、協同探究で考えを深めることにつながった。中心発問は、「地域的な統合することでどのような社会を目指していくべきだろうか」とした。生徒の意見には「自分の国の利益も大切だけど、他国の利益にもなるようなことを考えられる、経済格差がなくなるような発展ができる社会」などの意見が見られた。

以上が本年度の取り組みである。

３．終わりに―成果と課題として―

本年度は、NIE 実践校に指定され２年目の年度であったが、十分な活動ができたとはいえない。実践校に指定されていた２年間は、コロナ禍で教育活動に制限があり、NIE 活動にも少なからず影響があったように感じている。しかし、少しずつではあるが、新聞記事や社会的事象に関して、興味や関心を持たせることができたように感じる。今後は、新聞記事だけでなく、さまざまな資料から考えを深め、主体的に考え、関わろうとする意欲を育成し続けたい。

また、NIE 活動に対する知識や理解の不十分さが依然あった。これを解消するためには、NIE 活動とは何かを全職員が理解をさらに深めるとともに、新聞記事を授業で利用し、現代的な課題も扱ったりすることが、NIE 活動につながると理解することが必要であるといえる。NIE 活動を実施するにあたっては、すべての教職員が理解を深められるよう研修会を充実させることも必要であったと考える。

２年間の実践校での活動はこれで終了するが、今後も生徒自らが興味のある新聞記事をまとめたり、さらに新聞に触れる機会をより多く持たせたりできる方法を考え、社会的事象に興味関心を持ち、主体的に学習を深めようとする態度の育成に継続して努めていきたく思う。

新聞の良さを発掘する

神戸市立丸山中学校　西野分校　　校長　　林　　竜弘
教諭　　阿部　俊之

１．はじめに

本校は、本年度はじめて NIE 実践指定校となった。本校は丸山中学校の分校として 1950 年１月 16 日、戦後期の混乱や同和差別、貧困などから、昼間学校に通えない児童生徒を救済する目的で開設された。昭和 30 年代に夜間学級が閉鎖されていく中、地域の援助もあり県下唯一の夜間中学校として西野分校は存続し、現存する夜間中学校の中では最も長い歴史をもっている。西野幼稚園の園舎の一部を借用して始まったが、1995 年１月の阪神・淡路大震災で校舎が倒壊し、運動場に設置したテントでの授業、近くの小学校校舎を借りての授業を経て、現在の地に校舎を移し、本分校は今年で開校 73 年目を迎えている。

国籍				男	女
	インドネシア	1	人	1	0
	シリア	3	人	3	0
	中国	5	人	2	3
	日本	6	人	2	4
	ネパール	7	人	3	4
	フィリピン	1	人	0	1
	ベトナム	5	人	0	5
	計	**28**		**11**	**17**
年齢	１０代	4	人	1	3
	２０代	4	人	1	3
	３０代	8	人	6	2
	４０代	6	人	1	5
	５０代	2	人	0	2
	６０代	1	人	1	0
	７０代	3	人	1	2

（令和４年 11 月 30 日現在）

現在、生徒の約８割が外国人である。10 代から 70 代まで、さまざまな国籍・年齢層の人たちが一つのクラス・学年に在籍し、共に助け合って学んでいる。中国語・ベトナム語・アラビア語・ネパール語の子ども多文化共生サポーターの援助を受けながら、学級活動や行事を行っている。

授業では学年の枠を外し、生徒の学力・日本語力によって習熟度別の６クラスに編成し、少人数授業を実施している。クラスは毎月見直し、必要に応じて編成替えをしている。音楽・体育・美術・技術家庭などの実技教科は３学年合同で行っている。書道や防犯・防災教室などの特別授業、また、道徳・人権学習の授業も行っている。

このような環境の中で NIE の実践をどのように行っていけばよいのか分からず、手探り状態で始まったが、本年度は新聞の中から新しい学びの材料を見つけ出し、教科を問わず多角的な視点から生徒にアプローチしていきたいと考えた。一人一人の生徒が新聞記事を通して正しい日本語を身に付け、新聞に興味・関心を持つことを目標に、各教師がそれぞれの授業で創意工夫しながら活動を始めた。

２．実践報告

さて、本年度の NIE 活動・実践の報告として、次の六つの取り組みを紹介する。

①新聞閲覧コーナーの設置

新聞に興味関心を持ってもらうために、登校してきてすぐに目につく場所にコーナーを設けた。ただ、本校は昼間は太田中学校の生徒が行き来する関係で常設することはできないので、毎日教師が机を出してきて、前日の夕刊、当日の朝刊を並べた。また、過去の新聞も閲覧・貸出ができるように、別室に新聞社別にスペースを区切って保管した。

（登校してすぐに英字新聞を手に取る生徒）

他社の新聞が並べて置かれているので、写真を見比べながら、日本語新聞のタイトルを見たり、教師が簡単な日本語で説明したりした。写真の人物、場所、事物など、そこから話が広がっていくことも多く、授業前に語り合う良い機会となったように感じた。

②波紋読み（造語）

波が、振動の方向（上下方向）と、伝わる方向（前後左右方向）との２種類の方向を持っているように、きっかけになる言葉を深く理解していくことと、その言葉から次の言葉（話題）へと広がっていくことの二つが同時に起こってくる読み方。

（日本語初級クラス）

・５Ｗ１Ｈ

付箋に「いつ、どこ、だれ、なに、どんな、なぜ」を書いて、黒板一面に貼った新聞に、その付箋を貼っていく。

「いつ」は数字で表現されていることが多くどんどん貼っていくことができた。「どこ、だれ」もカタカナを探したり、「いつ」の近くを探したりしながら何とか貼ることができた。しかし、「なに、どんな、なぜ」はハードルが高くて、今の日本語力では対応できなかった。

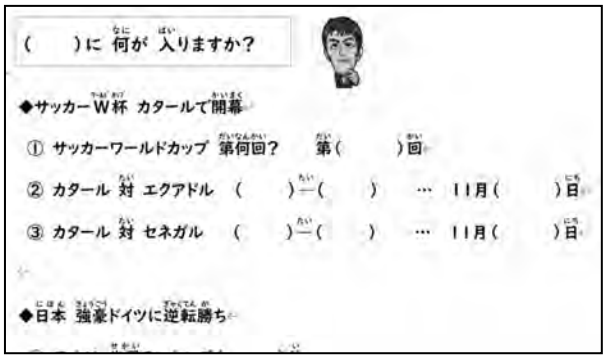
・数字をさがそう

小学生新聞を使って数字を起点にして新聞を読む授業に取り組んだ。小学生新聞を選んだ理由は、やさしい日本語で書かれていたからだ。難しい言葉をなるべく簡単な言葉に言い換えてあること。1 文を短くして、文の構造を簡単にしていること。使用する漢字や、漢字の使用量に注意していること。漢字にはすべてルビが振ってあること。あいまいな表現はできるだけ避けていること。そして、何よりも常体（だ・である調）でなく、敬体（です・ます調）で書かれているからだ。外国人が日本語の学習をするときは、ていねいな言葉づかいで話せるように「です・ます調」の文章から学び始めるので、小学生新聞の文章は非常に親しみやすく、とても良い教材であると感じた。

さて、数字に注目して学習を始めると、生徒が次のことに気付き、学習が広がりだした。

(1)数字の横にある単位の意味が知りたい。

個、点、位、円、ヵ国、議席など、どんな意味なのか、どのような場面で使えるのかと、生徒の方からどんどん質問してくるようになった。



(2)固有名詞に気が付く。

何度も出てくる言葉は、場所や人を示すので

はないかと気が付き、どこにあるの？どんなひとなの？と話題がどんどん広がっていった。

(3)過去や未来にも興味・関心を示す。

今起こっている出来事を知ると、なぜそのようなことになったのか、これからどうなっていくのかということに興味関心を持つようになった。

・チラシを用いて

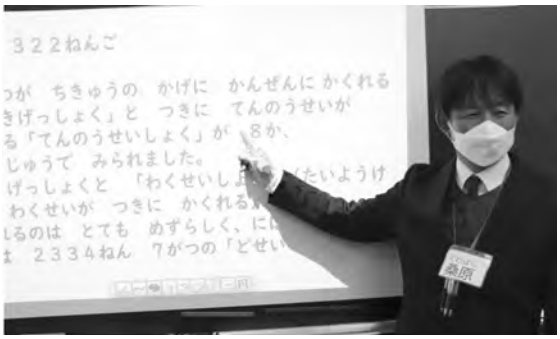
ちょうど日本語学習で比較の勉強をしていたので、習った日本語を用いて生の情報に触れるためには、生鮮食品のチラシは最適だと考え教材として使ってみた。

初めは値段の比較を練習していたが、途中から品物の名前や買い物の体験などを話すようになった。日ごろは間違うことを恐れてなかなか発言できない生徒も、自分が体験したことを何とか伝えようと一所懸命に片言の日本語で話をしていた。「話したい」という思いが「間違ったら恥ずかしい」という気持ちを上回ったのは、やはり生活に直結した生きた教材の力だと感じた。今後、日本語運用能力が上がれば、新聞記事の読解にも結び付けていきたいと思っている。

③なるほど、そうだったのか

（日本語中級クラス）

日本語を母語としていない生徒に日本語を正確に聞き取る練習をするために新聞記事（日本語）を、穴埋め問題にしたプリントを用意して、ディクテーション（読み上げて書き取る作業）をした。

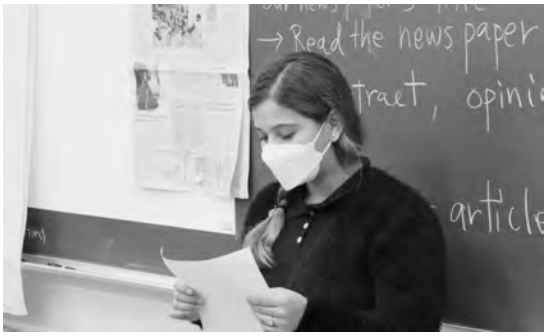


新聞の記事は時事問題を取り扱っており、普段日本のニュースに触れることの少ない生徒にとって、現在日本で起こっていることを学習するよい機会となった。教科書では触れることない語彙に触れるとともに、その意味を解説することで、習得語彙数を増やすことも今後期待できると感じた。

④英字壁新聞を作ろう

（英会話を聞きとる・話すができるクラス）

英字紙から自分が興味を持った記事について、内容の要約やそれを選んだ理由や感想などについて英語で発表。



その後、壁新聞制作にチャレンジした。

新聞の記事の内容に刺激を受けて、他の友人がどんな内容に興味を持っているかを理解することができた。

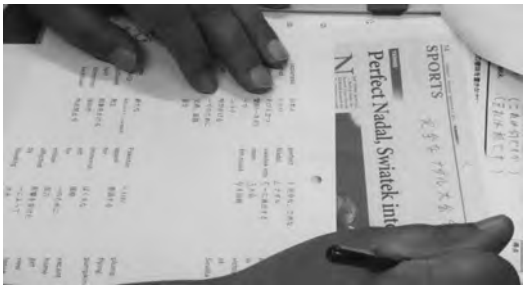
課題としては、英語を書く力をより向上させて、できるだけ文法の間違いをなくすように、日々、英字新聞を読むことに慣れ親しむ

ことを目指していきたい。

⑤タイトルを類推しよう

（英語初級クラス）

英字紙の記事のタイトルを和訳することにチャレンジした。タイトル中の英単語の一つ一つを辞書で調べて書き並べ、それをつなげて日本語の文章にしていくことができるのか。



ヒントは写真と他紙の記事。活発な意見交換の場となった。

⑥記事＋人生経験で深読みしよう

（日本語上級クラス）

多様な学習者が互いに補いながら記事を読み込んでいく授業。さまざまな人生経験をもつ生徒の琴線に触れる話題について、記事を読解し、意見を述べ合うことを目標に行った。学習者に応じて「ふりがなあり」も準備。

国語ＦＡＸ　教材　二〇二二年　一一月三〇日

編集委員インタビュー

（ＮＰＯ法人「Ｌｅａｒｎｉｎｇ　ｆｏｒ　ＡＩＩ」代表理事　李炯錄さん（３１）に聞く）

子どもの貧困、現状どう見ますか

社会階層分断、地域が支えを／変えないと日本の未来ない

（神戸新聞 2022/11/27 日曜日 朝刊）

東京大学には高所得世帯で育った学生が多いと聞く。尼崎市出身の李炯錄（りひょんしょく）さん（３１）は東大生の時に教育格差を目の当たりにし、この問題をライフワークに掲げた。２０代半ばでＮＰＯ法人「Ｌｅａｒｎｉｎｇ　ｆｏｒ　ＡＩＩ（ラーニング・フォー・オール）」を設立し、これまでに一万人以上の子どもの学習支援や居場所づくりに奔走してきた。李さんを突き動かす危機感とはどんなものなのだろう。現場に身を置き、子どもたちと向き合う中で見えてきた課題は、じっくり聞いてみた。（永見将人）

尼崎で育った経験が今の活動につながっていると聞きました。

年配の学生は、敗戦後の児童労働のイメージが強かったし、他の生徒も現代の「子どもの貧困」が「目に見えない」ことに驚き、共感しつつ理解していくことができた。

言語面や内容面では高度だったが、多様な学習者が互いに補いながら読み込めていた。今後も新聞を通じて、見方を自ら伸ばせる習慣を育てていきたいと考えている。

⑦社会問題を見つけよう

（社会上級クラス）

社会問題に関する記事を切り抜いてポスターに貼り、その横に自分の意見を書く。その後、みんなの前で発表する形で授業を行った。人生経験豊富な大人の方々は、自らの経験と結びつけて「北朝鮮拉致問題」「円安打撃」「地球温暖化」「若者の活字離れ」などの記事を選んでいた。

授業が終わった後に「新聞を持って帰って家でもっと読みたい」というフィリピンの女性や、「私の書いた記事はどうですか。がんばりました」と笑顔でこちらの感想を聞きに来る中国の女性。

令和4年12月2日付け「朝日小学生新聞」

この新聞は漢字に全てフリがながついているので、とても読みやすいです。

政府の要請

節電

暖房の温度を下げたり使っていない部屋の電灯のスイッチをかったりして電気を無駄に使わないようにすることを求められています。電気が足りなくなる心配があるためです。

今、ロシアとウクライナとが戦争をしているので電気をつくるのに必要な燃料の輸入が難しくなったり値段が上がったりしています。

私たちはきちんと節電して停電しないように協力をする必要があります。

※燃料とは、天然ガス、原油、石炭。

また、不登校生だった 17 歳の生徒は、苦手ながらもポスターの文字を一生懸命書き込んでいた。教科書にはない学びがここにあり、新聞教育の持つ可能性を感じることができた。

３．まとめ

新聞は、正しい日本語（美しい日本語）と、正しい情報の宝庫。そこに、やさしい日本語が加わると、私たち夜間中学校の生徒にとっても新聞はかけがえのないものになってくると感じた。

新聞から考えを深める
～NIE スクールとしての取り組み～

加古川市立加古川中学校　　校長　　山本　照久
教諭　　橘　　脩平

１．はじめに

本校は、全校生徒 929 名、29 学級（1 年生８学級、２年生８学級、３年生８学級、特別支援学級５学級）の県下でも有数の大規模校である。また、加古川市の中心地に位置し、創立76年の市内でも最も古い歴史をもつ中学校のひとつである。本年度は、めざす生徒像を「Smart（かしこく）Tough（たくましく）Heartful（心豊かに）」と設定し、NIE の取り組みだけでなく、ICT を活用した取り組みや SDG s 達成に向けた取組を３ School Project（Smart School・SDGs School・NIE School）として推進している。NIE の実践に関しては主に２年生 319 名を対象として行った。

２．事前アンケートの結果

NIE の取り組みを進めていくにあたり、生徒の新聞にふれる機会についてのアンケート調査の結果が以下の通りである。

「家で新聞をとっていますか」

・とっている　… 37.3%
・とっていない … 62.7%

「新聞を見る頻度はどのくらいですか」

・毎日　　… 3.2%
・たまに見る … 27.4%
・見ない、新聞をとっていない　… 71.5%

「新聞に関心はありますか」

・とてもある、ある　… 16.3%
・どちらともいえない … 34.1%
・あまりない、ない　… 49.6%

アンケート調査の結果から、生徒らは新聞にふれる機会がない生徒が多く、新聞自体に関心を持っていないことがわかった。このことから、実践する取り組みにおいてはできるだけ生徒が関心を持ちやすいテーマや記事を用いることで新聞や記事の内容に関心が高まるよう配慮した。

３．実践内容

(1) 神戸新聞「若者 BOX 席」を用いた意見交流

朝学習の時間を用いて、事前に用意した「若者 BOX 席」の記事を読み、それについての考えを意見交流した。同世代の投書による「若者 BOX 席」を取り上げて意見交流させることで、一つの出来事や主張についてさまざまな意見があること、他者の意見を聞くことで自分の考えをより深めていくことを狙いとした。１週間単位で以下のような計画で実施した。

月～水曜

１日一つの記事を読み、自分の考えをまとめる。

木曜

もっとも印象に残った記事をあげ、同じ記事を選んだ人でペアをつくり、自分の考えを言い合い、聞いたことはメモをとる（時間があれば複数から）。

金曜

人の意見を聞いたうえで、自分の意見をまとめ提出させる。

【生徒の感想】

(「スクールバスで安全に登下校を」を読んで)

私は、M さんの話を聞いて、確かに事故にあったとき対応に困るし、それで人が亡くなったらとり返しがつかなくなると思いました。でも、徒歩でも事故が起こる可能性は０では

ないので私はバスでもいいと思いました。0さんの意見にはすごく納得しました。なぜなら、私が考えていた、夏の暑い日に熱中症になるからバスの方がいい、というのは夏だけでいいし、荷物が重いのは新学期がほとんどなので、必要な時だけニーズに合わせて走ればいいと思いました。それ以外の日にバスに乗ることは楽をしたいだけだと思いました。だから、私は走らせることに賛成だけど、毎日ではなく必要にあわせて運行すればいいに変わりました。

(2) 新聞記事を用いた意見交流

１人１部の新聞を配布し、その中から特に関心を持った記事に対する自分の考えについて意見交流を行った。新聞をしっかりと読むことが初めてとなる生徒もいたため、読み始める向きや見出しから関心のある記事を見つけていくことなど新聞の読み方から指導し、新聞をじっくりと読み込ませた。

新聞は、２年生だけで 319 名の生徒がいるため､NIE 用の新聞を１カ月分保管し配布した。約１カ月前の新聞を読む生徒が出てくることになるが、今回は同時期に１人１部の新聞を読むということを優先した。

この取り組みは朝学習の時間を使い、２週間の計画で実施した。

○１週目

月曜

新聞を配布し、読み方を指導する。

火～金曜

新聞を読み込み、気になる記事を選ぶ。

○２週目

月曜

選んだ記事について自分の考えをまとめる。

火～木曜

選んだ記事と自分の考えを紹介し、相手の意見を聞く

金曜

意見交流をふまえて自分の意見を再度まとめる。

【生徒の感想】

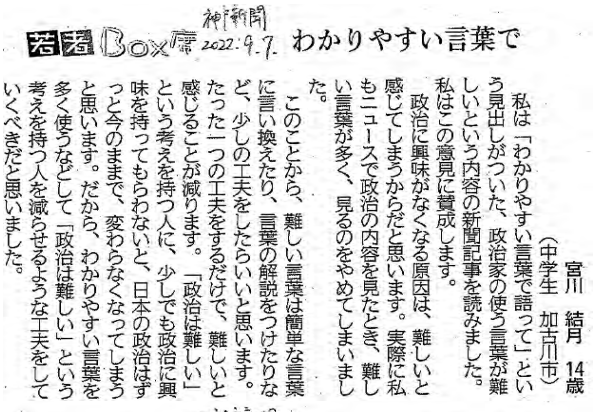
「露産の金禁輸合意へ」の記事を読んで

金の輸入停止することでロシアとウクライナの戦争の状況が大きく解決できるわけではないし、ロシア以外の国にも大きな損害があると思うので、他にもよい案はないのか考えてみる必要があると思いました。

U さんの意見のようにロシアに何かをやめさせるよりも、ウクライナへ直接的な支援を行う方が戦争問題は解決していくものなのかもしれないと思いました。

(3) 神戸新聞「若者 BOX 席」への投稿

(1)(2)の意見交流を経験し、気になった社会問題や普段気になっていることについて自分の意見をまとめ、投稿した。新聞記事で見た内容についてまとめる生徒も多く、社会問題への関心の高まりがうかがえた。また、12人の生徒の投稿が掲載され、掲載された生徒だけでなく、周囲の生徒も新聞にふれることが多くなっていた。



若者Box席 神戸新聞 2022.9.7 わかりやすい言葉で

宮川 結月 14歳 (中学生 加古川市)

私は「わかりやすい言葉で語って」という見出しがついた、政治家の使う言葉が難しいという内容の新聞記事を読みました。私はこの意見に賛成します。

政治に興味がなくなる原因は、難しいと感じてしまうからだと思います。実際に私もニュースで政治の内容を見たとき、難しい言葉が多く、見るのをやめてしまいました。

このことから、難しい言葉は簡単な言葉に言い換えたり、言葉の解説をつけたりなど、少しの工夫をしたらいいと思います。たった一つの工夫をするだけで、難しいと感じることが減ります。「政治は難しい」という考えを持つ人に、少しでも政治に興味を持ってもらわないと、日本の政治はずっと今のままで、変わらなくなってしまうと思います。だから、わかりやすい言葉を多く使うなどして「政治は難しい」という考えを持つ人を減らせるような工夫をしていくべきだと思いました。

若者Box席 神戸新聞 2022.9.27 メディアを上手に活用

上野 桃果 13歳 (中学生 加古川市)

私の通っている学校では朝学の時間にNIEをしている。NIEとはNewspaper In Educationの略で「教育に新聞を」という意味だ。最初の頃は、パソコンに配布された資料で友だちと意見交換をしていたが、先日、紙の新聞に変わった。

なぜ紙の新聞に変えたのか分からなかった。そもそもインターネットのニュースを読むことと新聞を読むことが一緒ではないかと思っていたのだ。二つの違いを調べてみた。インターネットは最新のニュースを速報ですぐに配信できる。それに比べて新聞は朝刊と夕刊の2回や号外でしか報道できない。インターネットは膨大な情報が載っているが、新聞は厳選された記事がまとめられている。NIEの時間にインターネットと新聞を両方利用してみて、新聞の方が内容が頭に入ってきやすく、意見交換しやすいと感じた。両方のメリットを生かせるように上手に活用しようと思った。

(4) 授業実践

Smart School の推進のため、ICT を活用した授業実践例を２つ紹介する。

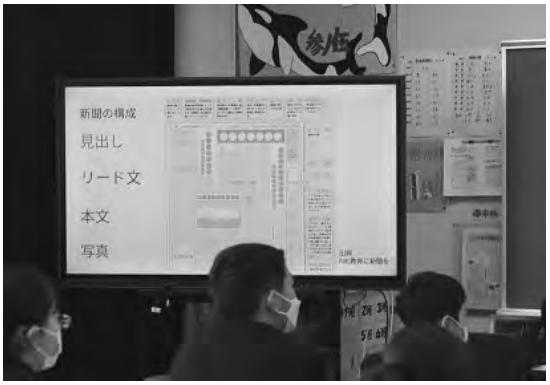
①「総合的な学習の時間」

(2)の新聞記事を用いた意見交流の取組の続きとして、選んだ記事の紹介や自分の考えを Google スライドにまとめ、発表させた。

記事に対する感想だけでなく、内容をクラスで説明するために自分で調べたことでより考えや知識を深めることができた。

②「国語科」

「情報社会を生きる」の単元で新聞記事を用いた授業を行った。生徒らは、同一の題材に対する内容の異なる新聞記事を読み比べ、事例の取り上げ方や印象の違い、表現のしかたなどに注意して読み、考えをまとめた。



過程	学習活動	指導上の留意点	ICT活用場面
導入	1．本時の学習目標を確認する。	・2つの新聞記事を比較して、共通点や違いを明らかにし、報道文を読む際に意識したいポイントを学習する旨を伝える。	○大型モニター ・Google スライドで提示する。 A1
展開	2．2つの新聞記事Aと記事Bを読む。	・記事Aと記事Bを通読する。	○大型モニター ・Google スライドで資料を提示する。 A1
	2つの記事を比べ、気づいたことや考えたことをまとめよう		
	3．「見出し」「リード文」「本文」「写真」の観点から2つの記事を比べ、気づいたことや考えたことをまとめる。 ・見出しは3単語が共通で使われている。 ・リード文の1文目はほぼ同じ。2文目は違う立場で書かれている。 ・同じ位置からの写真。	・事実をベースに書かれた「報道文」であることに注意させる。 ・受け取る印象はどう違うか。 ・使われている言葉に着目し書き手が何を伝えようとしているか。 ・どのような事実を報じているか。 ・どんな場面を写しているか。その写真を取り上げた意図は何か。	○chromebook ・ムーブノートを用いて個人の考えを記入させる。 B1
	4．気づいたことや考えたことをグループで伝え合い交流し、意見を深め、発表する。	・3、4人のグループをつくり、考えた内容を共有させる。 ・それぞれの観点でまとめたことを発表させる。	○chromebook ・ムーブノートを用いて意見を共有し、話し合い、グループの意見を提示・共有させる。 C2
	記事A・Bのそれぞれが独自に取り上げている内容や工夫を、1つずつ書いてみよう。		
	5．2つの記事がそれぞれ独自に取り上げている内容をみつける。 ・写真を複数使っている。 ・語句説明や平和宣言骨子を詳しく書いている。 ・様々な立場の人の意見を載せている。	・2つの記事を比較し、その違いをみつけさせる。同じ事実であってもそれぞれ何を論点としているか、明らかにさせる。	○chromebook ・ムーブノートを用いて個人の考えを記入させる。 B1
	「〈記事AまたはB〉のほうが、・・・が伝わる。」という形で、自分の考えを書いてみよう。		
	6．自分の意見を書く。	・自分の意見を書かせる。	
まとめ	7．本時を振り返る。	・報道文には、記者の意図が反映されていることを踏まえて、今後読むときに意識していくことを考えさせる。	

(5) NIE 記者派遣事業

神戸新聞ＮＩＸ推進部の三好正文シニアアドバイザーから６月に「新聞を使った調べ学習」、１月に「阪神淡路大震災」をテーマに授業をしていただいた。

①「新聞を使った調べ学習」

生徒たちは数人ずつの班に分かれ、各自が新聞各紙からイチオシ記事を選んでお互いに紹介した。Ａ３判の用紙に貼り付け、記事を選んだ理由やネットで調べたことを書き、ほかの生徒の用紙には、記事に対する感想を書

き込んだ。また、トライやる・ウィークの活動の一環として行ったため、新聞ができるまでの工程や記者の仕事も紹介していただいた。

②「阪神・淡路大震災」

阪神・淡路大震災発生から28年となる1月17日に出前授業に来ていただいた。密になる状況を避けるため、一部の生徒が講義を受け、その様子を全校生がGoogle Meetで参加する形で実施した。三好アドバイザーが新聞記者として経験してきた阪神・淡路大震災発生当時の様子や被災者の暮らしを聞き、生徒たちも地震の怖さや教訓、防災の大切さなどについて深く考えることができる時間となった。

【生徒の感想】

・阪神・淡路大震災や東日本大震災などについてTVや写真でしか知らなかったけど、阪神・淡路大震災の起きた時にいた人から直接その時の状況などを教えてもらってすごく貴重な時間でした。三好さんがここにいて、状況などを語り継いでいること自体が奇跡だとわかりました。

震災の取材体験語る

加古川の中学2校 記者が出前授業

発生から28年となった阪神・淡路大震災をテーマにした出前授業が、17日に加古川中学校（加古川市加古川町備後）＝写真、18日に志方中学校（同市志方町志方町宮山）であった。いずれも神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーが講師を務め、生徒たちに「震災を知らない世代が、記憶と教訓を語り継いでほしい」と呼びかけた。

両校は日本新聞協会のNIE実践指定校。加古川中は全校生徒960人、志方中は1、2年生125人が参加した。

三好アドバイザーは大震災当日、神戸・三宮の神戸新聞本社で宿直勤務をしており、「発生時刻に起きていたので、命が助かったと思う。国などが被災者に救いの手を差し伸べてほしいとの思いで、記事を書き続けた」と振り返った。

当時、JR東加古川駅近くに建てられ、被災者が暮らした仮設住宅で、「神戸に帰りたい」と願いながら病のため亡くなった女性を取材した体験も話した。「震災に翻弄された人たちの、生きた証しを残すことも新聞の大切な役目の一つ」と強調した。

授業を受けた加古川中2年の鴻池心羽さん(14)は「地震の怖さを知った。みなさんが受け継いできた震災の教訓を糧にしたい」、志方中2年の藤田空海さん(13)は「当時の被害は想像以上だった。できることから防災対策を始めたい」と話した。

神戸新聞 教育に新聞を NIE 2023.4 1月19日

4．まとめにかえて

「新聞を読むことで社会問題についての関心は高まりましたか」

・とても高まった、高まった … 70.5%
・どちらともいえない … 22.7%
・あまり高まらなかった、高まらなかった … 6.9%
・あった、少しあった … 59.6%
・どちらともいえない … 30.5%
・あまりなかった、なかった … 9.8%

「今回の活動で新しい発見や考え方が変わったことはありましたか」

【生徒の感想】

・実際に一つの記事に書かれていることについて自分なりに考え、他の人からの意見ももらい、最後に自分の意見や考えをまとめることで、より記事について深く考えることができ、「自分だったらこうする」と自分の意見を積極的に出すことができました。また、私は普段新聞を読まないので、朝学の時間に新聞を読むことがとても新鮮に感じました。

・ネットは自分が興味を持つものしか見なかったりするけど、新聞などは目を向けることのなかった情報などを知ることができて自分の考えを深めることができると思ったので、これからはネットだけを見るのではなく新聞も見ていきたいなと思いました。

自分ごととして捉え行動できる生徒の育成

南あわじ市・洲本市組合立広田中学校　　校長　　松下　哲也
教諭　　河野　真也

１．はじめに

本校は淡路島の中央部に位置し、全校生徒 150 名弱、学級数８学級（特別支援学級２学級を含む）の小規模校であり、校区を南あわじ市と洲本市に持つ組合立の中学校である。学校周辺はのどかな田園地帯が広がる中、国道 28 号線が南北に走り、様々な店舗が多く並ぶ、島内でも有数の賑やかな通りとなっている。神戸淡路鳴門自動車道の高速バス乗り場も近く、京阪神へのアクセスも非常に恵まれている。生徒たちは、広田小学校からそのまま広田中学校へ進学してくることから、同級生だけでなく他学年同士でもお互いのことを理解し、落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送ることができている。

学校教育目標

２．導入のきっかけ

昨年度より GIGA スクール構想による１人１台タブレットが導入され、企業とのオンライン学習や調べ学習に積極的に取り組んできた。また、本校生徒の活躍を新聞各社やテレビで取材していただくことも多かった。自分たちの学びや活動がメディアで取り上げてもらうことは、子どもたちにとっては非常に刺激的であり、学びを深める意欲をかき立てたり、世の中のできごとを自分事として考えたりできる雰囲気の醸成にもつながっていった。

（朝日 R3. 8. 22）　　（神戸 R4. 2. 18）

https://youtu.be/ONqgZX9l9iQ

３．本年度の実践

NIE 実践指定校として取り組む機会をいただいたことを契機に、昨年度中に兵庫県 NIE 推進協議会の三好正文事務局長に出前授業を行っていただいた。その後、教職員で協議し、方向性を決定した。

（神戸 R4. 3. 23）

「社会の事象に関心を持ち、自分事として行動できる生徒の育成を目指す」

①社会科の授業を中心にNIE活動に取り組む。
②防災学習と連携する。
③神戸新聞主催「ひょうご新聞感想文コンクール」に応募する。
④情報を整理し学びを深めるためにシンキングツールを活用していく。

４．実践例

①社会科の授業

各地方公共団体（明石市、千葉県流山市・南あわじ市・洲本市）の子育て支援政策を新聞記事から調べ比較した授業では、子どもたちから出た要望を、南あわじ市議会議員に直接オンラインでつなぎ、質問に答えていただける展開に広げていくことができた。

「主権者教育」の一環として、三好正文さん（前述）に記者派遣事業として来校いただき、選挙のしくみや投票の意義について講義をしていただきながら、生徒会本部役員選挙だけでなく、生徒会行事や校則の改正について子どもたちが全員で議論し、主体的にルールを決定していく行動につなげることができた。

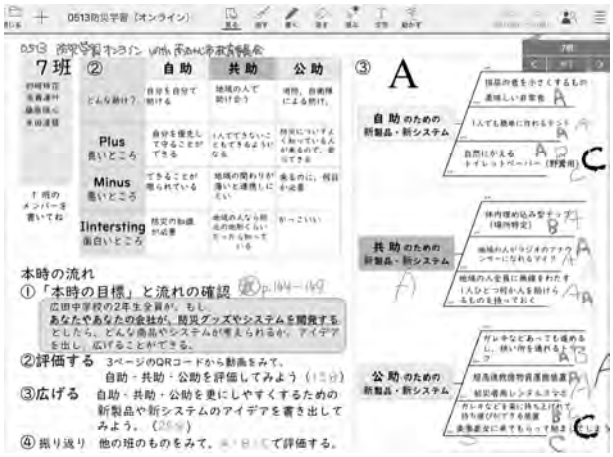
生徒が「選挙」学ぶ

広田中で主権者教育の授業

（神戸 R4.10.22）

②防災学習との連携

昨年度、防災学習を通して子どもたちが南あわじ市の危機管理課に提案した「ドローン部隊ですべてが見えちゃう大作戦」のアイデアが、南あわじ市防災で実際に活用されることになった。自分たちの学びやアイデアが実現していく体験を全校生で共有することができた。教職員も、子どもたちが成功体験によりさらに主体的に社会参画していこうと変化していく様子を目の当たりにできたことはうれしく驚きであった。



南あわじ市 空から現場撮影、迅速な対応に活用

ドローンで被災状況つかめ

9社と協定 福良湾など飛行エリア設定

（神戸 R4.12.1）

毎年１月に実施している小中合同防災訓練では、教員による阪神淡路大震災の語り継ぎだけでなく、自分が生き残るための防災小説づくりの新聞記事を活用し、生き抜く力の育成に取り組んだ。

（神戸 R5.1.18）

（神戸 R5.1.10）

また、「自分ごととしてとらえ行動する」取り組みとして、生徒会が主体的に避難所運営にかかわる「避難所運営計画」の作成や、南あわじ市のすべての中学校が連携したトルコ・シリア災害復興募金などの取り組みも、本校の生徒会が中心となって呼びかけ、展開できた。

（神戸 R5.2.8）

③「ひょうご新聞感想文コンクール」に参加

本年度は夏休みの課題とした。事前に興味を持った新聞記事を、必ず自分と関連づけながら整理し、まとめるよう指導した。ロシアによるウクライナ侵攻や広島長崎関連の核廃絶に向けた動きについての記事に関心を持つ生徒が多かったように思うが、中にはヤングケアラーや環境問題を自分事としてとらえた感想、AI による写真加工が与える人間関係の変化に関心を持つ生徒がいるなど、インターネットやテレビとは違った様々な視点で情報が網羅されている新聞記事の良い点を確認することができた。夏休み明け、子どもたちは他の生徒の作品にも目を通すことで、多くの社会的事象に目を向ける機会を設けた。

④シンキングツールを活用した情報の活用

昨年度から本校で本格的に取り組んでいるシンキングツールを活用した学びの方法をNIEにも取り入れている。同じ日に数社の新聞を届けていただけるため、一面記事のちがいや各社の異なる主張を「ベン図」に書き出してみたり、記事を細分化して「フィッシュボーン」に整理してみたり、選んだ理由を「クラゲチャート」に書き出すなど、様々な場面でシンキングツールを活用した活動を展開することで、学びの深化を図った。情報を収集し、分析・整理して発表するまでのプロセスを意識している。

シンキングツールの活用

⑤他教科への広がり

修学旅行のまとめを新聞記事にする、また、国語科のディベート授業の資料集め、家庭科の料理実習の振り返りを取材いただいたTV局の映像と新聞記事を見比べ、内容の共通点や違いからそれぞれのメディアの特性を理解するといった、他教科でも新聞を活用したNIEの広がりもみられた。

（朝日 R5.1.27）

5．次年度に向けて

次年度は実践２年目となる。さらに新聞を活用する機会を提供し、特に子どもたちのキャリアアップを意識して、進路選択につながる高等学校の記事や新聞記者へのインタビューなども取り上げたい。また、生徒の感想や変化をていねいに読み取りながら、社会の事象に関心をもち、自分事として考え行動できる生徒の育成につなげていきたい。

MEMO

【 中学校・高等学校 】

学校教育における新聞活用の可能性

神戸山手女子中学校高等学校　校長　平井　正朗
教諭　福永　博行

1. はじめに

本校は神戸市中央区に位置する大正13年創立の私立中高一貫制の女子校である。「未来型グローバルリーダーシップの女性育成」を目標に掲げ、未来志向型女子教育の実践を目指して、特に探究教育、英語教育、ICT 教育などに力を入れている。本年度は NIE 実践校に指定され２年目となり、社会科を中心に新聞を活用した授業を行った。

食堂に設置した新聞コーナー

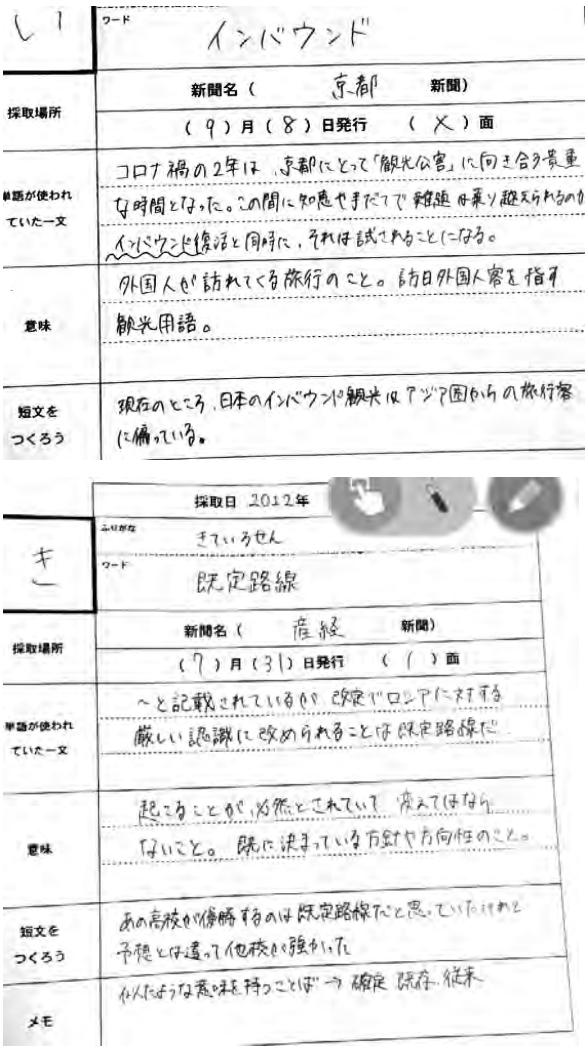
2. 主な取り組み

①新聞の設置

本校には全校生徒が利用可能なスカイルームと呼ばれる食堂がある。昼食時だけでなく、生徒たちは放課後のちょっとした息抜きや、自習でも利用する生徒にとって親しみのあるスペースであり、新聞はその中央に設置した。開架に際して、生徒が構えることなく、自由に手に取ることを目指した。また、社会の動きに関心を持ってもらうため、話題性のあった記事は、見出しや写真などが自然と目に入るように配置し、日々の変化を追えるように１週間分を並べるようにした。

②表現力・記述力の養成

新聞を題材に、表現力や記述力の向上を図る授業を行った。対象は、高校 3 年生の選択科目「時事研究」の受講者で選択時事研究の授業は新聞やニュースなどで扱う時事問題から、社会的な課題に向き合う姿勢を学ぶことを目的としており、授業では政治・経済・国際などの現代的な課題から災害や医療など身近な問題を取り上げて学んでいる。今年度は、語彙力や時事知識の向上のため、新聞記事から気になる用語を取り上げて意味を調べ、他の生徒にも理解できるように内容説明と例文を作成させた。「成年後見制度」や「核拡散防止条約」など紙面で話題となった専門用語を調べた生徒もいれば、「既定路線」や「家族主義」など、用語の使われ方に注目したものもあった。



意味調べのワークシート

新聞コンクールの応募作品

また、記述力を高めるため、自分で選んだ記事を100字で要約させる取り組みも行った。生徒の中には、大学入試で小論文試験を控えている生徒もおり、限られた時間で簡潔に要点をまとめるトレーニングとして実践した。初めは苦労した生徒も、２回、３回と繰り返すことで少しずつ時間内での要約を行えるようになった。このような取り組みの一環として、「いっしょに読もう！ 新聞コンクール」にも応募したが、熱心な生徒は記事選びにも時間をかけ、自宅の多数の新聞から選り抜きの記事を持参した生徒もいた。

③教材としての活用

時事的なテーマを扱う公民や現代社会の授業以外においても、新聞を活用する取り組みを実践した。世界史の授業では、歴史的な事項を扱った当時の紙面から事件の概要や政府の見解を知るだけでなく、世論や当時の社会・経済など、生徒たちには紙面から人々の暮らしや思いを想像することを要求した。第一次世界大戦の開戦を伝える日本の新聞紙面には、当然であるが「第一次世界大戦」という表記はなく、その後の大戦を経験した世代による用語であることを生徒たちは改めて理解したようで、当時の記事もどこか欧州の出来事を対岸の火事と捉えているように感じた生徒もいた。また、満州事変後の日本の国際連盟脱退を伝える記事からは、当時の世論形成が国際情勢や政治の影響を大きく反映していることを感じたようである。

④主権者教育

高校１年生、２年生を対象に主権者教育を実施する際に新聞記事などを活用したワークシートを作成した。有権者となることの意義を考えることを目標として、総務省と文部科学省で作成した「私たちが拓く日本の未来」に選挙権年齢引き下げの新聞記事を組み合わせてワークシートを作成した。記事には期日前投票に訪れた 18 歳の高校３年生と、大学１年生の感想が書かれており、生徒たちも自分事として選挙について考える契機となったようである。

私たちが拓く日本の未来　　組　　番　氏名

（2021 年　　月　　日）

日本の高校生の７割は「社会や政治問題へ参加すべき・参加した方が良い」と考えています。そのような思いに近づくために、選挙年齢は満 18 歳以上に引き下げられました。

「選挙に行く」人も、「参加すべきだけど、選挙には行かない」人も、そして、「政治には参加しない」という人も、有権者として一緒に考えてみましょう。

Q1　有権者とは？

有権者とは（　　）である。

総務省は参院選（選挙区）の 18 歳と 19 歳の投票率は 31.33%だったと発表した。全年代平均の投票率 48.80%より 17 ポイント低い。大型国政選挙で選挙権年齢が初めて 18 歳に引き下げられた前回 2016 年参院選に比べ、14 ポイント下がった。（2019 年 7 月 24 日付東京新聞より）

Q2　選挙権が満 20 歳から 18 歳に引き下げられたのはなぜ？

選挙権が 18 歳に引き下げられたのは、（　　）だから。

１８歳女子高生、期日前投票一番乗り　「ドキドキした」

最も早い時間に開いた大阪府箕面市の投票所では、１８歳の高校生が一番乗り。大阪府立池田高校３年の辰巳梅歩（ちほ）さん（１８）は電車で登校する前に立ち寄ったという。辰巳さんは「せっかく投票するなら一番最初に、と思って。自分の一票が国政にかかわるのですごくドキドキしましたが、思ったより難しくなかった」と声をはずませた。投票先は、新聞で各政党や候補者の消費税に対する主張を見比べ、決めたという。辰巳さんに続いて訪れた関西学院大１年の竹内洋人さん（１８）は「早く投票することで若者も政治に関心があることを世の中に示したかった。経済政策の主張を見比べて投票した。社会の一員になれたと実感した」と語った。（2016 年 6 月 23 日付　期日新聞より）

Q3　選挙権として身に付けておくべきことや身に付けておくべき力は？

・（　　）すること／する力

「あなたは、今回の参議院選挙で一票を投じてみて、どう思いましたか。」

投票に行ったと回答した人（1,574 名）に聞いたところ、「投票は簡単だった」が 38.6%と最も多く、次いで「自分で考えて一票を投じることができたので良かった 32.5%」、「有権者としての責任を感じた 30.0%」の順となった。（総務省「１８歳選挙権に関する意識調査」）

Q4　有権者となったあなたは、どのようなことをしたいと思いますか？

主権者教育で使用したワークシート（抜粋）

⑤記者派遣事業

毎日新聞社の村田愛記者より、高校３年生の選択時事研究の受講生徒を対象に特別授業を実施して頂いた。事前に村田記者が携わった記事を読ませてもらい、関心を持った記事について生徒から意見や感想をまとめさせた。その上で村田記者から新聞ができるまでの過程を聞かせて頂いた。講話では、紙面のことだけでなく、村田記者のこれまでの生い立ちや趣味まで紹介してもらい、生徒たちも非常に親しみを持って聴講していた。

生徒の感想より「村田さんの仕事に対する熱意が伝わってきました。記事に対する思いや、インタビューなどの中での工夫や意識していることなど勉強になりました。『声なき声』を聞くのが報道機関の役目だというのがすごく印象に残りました」「沢山の人が関わって作られる物って良いなと改めて思いました。知りたい情報を検索したら知ることのできる世の中だからこそ、新聞の貴重さが分かります。『弱い立場にいて苦しんでいる人もいるんだと伝えることのできる一つのもの』という言葉が記憶に残っています」

明石の歩道橋事件を取り上げた村田記者の記事について、次のような生徒の感想があった。「私は明石出身なのでよく海に行く際事故があった歩道橋を通ります。小さい頃はお地蔵さんと石碑の意味が分かりませんでした。韓国の雑踏事故の影響で明石の事故のことを知りましたが、韓国の事故がなければ風化されていたかもしれないと感じました」韓国での群衆事故の報道は、我々のように昔を知る者は、明石の歩道橋事故のことを想起した人も多かったと思われるが、生徒たちにその記憶はない。しかし、この感想のように、新聞は離れた場所のことを伝えるだけでなく、離れた時間・時代をつないでくれることもあるのだと感じさせられた。

記者派遣事業での授業

⑥その他の取り組み（昨年実施したものより）

学校や生徒の活動が記事として取り上げられたものを用いて授業を実施した。生徒に読者欄への投稿を促し、掲載されたものを用いて授業を行うことに取り組んだ。投稿者が身近にいることから、より親近感を持って記事を読み込み、また、その感想は投稿した生徒にとっても大きなフィードバックとなった。

また、「記者授業とタブレット体験ワーク～ＩＣＴ（タブレット／プロジェクター・ソフト）を用いた新聞活用学習の実際～」と題して「２０２１兵庫ＮＩＥセミナー」（６月 23 日）を実施した。

体験ワークの様子

3. 成果と課題

２年間の実践事業を通して、改めて新聞活用の可能性を感じることができた。様々な情報が溢れる日常で、適切な情報を選び出す能力が求められる世代に、新聞という選択肢があることを伝えられる機会となったことは意義があった。

紙面を活用した授業の際に感じられたことであるが、新聞を生徒に直接配布すると、こちらが予想している以上に関心を持って紙面をめくる生徒たちが多いことに気づかされる。アナログ時代の我々の世代が初めてコンピューター端末に電源を入れてマウスを手にした時のように、好奇心で紙に触れているようにも感じられた。新聞を「特別なもの」とせず、身近な情報源として生活や学習に取り込むことが今後の課題である。

新聞の価値は、多くの生徒も認めているが、新聞購読していない家庭も多く、新聞を目にしない生徒にいかに手に取らせるか、どのようにして触れる機会を設けられるかを我々自身が考え直し、効果のある取り組みを共有することが重要だと思われる。

MEMO

【 高 等 学 校 】

新聞の持つ高い表現力を学ぶ

兵庫県立伊川谷高等学校　　校　　長　　衣笠　正人
主幹教諭　　福田　浩三

１．はじめに

現在の情報化社会では、ネットにつなげば各々の志向に合わせた情報が選ばれ提供される。そんな中、網羅性に富んだ新聞を教材として活用することは、生徒の

・幅広い分野における興味関心を高める
・情報の真偽を含め整理し理解する能力を得る
・効率よく効果的に情報を発信する能力を得る

など、今後のグローバル化・情報化社会に必要なコミュニケーション能力の獲得につながるものである。これらを踏まえ本校では以前よりNIE実践に取り組んでいる。本稿では本校におけるNIE実践を

・１年コミュニケーション基礎（学校設定科目）における実践
・３年総合的な探求の時間における実践

に分けて報告する。

なお、実践校助成の新聞６紙（朝日・毎日・読売・日経・産経・神戸）については、購読期間を３紙または６紙がそろうように設定し、生徒昇降口の掲示板に毎朝「今日の朝刊１面」として各紙が比較できる形で掲示した**（写真１）**。また、過去の新聞については取り置きを行い、授業等への活用の際に使用した。

写真１ 新聞一面の比較

２．１年コミュニケーション基礎における実践

特色選抜入学者 30 名が履修する１年次必修科目「コミュニケーション基礎（週１時間）」において、履修生徒に対し以下の実践を行った。

２－１．新聞読み方講座（１回）

※他に新聞購読９日間あり

R4.6/20～7/14 の期間中の 9 日間、神戸新聞30部を生徒昇降口に設置し、生徒が教室にて「朝の読書の時間」を利用して新聞に目を通した。また、6/28 には新聞読み方講座（神戸新聞 NIE 講師担当）を実施し、新聞の持つ網羅性・一覧性・信頼性など新聞の持つ社会的役割や記事見出しの重要性について学習し、以後新聞を読む際に役立てた**（写真２）**。

写真２ 新聞読み方講座の様子

２－２．新聞感想文コンクール（夏季休業課題）

夏季休業中の課題として、生徒は読んだ新聞から最も興味・関心をもった記事を選び、その感想文を作成した。自宅で新聞を購読していない生徒については、先の９日間に読んだ神戸新聞の記事を活用した。

生徒は自ら選んだ記事に自分の意見を交えて感想文の形にまとめることにより、より相手に伝わる文章の表現力等について考えた。

提出された新聞感想文は授業担当者が校内選考を行い、２作品を「第 13 回ひょうご新聞感想文コンクール」に応募した。

２－３．やさしい日本語書き換え講座

（R4.9/13, 9/20, 9/27, 10/4, 10/11 計５回）

これからの社会のグローバル化を見据え、生徒が日常的に、小さい子どもや日本語を母語としない他者の観点で日本語を捉えることを目的

に、「やさしい日本語」を用いた新聞記事の書き換えを行った。

生徒が興味を持った新聞記事（「ひょうご新聞感想文コンクール」応募用に選んだ記事を活用）について「やさしい日本語」を用いてＡ５用紙にまとめ、その発表まで行った。

１回目　「やさしい日本語」講義（R3.9.13）

やさしい日本語認定講師による講義を通して、多文化共生社会における「やさしい日本語」の必要性について考えた。「やさしい日本語」のポイントとなる「ワセダ式ハサミの法則」（わけて言う、せいりして言う、だいたんに言う、ハッキリ言う、さいごまで言う、みじかく言う）について学習した。

２～４回目　書き換え作業（R04.9/20～10/4）

生徒が選んだ新聞記事を元に、その伝えたい内容や要約として必要な箇所を選び出し、その内容を「やさしい日本語」を用いてＡ５用紙にまとめ直した。この際、新聞紙面を参考に、より内容が伝わりやすくなるように見出しや文言、紙面レイアウト等について検討した。書き換え作業は必要に応じ班内での意見交換やタブレットによる調べ学習を効果的に利用した（**写真３**）。特に生徒は「やさしい日本語」を専門に扱うサイト（伝えるウェブ※）を積極的に活用していた。Ａ５用紙はレイアウトの参考となる薄い罫線やマス目が入った「はがき新聞原稿用紙（（公）理想教育財団より助成）」を活用した。

写真３　新聞購読中の様子

※伝えるウェブ｜やさしい日本語で情報発信
（https:// tsutaeru.cloud）

５回目　作品発表（R4.10/11）

Ａ５用紙に書き直した紙面（**図１**）を用いて、各自が興味を持った新聞記事の発表を行った。はじめに班内発表を行い、その後各班より代表者を選出し、その代表者がプロジェクタで拡大提示された自作品の紙面を用いて全体発表を行った（**写真４**）。発表で生徒は記事の興味を持った点に触れながら書き換え記事の読み上げを行い、書き換え時の工夫点等を説明した。発表を聴いた生徒の感想は、日報に記入させて回収した。

図１　生徒の作品

写真４　全体発表の様子

２－４．新聞から学ぶ SDGs（R4.11/1, 11/8）

新聞記事から SDGs を考える講座（朝日新聞 NIE 講師担当）を２回に渡り実施した。１回目は１学年全員（５クラス）が体育館に集まり新聞の読み方、SDGs に関わる記事の抜き出し等を

写真５　体育館で新聞を読む生徒

行った（**写真５**）。２回目は30名を対象に、班ごとにSDGs学習用付箋を用いて記事を抜き出し、選んだ理由を含めて発表し合った。

３．３年総合的な探求の時間における実践

３年生は成年年齢が 18 歳に引き下げられる最初の対象学年であったため、18 歳成人をテーマに NIE 実践を行った。

３－１．はがき新聞の活用（３年間を通して）

当該学年は１年次より行事の感想文の作成などではがき新聞を頻繁に活用している。活用当初は限られた文章量の中でも目に留まるレイアウトや文章内容にこだわりを持たせた。活用に慣れた段階でタイトル、小見出し、記事の文章表現まで掘り下げて作成を行うように呼びかけた。これらを継続することで、生徒は見出しの付け方や記事の書き方、記事の見せ方に一定の経験を有するようになった。また作成したはがき新聞は廊下に掲示し、生徒間で相互閲覧するため、作品の表現力はその都度向上していった（**写真６**）。

写真６　はがき新聞の廊下掲

３－２．科目における実践（R4.9/9）

医療系学校進学希望者のための選択科目にて、「18 歳成人のあなたへ」と題した授業（神戸新聞 NIE 講師担当）を行った。新聞を用いてロシアのウクライナ侵攻や新型コロナウイルス、震災等の時事問題について考えた（**写真７**）。この様子は翌日の神戸新聞朝刊（R4.9/10）に記事が掲載された。

写真７　18 歳成人のあなたへ

３－３．リーガルサポート講座

（R4.6/13, 9/5, 9/12, 9/26, 10/3 計５回）

法律専門機関である一般社団法人より講師５名の協力を得て、「総合的な探究の時間」を活用して３年生（全５クラス）に対しクラス単位で５つの内容の人権講座を実施した。講座の内容は「18 歳成人」を主軸とし、５名の講師の専門分野を基に、以下の様に設定した。

①少年事件、少年犯罪［弁護士］
②税金・投資・保険等、社会生活にまつわるおカネの話［税理士］
③契約上のトラブル事例について［司法書士］
④インターネット・ＳＮＳにまつわる諸問題と近時の裁判例について［司法書士］
⑤就職・労働に関する基礎知識［司法書士］

以後担当クラスを移動することで計５回、講座を実施することで、５クラスすべてがクラス単位で５つの講座を受講した。（**表１参照**）

表１　リーガルサポート講座実施スケジュール

	１組	２組	３組	４組	５組
6/13	①	②	③	④	⑤
9/5	②	③	④	⑤	①
9/12	③	④	⑤	②	③
9/26	④	⑤	②	②	④
10/3	⑤	①	②	③	⑤
10/10 以降	事後学習（興味関心の高い内容のはがき新聞へのまとめ）				

五つの講座終了後、生徒各自が 18 歳成人に対するテーマを１つ設定し、その内容をレポートとしてはがき新聞（A5 サイズ）にまとめる事後学習を行った（**写真８**）。このまとめレポートを作成する際、新聞の持つ高い表現力を持った紙面を作成するため、生徒は実際の新聞紙面を参考にした。作成されたリーガルサポート講座のまとめレポートは、非常に読む者の興味関心を

写真８　まとめ作業の様子

引くものが多数あった（**図２**）。

図２　リーガルまとめはがき新聞

作成されたまとめレポートは廊下に掲示し、生徒間で

・分かりやすいか

・独自の意見や思いが伝わってくるか

・読みやすいか

・まとまっているか

の評価観点を元に相互評価を行った。また、作品はすべて講座を担当した講師が閲覧し、専門家の立場から優秀賞等の評価を行った（**写真８**）。

写真８　レポート相互評価中の様子

リーガルサポート講座については、担当の講師が教室で講義を行うだけでなく、コラム『リーガ・ルームー18 歳の法の部屋ー』を 20 回に渡り執筆し学年通信に掲載することで、生徒の事前事後学習および知識の補足を計った（**図３**）。

※学年通信
バックナンバー

図３　学年通信 104 号（二面右下にリーガルコラムを掲載）

４．まとめ

本校では以前から NIE 実践を行っていたが、２年前より NIE 実践指定校となったことで、新聞の助成や講師派遣等も受けられ、より実践内容に幅が広がったと感じる。

本校の NIE 実践で重要視していることは、

・正しい情報を選び理解する

・必要な情報がより相手に伝わる表現法の学習

である。ネット社会においてこれらの能力を備えておくことは、他者とのコミュニケーションを図る上でこれから最も重要視されると考えるからである。

本校での今後の NIE 実践は今後も継続し、「読む」「理解する」「書く」「伝える」ための実践を充実させていく予定である。

新聞活用と総合学科の学び

兵庫県立須磨友が丘高等学校　　校長　　川崎　芳徳
教諭　　岩本　和也

１．はじめに

本校は全日制総合学科の高校であり、18 クラス、約 720 名の生徒が学んでいる。本校では、自己や社会を理解し、自分の生き方や社会への関わり方について考えていくことを目的に、１年次全員が「産業社会と人間」を履修する。また、２年次から始まる「課題研究」では、自らの関心に基づいたテーマを決め、自分が立てた問いに対して検証していく探究学習を行っている。このテーマ設定において、自分の興味・関心のある情報を探すために、新聞記事等を用いながら社会の情勢を知る活動も行っている。このような総合学科の学びの過程において、特に社会と接点のある活動の中で、新聞を活用できると考えた。

２．本校の教育活動における NIE の位置づけ

本年度は NIE 実践指定校の１年目であり、まず１学期は従来から実施している課題研究のテーマ設定において、新聞を活用した活動を行い、その導入として講演会を実施した。２学期からは１年次生を対象に朝読の時間を利用した新聞学習を開始した。加えて、本校と同様に NIE 実践指定校である、近隣の神戸市立横尾小学校との連携を模索した。

本校１年次を対象とした事前アンケートでは、新聞を取っている家庭は 32％で、日ごろ情報を入手する手段としては、インターネット 86％、テレビ 73％、新聞４％という結果だった。いかに本校の生徒が普段から新聞に馴染みがないか、よくわかる結果となった。

３．実践の内容

（１）２年次 NIE 講演会

令和４年４月 13 日（水）、講師として神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーをお招きし、２年次を対象に、講演と新聞を使った調べ学習ワークショップを実施した。

新聞にまつわる決まり事や、これまでの記者人生で体験された社会的事件などのお話を交えながら、新聞記事の特徴について説明があり、その後、新聞を使った活動を行った。

まずは、生徒個々が当日の新聞から自分が関心のある記事を選んでＡ３の用紙に貼り、余白には、その記事を選んだ理由、記事の内容からわかったことや逆にわからなかったこと、意見や感想、疑問などを自由に書き出した。内容や用語で分からないことは調べ、その後グループ内で意見交換を行った。自分の考えや感想を述べたり、他者の意見を聞いたりすることで、同じ記事であっても違う視点があることに気づくことができた。

生徒が選んだ記事は社会面から世界情勢、芸能、論説委員のコラムなど、さまざまな視点のものがあった。講師の方からは関心を持った記事を次の段階ではどうのように調べていくかなどのアドバイスがあった。最後に何人かの生徒が代表で発表し、興味を持ったきっかけや、調べてわかったこと、調べた上でもう一度記事を読み直して感じたことなどについて発表した。課題研究を始めるにあたり、テーマ設定の際に必要となるプロセスを体験することができた。

（２）朝読における新聞学習

ア．概要

・朝読の時間帯に、１年次生のみ週１回、新聞を読む時間をつくる。

・複数の記事から興味のあるものを選び、気になる箇所等に線を引き、ストックする。

イ．ねらい

・新聞記事を通して社会を知り、視野を広げるとともにアイデア創出のタネを集める。

・新聞記事を選び、読んだ内容から心に引っかかった部分をストックしていくことで、自分の傾向や関心の方向性を知る。

ウ．実施方法

ａ　準備

・教師があらかじめ新聞記事を選ぶ。毎回２パターンを用意する。

・選んだ記事は、テキストカードに貼り付けた形で、ロイロノートの資料箱に準備する。

ｂ　朝読の時間

・生徒はロイロノートを開き、資料箱から記事を選ぶ。選んだ新聞記事を読む。

・重要だと思った箇所、個人的に気になった箇所、疑問に思った箇所などに線を引く。

・（時間に余裕がある人のみ）記事の下のスペースにコメントを残す。

（３）兵庫県 NIE 推進協議会主催「記者派遣事業」

12 月 15 日(木)、１年次「産業社会と人間」の時間に、講師として毎日新聞神戸支局の中田敦子記者をお招きし、NIE 講演会を行った。中田記者からは、ご自身が取材された事件を記事にしていく過程を紹介してもらい、「多角的な視野を持つこと」の大切さを説いていただいた。一つの事件でも立場によって見え方は異なるため、事件について正確に伝え判断する上でそれぞれの視点から考える必要があることを、分かりやすく伝えてくださった。

（４）神戸市立横尾小学校との小高連携授業

ア．概要

a　日時：令和５年１月 23 日（月）

b　場所：神戸市立横尾小学校　普通教室

c　対象：小学５年生　２クラス（46 名）

d　内容：阪神・淡路大震災に関する新聞社の紙面集成、報道写真、ラジオ番組の放送記録を使い、「防災ジュニアリーダー」を中心とした高校生が防災授業を行う。

イ．ねらい

阪神・淡路大震災が起きた当時の新聞記事・報道写真・ラジオ放送の放送記録を題材として、「震災が起きた時に想定される被害」、「必要な支援」等の情報を読み取り、小学生が友だち同士や高校生と話し合うことにより、当時の状況を知るとともに「震災に備えて何を準備するべきなのか」「自分たちに何ができるか」を考えることができる。

また、小学生のグループに高校生がファシリテーター役として入ることで、相互に意見交流を行い、互いに学びを深めることができる。小学生にとっては、高校生のサポートがあることで少し難しいハードルにチャレンジできる機会となり、高校生にとっては、小学生をサポートすることで、責任感や主体性を発揮する機会となることを期待する。

ウ．授業展開

①防災ジュニアリーダーとしての活動報告（東北・淡路訪問を経て）

②グループ活動（新聞記事、報道写真、ラジオ放送記録などの資料を用いて）

③グループごとに全体の前で発表（話し合った内容を共有する）

④振り返り、まとめ

エ．高校生の振り返り

a　授業を通して、「新聞」や「報道」に対する考えに変化はありましたか？

・私は、普段新聞は読んでいなくて、ニュース番組なども頻繁に見ないので、新聞等は「今日あったことを伝えている」ものだと思っていたけれど、「今」このときだけでなく、震災など風化させてはならない出来事を幅広い世代や地域に伝えるという重要な役割も担っていると思いました。

・初めはあまり新聞を読もうという気持ちは正直ありませんでした。しかし今回、新聞を読んでみて、いろんな視点からの意見がたくさんあり、とても面白かったです。

b　あなた自身の「阪神・淡路大震災」や「震災」に対する意識は変化しましたか？

・今まで防災という言葉を聞くと、「地震が起きたときの対策」ということを考えていたけど、小学生と震災について考えてみて、「もし自分がこの状況におかれたらどうする？」という問いについての自分の意見を考えることも防災だと感じました。

・今まで、大きな地震があって大変だった事実は知っていたけれど、その地震によって引き起こされたさまざまな事柄についても、新聞記事を通して知ることができた。

（５）2022 年度兵庫県 NIE 実践発表会

２月４日（土）、2022 年度兵庫県 NIE 実践発表会がよみうり神戸ホールにて開催され、１月 23 日（月）に行った神戸市立横尾小学校との小高連携授業について実践発表を行った。

発表には、本校職員に加え、防災ジュニアリーダーのメンバーも参加し、小学校での授業実施に向けての準備や工夫、当日の取り組みや感想について、堂々と発表した。

４．本年度の成果と課題

（１）成果について

２学期から３学期までの約５ヵ月、１年次生は朝読の時間に新聞記事を読む学習活動に取り組んだ。ふり返りアンケートでは、「この活動を通して自分の力が伸びたと思うか」という質問に対して、①記事を読み取る力は、「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて 94.0％、②考えや思いを表現する力は、「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて 91.1％、③社会への関心は、「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて 96.3％という結果になり、いずれの項目も合わせて 90％を超え、成長の実感へと繋がったことが伺える。また、「新聞に対するイメージ」では、①面白くないと回答した生徒が活動の前後で 76.6％から 47.6％に減少、②大人向け（高校生が読むものではない）と回答した生徒は 60.3％から 41.2％に減少し、新聞への苦手意識がやや改善されたと思う。

神戸市立横尾小学校との小高連携授業では、相互に学びがみられた。小学生は題材となる新聞記事等をじっくりと読み、高校生の問いかけに応じて懸命に考え、意見を出す姿が見られた。戸惑っている児童に対しては、高校生がかみ砕いて説明したり、問いかけ直したりすることで、小学生も学習を進めることができていた。震災を経験する世代が少なくなる中、阪神・淡路大震災を経験していない高校生が、自分たちよりも下の世代の子どもたちに震災の経験を語り継いでいくことにも意味があったと考える。今後、防災に関する授業に関わらず、継続して小高が連携する機会をつくっていきたい。

（２）課題について

朝読の時間に読んだ記事の感想を生徒間で共有したり、議論したりすることはできなかった。自分の視野をより広げるには、そうした機会も必要であったと考える。また、今年度は各教科の授業で新聞を活用する機会は少なかった。次年度はより多くの場面で活用していきたい。

NIE 活動を通して社会問題への興味・関心を高める

兵庫県立加古川西高等学校　　校　　長　　魚井　和彦
主幹教諭　　蓬莱　真吾

１　はじめに

本校は、加古川市中央部に位置し、本年度創立 110 周年を迎えた全日制普通高校である。生徒は各学年 7 クラスで大部分の生徒は大学に進学する。

今年度 NIE 事業に参加したのは、
①自らの進路を切り拓くために視野を広げる
②総合的な探究の時間
③大学入試対策
に役立てるためである。

手軽にネットニュースで情報が入手できるが、ネットニュースでは自分が気になること、好きなことに関する情報だけを読んでしまう傾向にある。新聞の場合は、社会情勢や時事ニュース、経済関連の記事など、いろいろな情報に目を通すことが出来る。生徒自身の視野を広げ、幅広い知識や見識を得るためには、新聞を読むことが役立つと考え、NIE 実践に参加した。

２―（１）新聞活用実践①「新聞のコーナー」

各学年の廊下（1 階 1 年、2 階 2 年、3 階 3 年）にテーブルを設置し、毎日新聞を配置した。テーブルには 1 週間程度の新聞を並べ、手にとれるようにした。返却するということで、昼休みなど教室へ持って行ってもよいとしている。各学年に違う新聞を配置し、比較することで、1 面で扱われる記事の違いや、同じ出来事でも新聞社により取り上げ方や表現が違うことを知る。

成果と今後の課題

本校の生徒は何事にもまじめに取り組み、課題もしっかりと行う。ただし、時事的な問題には関心がうすいように感じられる。高校 2 年生で総合的な探究の時間にディベートを取り入れているが、その時にもそのように感じられる。また、高校 3 年で大学入試に向けて面接や小論文指導を行っていると、物事のとらえ方が一面的である生徒が多い。物事を多角的な視点で見る力を養うため新聞を活用していきたいと考えている。

多角的な視点を養うために新聞を読むことが一つの方法だと考える。また、「考える力」が重視されている今、俯瞰(ふかん)性・一覧性・網羅性・即時性・解説性などを兼ね備えた新聞を上手に利用し、生徒に考える力をつけていくのはまさに求められていることである。そのためにいかにすれば新聞を手にとる機会が増えるかを考えていきたい。

２―（２）　新聞活用実践②

本校には国際市民類型が各学年 1 クラス設置されている。生徒がグローバルな視野を持

つことを目標の一つにしている。各クラスにはこの NIE 事業により英字新聞”Japan News”を設置できることになった。各学年の様子を報告する。

１年生

英字新聞を教室の背面壁に吊り下げ、自由に読むことができるようにした。最初は、英字新聞が珍しく、多くの生徒が、パラパラとめくるだけであったが、記事を眺めていたようだった。6 月に行った文化祭では“ちょっと一緒に旅行せえへん？”というクラステーマを設定し、英字新聞を展示の一部に使い、異文化感を醸し出した。しかし、徐々に新聞に触れる機会が減っていった。2 学期になると、サッカーワールドカップの開催に伴い、興味・関心を持つ生徒が出てきた。“紙の新聞に触れる”という機会を大切にしていきたい。

2 年生

教室に設置して自由に読めるようにした。英語の授業で取り組んでいるディベートに関する資料を探すことに活用した。

3 年生

本校の設定科目である実践コミュニケーションⅢの授業で活用した。クラスを 19 グループに分け、各グループで「私たちの目から見た世界の諸問題」“What’s going on around the world?”とういう題で発表した。

各グループのトピックは以下の通り。

	トピック
1.	Equal Makeup and Hairstyle
2.	Paper Problems
3.	Recycling Garbage
4.	Reducing CO2 from Cars
5.	Fashion and Environmental problems
6.	Solving World Food Problems with Insects
7.	Culture Difference
8.	Protect Pets
9.	Spread Genderless Clothes
10.	Marine Plastic Problem
11.	Misunderstandings in Foreign Language
12.	Plastic Waste by Packaging
13.	Improving Poverty Problems through Work
14.	Love Yourself
15.	Donations through the Internet
16.	Education Gap
17.	Ageism
18.	Help children be children
19.	Stop animal testing

今後の課題

現代の社会状況について、多角的に物事を考えるにはインターネットによる情報収集だけでなく、同じ新聞で同時に、様々な記事が目に入ってくる新聞が、効果があると思われる。

３　読売新聞姫路支局　早川保夫氏の講演会「新聞記者の仕事とは」令和５年３月２日
（対象本校１年生）

(1) 新聞の歴史
(2) 新聞の取材網
(3) 思い出の記事①「103 歳のかぐや姫」
思い出の記事②「法起寺の読み方」
思い出の記事③「カラス天狗の正体をあばく」
思い出の記事④「金印　真偽の謎」
思い出の記事⑤「飛鳥最大級の方墳」
思い出の記事⑥「内戦で混乱盗掘横行」
思い出の記事⑦「将棋史上最年少プロ」
(4) 記者・デスクの１日の流れ
(5) 読み手にどう伝える工夫をしているか？

◆生徒の感想◆

〇我が家は昨年受験があるという理由でＫ新聞をとりはじめました。今までは新聞ではなくて、ＬＩＮＥニュースで知ることが多かったけれど、新聞には新聞の良さがあることに気づきました。ネットニュースでは自分の好きなジャンルしか（記事を）読まなかったので、新聞を読むことでいろいろな知識がつきました。新聞記者は記事を書くために様々な人に取材をして、（新聞を）読む人に分かりやすく伝えなければならないので大変な仕事だと思いました。私も今のうちから好奇心を持ってニュースを読み、知識をつけたいと思いました。

〇記者の仕事は休日も取材をしたり、会社に泊まることもある大変な仕事だけど、いろんなニュースの裏側や背景を知ることのできる特別な職業だと思いました。私の家では新聞をとっていないので、学校に置いてある新聞を読んでみようと思いました。

〇講演を聞いて、学びは学生の時期だけのものだと思っていましたが、大人になってから発見する新しい学びというものがあることが分かりました。これまでは毎日の生活が忙しくて新聞を読む機会がなかったのですが、今のことを知ることはとても大切なことだと分かったので、余裕のある時に（新聞を）よんでみようと思いました。

〇新聞記事が何百人によって毎日発行されていることにとても驚きました。私たちが普段から入手している情報はネットからが多く、なかなか新聞から（情報を）手に入れることはなかったけれど、新聞には一人ひとりの心のこもった文が集まっていると感じたので、読んでみようかな、面白そうだなと思いました。新聞は文章だけでなく、見出しや（記事の）配置までこだわって作られていると知って、そのような工夫も詳しく知りたくなりました。新聞からしか得られないものを手に入れてみたいと思いました。

〇私はふだん全く新聞を読んでいません。読む時間がないのと、単純に興味がなかったからです。しかし今回の講演会のお話を聞いて、時間をつくって新聞を読んでみようと思いました。新聞から得られる発見がこれからの人生を豊かにするだろうし、その発見を誰かに伝えることでコミュニケーションの輪も広がるような気がしました。新聞記者の方々は夜通しでインタビューなど大変な面もあるけれど、様々な人と出会うことのできる素敵な職業だと思いました。

〇今まで新聞を隅から隅まで読んだことはなかったけれど、これまで正しいと思われていたことや教科書に載っていることでさえ、新聞の取材でくつがえってしまうことにとても驚きました。また、被災地の取材や内戦の危険な場所での取材は本当に命を懸けている仕事だと知ることもできました。

４　本校生徒の新聞に関するアンケートの実施と調査結果

今年度の振り返りと来年度に向けた改善案を検討するために、Google Form を用いてアンケートを行った。本校の１学年および２学年の 490 人を対象とした。

第一に、生徒が新聞を読む習慣について調査した。

結果Ⅰ　教室や廊下で新聞を読む頻度

①毎日読んだ（0.2%）

②時々読んだ（3.7%）

③殆ど読んでいない（16.5%）

④一度も読んでいない（79.6%）

➡「一度も読んでいない」と答えた生徒の

割合が８割と高く、殆どの生徒は新聞に関心が無いことが判った。

結果Ⅱ　自宅で新聞を読む頻度

①ほぼ毎日読む（3.9%）

②週に２～３回読む（3.7%）

③時々読む（32.2%）

④読まない（60.2%）

➡「読まない」と答えた生徒が約６割に及び、自宅でも新聞を読まない生徒が多いと判った。

次に、生徒が新聞を読まない理由について調査した。

結果Ⅲ　新聞を読まない理由（複数回答可）

①テレビやインターネットなど他の情報で十分だから（85.9%）

②読む時間がないから（40.0%）

③新聞は読みにくいから（32.0%）

④購読料が高いから（17.1%）

⑤処分が面倒だから（7.6%）

➡テレビやインターネットの情報で十分だからという理由が９割弱と一番多かった。また、そもそも新聞を読む時間が無いことや、新聞は読みにくいものだという印象が、新聞離れを引き起こしていると判った。

生徒の新聞離れの解決策を探るために、生徒の関心事を探った。

結果Ⅳ　関心の高い新聞のコーナー（複数回答可）

①スポーツ面（44.9%）

②天気予報・気象情報（31.8%）

③ラジオ・テレビ面（30.2%）

④文化・芸能面（20.6%）

⑤国際面（16.9%）

➡スポーツ面、天気予報・気象情報、ラジオ・テレビ面への関心が高いことが判った。反対に、経済面や株式・投資情報面など、お金についての内容への関心が著しく低かった。

５　今後の取り組み

アンケート調査の結果を踏まえて、今後取り組むべきことは、新聞を読む意義や、新聞ならではの良さを考え、一緒に体験していくことが必要であると考える。そのために、来年度も教室や廊下の至る所に新聞を設置していきたい。但し、ただ単に設置するだけではなく、生徒の関心の高いコーナーを切り抜いて掲示するという工夫を行う。新聞に記載されている情報は非常に膨大なので、生徒が読みたいであろうコーナー（スポーツ面や天気情報、テレビ面）をピックアップして掲示する。学校でいつでも気軽に読むことのできる新聞コーナーとしたい。

今後も新聞を活用することで、「変化の激しい時代を柔軟に生き抜く力」を養っていきたい。

NIEで育むNeoMAKS～新聞で育成する多様な視点・価値観をもったグローバル人材～

神戸市立葺合高等学校　校長　清家　豊
教諭　高野　剛彦

１．実践の概要

神戸市立葺合高等学校は、今年 2023 年で創立 85 年を迎える全日制国際科・普通科高校である。1 学年 9 クラス（国際科 2 クラス定員 80 名、普通科 280 名）、3 学年で 27 クラス（定員 1080 名）の大規模校である。

普通科では生徒一人一人がそれぞれの個性や将来への希望に応じて、その持てる力を最大限に伸ばすことができるよう、類型（コース）制をとっている。1 年では共通履修科目を学習しながら適性や進路を考え、2 年からは文系・英語系・理系の 3 つの系に分かれて、それぞれの系にふさわしい科目を学習する。

国際科では英語のコミュニケーション力の向上に加え、日本や世界についての幅広い知識を身につけ、課題を発見し、問題を解決する力を伸ばすための独自のカリキュラムを設定している。また生徒一人一人の進路に対応できるよう、多岐にわたる選択科目も設置している 。

国際科を中心とする独自の取り組みが評価され、平成 17 年にはスーパーイングリッシュランゲージハイスクール、平成 26 年にはスーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）に、令和元年にはＷＷＬ（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業拠点校に指定された。さらにＷＷＬが終了した今年度には、三菱みらい育成財団の助成事業に採択された。

NIE 実践校を引き受けるにあたり、「**新聞で育成する多様な視点・価値観をもったグローバル人材**」を研究テーマに設定した。本校では、スクールポリシーの１つである「グラデュエーション・ポリシー（育成する資質・能力）」に【**Neo MAKS 12 の力**】を掲げている（右図参照）。

さまざまな社会課題を探究する際、

一面的・偏った情報ではなく、多様な視点・価値観の情報を収集し、エビデンスをもとに自己の考え・意見を構築するという探究プロセスを通じて、Society5.0 の先の時代に生きるグローバル人材を育成したい。その核として新聞を活用することが本校 NIE の研究主題である。

２．新聞の置き場と整理の方法

公費で買っている新聞と NIE の新聞を区別するため、校門に専用ボックスを設置し、そこに配達してもらった。職員室前に専用コーナーとラックを設置し、授業等で自由に活用してよいとするとともに、自習コーナーでいつでも新聞を読めるようにした。

３．実践の内容

①学際リサーチ

普通科２年生の学校設定科目「学際リサーチ」（選択科目、本年度履修生徒 13 名）では、NIE 新聞を活用した単元「My News」を設定し、「新聞コンクール」記事作成→オリジナル新聞作成→新聞ポスターセッションの３段階で活動を行った。

神戸新聞 2022年06月08日 水曜日 面名 神戸 １４ 21ページ

記事の書き方や編集学ぶ

葺合高で本紙アドバイザー指南

教育に新聞を NIE

中央区

新聞記事の書き方や紙面づくりを学ぶ授業が、中央区野崎通1の葺合高校であった。「学際リサーチ」を履修する2年生10人が、神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーからポイントを教わった。

同校は2022年度、日本新聞協会のNIE実践指定校に内定している。三好アドバイザーは記事の書き方として、仮見出しを考えてから書き出す▽テーマを意識しながら書き進める―などと助言した。

レイアウトの基本についても説明。神戸新聞の朝刊からウクライナ侵攻の関連記事を探し、網羅性や一覧性など新聞の特長を学ぶワークショップも行った。

林伊織さん(16)は「読みやすいように工夫された新聞紙面の構成に興味を持った」、河村咲歩さん(17)は「構図を意識した写真の撮り方が勉強になった」とそれぞれ話した。

記事の見出しを考える生徒＝葺合高校

授業の一環として、神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーから紙面づくりのポイントをご伝授いただいた。

普段読むことのない新聞だったけれど、ＴＶやＳＮＳとは違う利点があったり、読み手に向けての工夫があり、興味深いなと感じ、今度ぜひ読んでみようと思いました。
読者が読みやすいように考えられた工夫が多くあり、驚いた。新聞を読んで自分で考えて行動することが、読者に求められていると感じた。
普段新聞を読むことはあまりないですが、新聞は様々なジャンルの正しい情報を知ることができるなど、良さを知りました。ネットは信頼性に欠けている部分もあると思うので、情報の正しさを見極められるようになりたいと思いました。

5月30日　神戸新聞　２０２２年（令和４年）６月２７日発行

2年組
沖 心晴

学校ジャーナル新聞　号外

ウクライナへボランティア活動

「避難民の力に」

被災者への思いを胸に出発式

日本財団は5月30日ウクライナ隣国のポーランドへ派遣する学生ボランティアの出発式を行った。約千百人以上の応募の中から志望動機や英語試験によって選ばれた二十五人が出席した。学生ボランティアはポーランドのクラクフを拠点とし、ウクライナから避難してきた人々へ食糧や物資の配布、物資や備品の管理や避難民支援を行うＮＧＯなどの活動を行う予定。

Volunteer Program

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

避難民増え続ける

友人の意見

2-3-18東版新聞　２０２２年（令和４年）６月27日発行

記事の要約
産経新聞・5/31

中国で若者の失業率の悪化が急速されている。ゼロコロナ政策や1企業たたき、海外留学生の帰国や習政権による民間企業の締め付けなど数々の問題が影響している。5月13日には新卒者への補助金や、起業する新卒者への採用を行った企業への補助金などの処置をとっているが企業の採用活動が後回しになるなど短期的な改善は難しいと思われる。

学校ジャーナル新聞ガーデン　号外

卒業早々訪れる大きな壁

ゼロコロナで就職難深刻

大学生　卒業即失業の恐れ

中国の若者の危機！

オンラインで就活をする女性

友達のコメント

自分のコメント

まとめと感想

②グローバルスタディーズⅡＣ（ＧＳⅡＣ）

国際科２年生の学校設定科目「グローバルスタディーズⅡＣ」（選択科目、本年度履修生徒 33 名）では「ＳＤＧ４教育キャンペーン[i]」に参加し、公式教材（無料）を活用して授業で世界の子どもたちの教育の現状を学んだ後、日本の教育政策についての各政党の主張を、NIE 新聞を活用して比較・検討し、模擬投票を行った。ちょうど参議院議員選挙の前だったこともあり、生徒たちの関心が高く、反応もよかった。

４．成果と今後の課題

先に紹介した「第 13 回いっしょに読もう！新聞コンクール」を、第一学年の夏休み課題の一つとした。他の応募規格と並べての奨励ではあったが、およそ半数の生徒が参加する

こととなった。その中から２名が奨励賞を受賞し、大いに励みとなった。

兵庫県　神戸市立葺合高等学校　1年　落合　美里
センサー内蔵靴で児童守れ
（神戸新聞　2022年8月19日付朝刊）

兵庫県　神戸市立葺合高等学校　1年　塚本　結風
不正宿泊 ホテル立ち入り　一部屋に10人「帰りたくない」
（産経新聞　2022年3月15日付朝刊）

本年度の取り組みを通して、新聞が探究活動におけるイントロダクションとして、またリソースとして有効活用できることを再認識した。イントロダクションとしては、新聞のもつ網羅性を生かして、テーマ・トピックに対する多様な見方や視点を知る手がかりになるとともに、分析やまとめの際にどのような文章・表現が読み手に伝わりやすいか、お手本とすることができる。リソースとしては、新聞に掲載されている図表などが「信頼できるデータ」として直接活用できるほか、新聞で紹介された人的リソースや団体などにインタビューするなど、大いに活用できた。「総合的な探究の時間」が本格的に始まり、各学校ともその指導や外部とのネットワークに苦心する中、新聞を活用することで探究の質・量を深化させることができる。

本年度は一部の選択科目にとどまったが、次年度はこうした「**新聞を活用した探究活動**」をさらに拡大・進展させていきたいと考える。

---

[i] 「SDG４教育キャンペーン」は、SDGs（持続可能な開発目標）のゴール４（教育目標）を達成するための世界規模のキャンペーン。2003 年に全国約 30 か所・614 人の参加から始まったキャンペーンには、17 年間で延べ 58 万人以上が参加し、世界と日本の教育の現状について学び、より良い政策を求めて声をあげてきた。

新聞を活用して、社会の課題を考える

神港学園高等学校　　校長　　中野　憲二
教諭　　中西　正和

１．学習の目標

本年度、NIE 実践校となり、新聞を用いた学習を、特進コースの２学年の現社探究（学校設定科目、２単位）で行うこととなった。この授業は、文系大学進学希望者が選択する科目で、17 名の生徒が選択している。１学年で現代社会（２単位）を履修し、大学入学共通テストで現社受験に対応できる力を育成するために設けられた科目である。履修している 17 名は、真面目に、そして前向きに学習に取り組める優秀な生徒が多く、社会への関心も高い。しかし、家庭で新聞を購読している生徒は４名しかおらず、日常的に新聞に接している生徒は少ない。社会のことを知るには、テレビやネットのニュースに頼るしかない。このような現状に基づいて、以下の授業の目標を設定した。

① 現在、問題となっている社会情勢を学ぶ。
② 新聞を読み、学習する力を修得する。
③ 新聞報道の特徴を理解する。

２．授業について

（１）学習内容について（左表参照）

（２）新聞について

毎日配達される新聞２紙は、教室の段ボール箱入れて生徒が自由に見れるようにした。そして、毎月配達される新聞２紙も、以下のような組合せとした。

朝日・産経＝５月、９月、11 月、２月
毎日・読売＝６月、10 月、１月、３月
神戸・日経＝７月、８月、12 月

（３）評価と検証

それぞれの単元のはじめに、その問題について、知っていることや自分が考えていることなどを記入させた。そして学習の最後に、学習で理解したことをまとめさせた。学習を通じて、新たにわかったことや、理解できたかを、それぞれ検証できるようにした。

１学期	学習＝新聞記事を読んで、記事をまとめて発表する。 題材＝ロシアのウクライナ侵攻記事
２学期	学習＝新聞によって同じニュースでも異なる意見があることを学ぶ。 題材＝安倍首相、国葬問題 原発再稼働について 安保政策の転換について
３学期	学習＝新聞記事を、社会の問題を掘り下げて学ぶ 題材＝岸田首相所信表明演説 死刑の是非をめぐって

（４）その他の学習

次の二つの学習を随時取り入れた。

①話題になっている時事問題を学ぶ。

朝日新聞でほぼ毎日掲載されている「いちからわかる！」を教材化して学習した。

② ニュース発表

２学期以降、１時間に１人から２人を順番に指名して、自分の興味関心のあるニュースについての発表・解説を行わせた。

（『朝日新聞』2023 年２月７日朝刊）

３．それぞれの学習について

以下、学習の状況について詳説していく。

（１）ロシアのウクライナ侵攻について

授業が始まる直前に起こった、非常に重大な事件であった。生徒にも関心をもって理解してほしいことだったので、これを取り上げることにした。２月 24 日の開始から３月 12 日までの 17 日間の新聞を１人１日ずつ担当を決めて、関連記事をまとめプレゼンを作成し、それを発表した

また、この問題についての理解を深めるために、事前学習として、NATO の歴史やソビエト連邦の崩壊などについての授業なども行った。

そして、６月中旬から全員のプレゼン発表会を行った。それぞれの発表について、スライドとプレゼンについて、３項目の評価規準を設定して、それぞれ四点満点での相互評価をした。

【プレゼンについて】

① 事実関係や起ったことなどは、よく理解できたか。

② 話の展開が筋の通った形でよく整理されているか。

③ 伝えようとする熱意は、感じられたか。

【スライドについて】

④ わかりやすい内容だったか。

⑤ 関連資料や図表.写真などの工夫があるか。

⑥ 内容が豊富かで、情報量が多かったか。

学習の最後に、A 今回の学習でこの問題についてわかったことを５つ。B ロシアのウクライナ侵攻にはどんな問題点があるか、以上のことを書かせた。

A について

・ロシアの総兵力はウクライナを圧倒し、戦闘機や戦車などの保有量も大きく上回っている。

・ウクライナでは、すでに甚大な犠牲者が生じていて、国民の生活水準はさらに低下している。

・日本と欧米諸国は協力して、ロシアの輸入輸出、お金のやりとりを停止して、経済的に孤立させて攻撃をやめさせようとしている。

・それによって、石油や天然ガスがたくさんとれるロシアからエネルギー資源がはいらなくなっているため、世界的に石油や天然ガスの値段が上がり、電気代も上がる。

・戦争が始まって、ロシアに行く観光客が減少している。

Bについて

・明確な国際法違反であり、許されない行為だ。この戦争の一番の問題は、核兵器をウクライナは持っていないが、ロシアは持っていることだ。だから、アメリカは核兵器を持っていても、積極的に攻撃できない。核兵器が存在する限り、それを保有しないことは、戦略的に不利になる。この構造が問題である。

・プーチンは、真の民主主義がロシアに流入するの阻止したいと思っている。一人の政治家が長期にわたって政権を握っていることが問題である。

（2）安倍国葬問題について
　　原発再稼働について
　　安保政策の転換について

これらの学習は、２学期に実施した。目的はこれらの問題について理解することに加えて、新聞によって見解が異なることを通して、問題について、様々な意見があることを理解することにある。

テーマとしてこれらを選んだ理由は、特にはなく、その時々に話題となったからである。以下の手順で進めた。

① 学習前に、この問題についてどう思っているか。
② 新聞で、その報道を読み、内容を確認。
③ 異なる新聞の社説を精読して、その主張を理解する。異なる意見を知る。
④ そして、学習の最後に、この問題についてどう考えるか、を記述させる。
⑤ 新聞記事の中で、主に社説を用いる。

そして、学習前の考えと学習後の考えを比較することで、学習の成果や到達度をはかろうとした。これについては、学習後の記述をみると、学習前に比べて、多くの知識を得たことが確認できただけでなく、事象に対するして複数の視点を持つようになったことが確認できた。

（3）岸田首相所信表明演説
　　死刑の是非をめぐって

３学期には、このふたつの問題をとりあげた。前者は、この演説によって、現在の日本がかかえている問題がわかるので、それを知るためと、二学期の学習と同様、異なる新聞の社説を読むことで、この演説についての見解の違いを学ぶことが目的だった。

後者については、法相のハンコ発言があったことで、その話題性から選んだ。死刑の是非をめぐって、両方の意見について学習した。題材としては、朝日新聞の「オピニオン＆フォーラム　耕論」の１月 19 日の「死刑ハンコ発言に思う」を教材として用いた。

オピニオン＆フォーラム

苦しみ抱える関係者 想像して

ノンフィクション作家
瀬川 恵子さん

４．学習についてのそれぞれの学習について

授業について、生徒は以下のような感想をもった。

（1）この授業を通じて、わかったこと、身についたこと。

・新聞を読むことで、現在の時事がよく理解

できた。また異なる新聞を読む比べることで、相反する意見があることもわかった。
・新聞の読み方や、伝えたいところはどこにあるか、などがわかった。
・時事問題について、自分自身でしっかり考えていくきっかけとなった。
・新聞によって、書いている意見が肯定的・否定的の両面があること.
・新聞の関心度が高まった。
・日本だけでなく、世界の状況や、日本との関係などがわかった。
・ウクライナの戦争について深く知ることができた。
・新聞の記事から、大事な部分を読み取る力が身についた。
・ニュースなどについて、友達と意見を交換できた。

（２）今後、新聞を通してどんなことを学びたいか。
・ジェンダー問題について
・社会のさまざまな問題点をどう解決するか。
・国会や政治について、自分たちに大きく関わっている内容を主に学習して、知識を身に付けて、現状を学んでいきたい。そして、今自分たちに何ができるかを考えていきたい。
・地元の新聞を通して、もっと地元のことについて考える学習がしたい。
・日本やそれを取り巻く国際情勢について、もっと学びたい。
・現在の新聞だけではなく、過去の新聞、たとえば東日本大震災のとき、インフレが急激におこったときなど、大きな事件が起こったときの新聞を使って学習したい。そこから高校生の自分たちにできることは何か考えたり、他の人とも意見を深めたいと思った。
・一つの記事で、各新聞会社がどのような視点で、どんな意見を書いているかを調べたい。
・もっといろんな現代の問題について、話し合いをして、自分の考えを深めていきたい。

５．１年間、授業を行って

学習指導要領には、現代社会の学習目標として、「現代社会の基本的な問題について主体的に考察し公正に判断するとともに自ら人間としての在り方生き方について考察する力の基礎を養い，良識ある公民として必要な能力と態度を育てる」とある。現代社会の諸問題を授業でとりあげるときに、偏った意見や反対する意見だけでなく、公平な立場で授業を行うことを常に心がけている。今回新聞を通じた学習でも、二つ以上の新聞を取り上げたのもこのためである。しかしながら、普段から新聞を読んでいない生徒にとっては、さながら国語の論説文の問題を解くように、新聞から筆者の主張はどれで、その根拠は何か、を読み取ることが重要になった。そのため、授業は予定していたよりも、多くの時間が必要となり、考えていた授業展開がなかなか進まなかった。生徒にとっても、国語の授業のような印象をもったときもあったと思う。はじめに述べたように、家庭でも新聞を購読していない生徒が大半であり、自分と直接関わりのないものについては。どんどん疎遠になり、ネットからの偏った情報を盲信する状況があると言われている。このような中、高等学校の学習として「社会について，広く深い理解と健全な批判力を養」うためには、新聞を用いた学習は、大変有益で有り、今後も教科書では触れられない、現代社会の生の声を聞くことができる教材として、重要視しなければならいことを改めて実感した。このような学習の機会を与えてくれたことに、感謝申し上げます。

NIE 活動を通した「非認知能力」の育成

クラーク記念国際高等学校連携校　　校長　　片山　義弘
専修学校クラーク高等学院芦屋校　　教諭　　安井　萌七美

1．はじめに

本校は、本年度創立 30 周年を迎え全国各地にキャンパスを持つ広域通信制高校である「クラーク記念国際高等学校」と教育連携をする全校生徒約 330 名の学校である。本校の教育理念は「夢・挑戦・達成」であり、生徒一人ひとりの夢の実現に向け、好き・得意を伸ばす教育として特長ある 3 つのコース・5 専攻を設置し、次のステージで活躍できる主体性を持った生徒の育成をめざしている。

本年度から NIE 実践指定校となり、「非認知能力の育成」を主軸に活動を進めている。新聞活用を通じ、地域や社会に対する問題意識を高め自ら課題を見つけ、その解決をめざし考えを形成していく教育活動を推進することとした。

2．実践内容

（1）閲覧コーナーの設置

NIE 実践にあたり、6 月と 9～11 月に、地元紙を含む 6 紙を提供していただいた。そうした新聞を生徒たちがいつでも手に取り、読み、活用できるような「新聞のある環境」として、図書室前のフリースペースに「NIE 新聞閲覧コーナー」を設けた。1 カ月分を置くことで、過去の記事にもアクセスのしやすい環境を整えることができた。（写真左 参照）

また、毎週一つの記事を取り上げ、各教室に掲示をすることで、新聞に触れやすい環境を用意した。掲示する記事は教員が選ぶことで、毎週異なるジャンルを紹介することができた。NIE 活動前のアンケートでは、新聞がどのような記事を扱っているのか「分からない」と回答した生徒も一定数いた。毎週各ページのさまざまなジャンル（1 面、社会面、文化面、社説、スポーツ面、投書欄等）を取り上げることに加え、各誌の新聞をまんべんなく紹介することもできた。（写真右 参照）

（2）記者派遣

2022 年 9 月 2 日(金)、神戸新聞社の三好正文記者に来校いただいた。1 年生 89 名を対象に「主権者教育」というテーマで講演を行っていただき、ウクライナ情勢や自然災害についても触れながら、投票に行く大切さを教えていただいた。生徒たちもこれまでよりも強く、さまざまな情報を得られる新聞の重要性を感じられたようだ。

またこの講演を通じて、今まで社会のことに興味を持つことができなかったという生徒たちも、「選挙」や「投票」ということを入り口に、身の回りで起こっていることを知りたいと思ったようだ。

～生徒の感想～

- 新聞は社会の情報としては今では当然のように必要だと思います。今の社会の状況や役に立つと思う人などが多いからこそ使うことが多いと思います。
- 最初あまりニュースなどに興味がなかったけれど、今回の学習を通して興味を持つことができました。
- 僕は今まで若者の投票率が低いという問題がなぜそこまで重要視されるか分かっていませんでした。ですが実際に若者の票数が少ないと若者に不利になるような政策が通る可能性があることを知り結構重要な問題なんだと理解出来ました。まだ僕は15歳なので選挙に投票は出来ませんが18歳になって投票できるようになったらしっかりと色んな候補者の意見を聞いて自分が共感できた人に投票しようと思いました。
- 18 歳から選挙をできるようになるとは知っていたけど別に私にはまだ関係ないことだと思っていました。でも今回の話を聞いて 2 年後には自分で考えて自分の意思で選挙にいくことを気付かされました。でも選挙について無知な部分が多いのでこれから調べて行きたいなと思いました。
- 選挙の投票率についてが特に頭に残っています。少しの投票率で結果が覆ることがあるのだと知りました。このようなことは学校で習う機会が少なくこのような機会をいただけて光栄でした。途中途中にゲームを混ぜて下さり、楽しくためになるお話を聞けました。私自身も 18 歳になったら投票に行きたいと思いました。本当にありがとうございました。

主権者とは何か
高1生が考える
本紙社員が授業

ワークシートから関心のある政治課題を選ぶ生徒たち＝クラーク記念国際高校芦屋キャンパス

芦屋

投票に新聞を NIE

1票の意義を考える「主権者教育」の授業が2日、芦屋市公光町のクラーク記念国際高校芦屋キャンパスであり、1年生89人が参加した。神戸新聞NIE推進部の三好正文シニアアドバイザーが講師を務めた。

今夏の参院選で10歳代の投票率（選挙区、抽出調査）は34・49%となり、全体の投票率52・05%を大幅に下回った。同校は日本新聞協会のNIE実践指定校で、選挙権を得る18歳を前にした生徒に「主権者とは何か」を考えてほしいと授業を企画した。

三好アドバイザーは、ウクライナ情勢や頻発する自然災害に触れ、「投票に行くことが、外交や防災対策に若者の意見を反映させる近道」と強調した。

生徒たちは、選挙シミュレーションゲームや「どの政治課題に関心があるか」を考えるワークショップも体験。生徒たちが挙げた課題は、安全保障や子育て、雇用問題など多岐にわたった。

菊地浩美さん(16)は「コロナ下に新聞を読む機会が増えた。社会の動きに関心をもっていきたい」と話した。

（3）各授業における NIE

①科学と人間生活

科学と人間生活では、新学習指導要領に基づいた主体的な学びを、NIE 活動を用いて行った。単元目標としては「はやぶさ・はやぶさ 2 の科学的成果を知ることで、自然に対する理解や科学技術の発展がこれまで私たちの日常生活や社会にいかに影響を与え、どのような役割を果たしてきたかについて学び、科学的な見方や考え方を養い、科学に対する興味・関心を高める。」とした。現在、はやぶさ 2 が新ミッションに出ているため、新聞記事でも大きく取り上げられており、身近な事柄として生徒たちに感じてもらうことができた。

実際に行った学習活動は以下の通りである。はやぶさについて記載されている新聞記事を読み、疑問点を探し調べさせた。疑問点では、科学的な内容として、宇宙のこと、アミノ酸のこと、JAXA について挙げた生徒もいれば、満身創痍(そうい)などの言葉の意味を調べた生徒もいた。生徒たちは「JAXA の正式名称が長くて驚いた。」「小惑星の誕生などの宇宙の歴史の勉強になりました。」と科学的な分野に対する感想を持った生徒もいれば、「僕は最近ニュースを全然見れていなかったので、はやぶさ 2 が小惑星にむかったことすら知らなかった。そんな中で、宇宙の興味深いことをたくさん知れてよかった。また新聞やニュースを見ようと思った。」と新聞に対しての興味を語る生徒もいた。

②論理

論理では「自分の心に残っている言葉を他者に伝えよう」という課題に取り組んだ。これは朝日新聞朝刊に毎日掲載されている鷲田清一さんのコラム「折々のことば」にならって行った活動である。また 1 学年は、朝日新聞社の「私の折々のことばコンテスト 2022」に応募した。自分の中に残っていることばが、なぜ心に残っているのかを考え、その考えを言語化し他者に伝えるという作業は、予想以上に難易度の高いものとなった。

特に生徒たちは日頃、自分の思いを立ち止まり深掘りするということを経験していない。そのため、なぜかという疑問に答えられないという生徒も多数いた。そこで、これまでの鷲田清一さんのコラムを紹介しながら、ことばに対する読み解き方を学ぶことができた。

③国語

国語の授業では「新聞記事をもとに問いを作り、意見をまとめる」という目標をもとに授業を行った。これまでの学びでは、教員が指定した新聞記事やテーマを課題にしていたが、今回はこれまでの学びのまとめとして、より主体的な活動を設定した。

実践例は次のようである。（ア）まずクラス全体で興味のあること・話題を挙げた。（イ）それらのうち、自分が一番興味のあるものを選ばせ 4 人程度のグループに分かれた。（ウ）その後は各グループで、記事を 1 つ選び、目標に取り組んだ。生徒たちはこの課題を通じて、新聞記事の読み方はもちろん、どの面にどの新聞記事があるのかを改めて意識したり、新聞の読み比べをしたりすることができた。また問いを作るためには記事を読む必要があり、「大見出し・小見出し」が記事の内容の理解につながるという実感を得たようだ。

～生徒の感想～

- 新聞の記事はしっかり序論・本論が定まっていて、調査結果をまとめており、改めて読んでみるとすごいツールだと思った。
- 最初にこのテーマを選んだときには正直あまりおもしろくないテーマだと思ったが、記事を詳しく読んでみるといろいろな社会情勢が絡んでいることがわかっておもしろかった。
- 大見出し中見出しでなんとなく内容が分かってまとめるのが楽だった。
- 各新聞社によって同じものを題材にした記事でも見出しが違ったり違う視点で書かれていたので各社の新聞記事を読み比べるのもおもしろかった。

3．成果と今後の課題

生徒・教職員向けの事前アンケートでも、新聞離れが顕著にみられた。特に「紙」の新聞と「電子版」の新聞の購読が同率近くなっており、「紙」の新聞を読んだことがないという生徒も多数いた。NIE 実践指定校となり、活動を始めた 1 年だったが、少しずつ「紙」の新聞に触れ、新聞について知ることができたのではないか。また上記で述べたような NIE 活動を通して主体的・探究的に学びに取り組む「非認知能力」の育成を図ることもできた。

本校は、通信制高校であり専修学校との連携校であるため、より柔軟なカリキュラムが設定されている。来年度は、教科の枠に縛られるのではなく、専攻コースといった学際的な学びの実現をめざしていきたい。

MEMO

【 特 別 支 援 学 校 】

社会人としての幅広い知識や感性を身につける一つのツールとして新聞に触れよう

兵庫県立播磨特別支援学校　校長　下雅意　一之
教諭　志水　幸広

１．はじめに

本校は、県西部たつの市に位置する知肢並置の高等部のみの特別支援学校です。実践指定１年目は、普通科・職業科（肢体不自由部門）の２年生が「新しい視点で社会を見つめる」をテーマに取り組みました。本年度は主に就業技術科（知的部門）の３年生を対象に実践しましたのでその報告をします。

２．取り組みの概要

就業技術科には、卒業後の職業自立を目指す生徒が、西播、東播の広範囲から自力通学で学びにきています。事前のアンケート調査により、家庭で日常的に新聞に触れることがほとんどないという実態が分かりました。そこで、新聞に触れることによって社会の出来事により関心を持ち、学校や家庭で話し合うきっかけにすることを目的に、多くの生徒が課題とする自己理解やコミュニケーション能力の向上に少しでも役立てられたらとの思いで取り組みました。

生徒は、４クラス 31 名。新聞６紙の購読期間は、６月～10 月（８月を除く）でした。実践の場面は、主に学年及び各クラスのホームルーム、教科の授業です。

３．新聞の置き場と整理の方法

新聞の置き場と保管について、できるだけ全校生が触れることができるように、６紙を三つに分けて管理しました。４紙は就業技術科の生徒の主な学習・生活の場である校舎１階の廊下、１紙は昨年度から引き続き取り組む普通科･職業科３年生の教室､もう１紙は、図書室に置くようにしました。

中央廊下には購読期間中の月曜日から金曜日の毎日、新聞４社分の１面を掲示し、当該学年以外の生徒の目にも触れやすいようにしました。

＜中央廊下の NIE コーナー＞

また、３年生の教室前廊下にコーナーを設け、張り出していないページを含む１週間分を新聞ごとに箱に入れて設置しました。授業やホームルームでの使い勝手の良さと、休憩時間中に生徒がいつでも手に取って見られるようにと考えたからです。

保管は、すべて図書室の書架にコーナーを設け、図書館担当の先生にも管理の協力をしていただきました。

＜就業技術科３年教室前の NIE コーナー＞

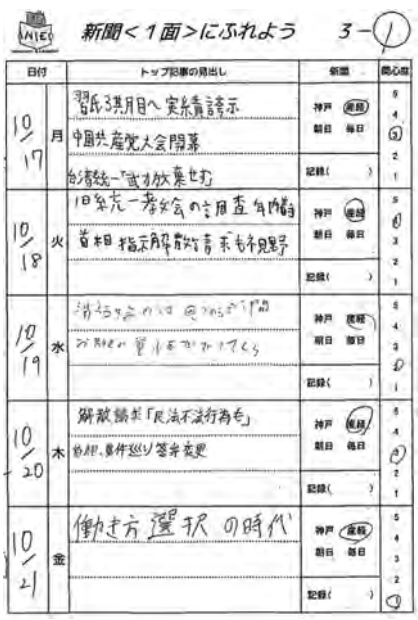
４．実践の内容

４－１　学年・各クラスでの取り組み

①　トップ記事の記録

各クラス当番制で毎日１人が、休憩時間に中央廊下の掲示板のところに行き、掲示した４紙の一面から興味を持ったトップ記事をメモします。そして、選んだ新聞名と関心度を合わせて写真のような記録用紙に記入していきました。

メモは、就労に向けた日々の学校生活の中で３年間一貫して継続していますので、全員がメモ帳を携帯することになっています。メモを取る練習と漢字の読み書きの学習にもなると考えました。



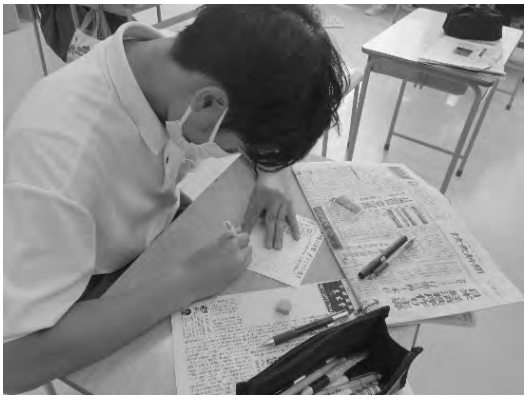
NIE　新聞＜１面＞にふれよう　3－1

日付		トップ記事の見出し	新聞	関心度
10/17	月	習近3期目へ 実績誇示 中国共産党大会開幕	神戸 産経 朝日 毎日	5 4 3 2 1
		台湾統一「武力放棄せず」	記録（　）	
10/18	火	旧統一教会の調査 自民指示 首相 指示解散請求も検討	神戸 産経 朝日 毎日	5 4 3 2 1
			記録（　）	
10/19	水	消費者庁の「顔」 ツイッターに	神戸 産経 朝日 毎日	5 4 3 2 1
			記録（　）	
10/20	木	解散請求「民法不法行為も」 旧統一、事件巡り答弁変更	神戸 産経 朝日 毎日	5 4 3 2 1
			記録（　）	
10/21	金	働き方選択の時代	神戸 産経 朝日 毎日	5 4 3 2 1
			記録（　）	

＜トップ記事の記録用紙＞

②新聞づくり（３回）

LHR の時間を使い、興味を持った記事を伝え合う目的で新聞の再構成に挑戦しました。クラスごとに割り当てられた一定期間の新聞を、クラスで数日ずつ分担して目を通します。次に興味を持った記事とその理由を一つずつ出し合い、話し合って優先順位をつけます。そして、優先順に従って予め割り付けておいた模造紙に、見出しと選んだ理由を書き込み、必要に応じて写真や図表のコピーも貼り付けて再構成による新聞を作りました。



＜LHR での新聞づくりの様子＞

令和4年(2022年) 10月14日 (金曜日)

3－1 産経新聞

かもめの門出 沿線祝う
西九州新幹線開業「思い出の地に」

かっぱ寿司社長ら逮捕
はま寿司秘密 不正取得

三遊亭円楽さん死去

笑点

昭和の交通公園 令和の姿は

編集者

＜再構成して作った新聞＞

４－２　教科の授業での取り組み

就業技術科のカリキュラムでは、職場実習を含めた職業実習系の授業を柱にしていますが、それを補完したり、よりよい社会生活を送るための知識・技能を学ぶ座学があります。そのうち、「生活社会」と「生活理科」、「コミュニケーション」の授業で担当者の協力を得て新聞を取り入れた実践を行いました。

生活社会では、選挙に関わる基本的な事項のほか、地元兵庫の立候補者についての記事を探して自分なりの意見を持つ取り組みをしました。生活理科では、理科的な要素を含んだ記事や自分が関心を持った記事を話し合ったり、関連する動画をタブレット端末で調べて発表しあったりしました。

コミュニケーションでは、４コマ漫画、『投書を読もう』、漢字探し・数字探しに取り組みました。４コマ漫画では、順番がバラバラになったものを並べ替えたり、空欄にした吹き出しのセリフを考えて発表したりしました。『投書を読もう』では、神戸新聞の「若者 BOX 席」を使い、見出しを完成させたり、一番印象に残った投稿を選び、理由を選択肢の中から回答したりしました。漢字探しでは、同じ部首の漢字ばかりを集めたりみんなが読めない珍しい漢字を探したりしました。数字探しでは、「ありがとう」（＝１０）や「○○に」（＝２）など生徒の個性あふれる楽しい集め方も出てきて大変盛り上がりました。以下は、コミュニケーション担当者の感想です。

- それぞれ登場人物の関係性を考えたり、場面で描かれている物に注目したりしながらセリフを考えることができていた。
- 普段、本や漫画をよく読んでいる生徒はセリフを入れるのが上手だと感じた。
- 自分の体験を思い出したり、共感したりしながら読めていた。内容が分かりやすく、文章量が適量だったと思う。
- 実体験をしたり似た境遇や経験をしたりしたことのある投稿には特に共感し、興味関心を持っていた。小中高生の投書なので、親しみやすく共感できる内容ばかりで教材として良かった。

４－３　記者派遣事業

＜1 回目「はじめての新聞」の様子＞

５月と９月の２回、昨年度に引き続き県 NIE 推進協議会の三好正文事務局長をお迎えし、授業を受けました。1 回目のテーマは、「はじめての新聞―新聞記者に聞く新聞の読み方」。スポーツ選手や芸能人など生徒の興味関心をひく記事を使いながら、新聞の読み方や特長、新聞ができるまでの舞台裏、新聞の役割など幅広い知識をかみ砕いて教えてくださいました。記事の基本「５W1H」の意味に反応よく答えたり、この日の朝刊にウクライナの記事が何本出てくるか協力して探したり、星野源さんと新垣結衣さんの結婚の記事を読

んで思い思いにつけた見出しを発表し合ったりと、笑いを交えてテンポよく進む授業に生徒も先生方も引き込まれていました。新聞を身近に感じることができた２時間でした。

２回目は、「主権者教育」をテーマに授業を依頼しました。１票の値段や若い人の投票行動が大切だという話に関心を寄せ、投票シミュレーションゲームなどを通して、投票することの大切さや投票行動へのつなげ方についてみんなで考えながら学ぶことができました。

＜2 回目「主権者教育」の様子＞

【生徒の感想】

・読者に新聞が届くまで多くの人が関わって、細々とした部分までこだわって作られているんだなと思った。

・タイトルがすごく興味を引くように考えられているのがすごいと思った。

・新聞について知らなかったことを知れてよかった。

・有権者の中での年代別によって意見も変わってくるので、決して否定するのではなく、受け入れながら考えていくのも重要だと思いました。

・あまり興味がなかったけど、投票のやり方など分かりやすく教えてもらいよく分かりました。

・一票が 205 万円の価値があるということに驚きました。20 代の投票率が低いので、20 代になっても投票に行こうと思いました。自分の意見に似ている人や将来のビジョンを描けている人に一票を入れようと思いました。

５．まとめにかえて

２年間の NIE 実践指定が終了しました。日本新聞協会と兵庫県 NIE 推進協議会におかれましては、新聞の無償提供、記者派遣、各種案内など本校の教育活動にご理解、ご協力くださり、大変ありがとうございました。

実践を行った現３学年の生徒は、入学以来常にコロナ禍の影響下にあり、さまざまな規制や制限がある中での教育活動を余儀なくされました。職場実習や校外学習などさまざまな体験的な活動が中止される中、本物の新聞記者の方に直にふれながら報道を通した社会の見方・考え方を知る時間を与えていただけたことは本当に貴重でした。また、約半数の家庭で新聞購読がない現状において、手の届くところに新聞があることで社会をより身近に感じることができました。触れてみる機会を与えていただけたことは今回の実践指定があったからこそと感謝しております。

一方、事後アンケートから、新聞や社会への関心について顕著な成果を得るには至りませんでした。興味関心が一過性のものでなく、継続した学びにつながるような教員の力量の向上、有効な教材化など課題はありますが、今回の活動が、生徒たちの卒業後のよりよい社会生活、就労生活に役立っていけばと願います。

MEMO

【兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校】

NIE と学校図書館を中心とした課題解決能力の育成

姫路市立豊富小中学校　校長　山下　雅道
教諭　前野　翔大
教諭　井上　佳尚

１．はじめに

本校は、2020 年度に施設一体型の義務教育学校、姫路市立豊富小中学校として開校した。９年間の学びをつなげるブランドカリキュラムの三本柱の一つとして NIE への取り組みと、学校図書館の活用を掲げている。

開校以前にも 2018 年度より NIE の推進校として、２年間の研究推進を行ってきたが、今回の実践ではより９年間の義務教育期間を意識した取り組みに力を入れている。

２．実践の概要

本校の NIE の位置づけとしては、「NIE として何かを取り組む」というより、「普段の生活の中で新聞を活用する」というスタンスで取り組みを行っている。ふとした瞬間に「ああ、そういえば新聞で見たよね」とか「今朝の新聞に書いてあったよね」という会話が児童生徒や教員の間で交わされるような環境を目指している。以前の取り組みでは「つくる」と「つかう」ことを主軸として、新聞というメディアがどのように学びにつながっていくのかということを研究した。当時は「情報」を「調理」するというように表現したが、今回の取り組みではそれらをさらに昇華し、「調理」したものをどう「提供」するか、という視点で取り組んでいる。

○ いつも、すぐそばに新聞を

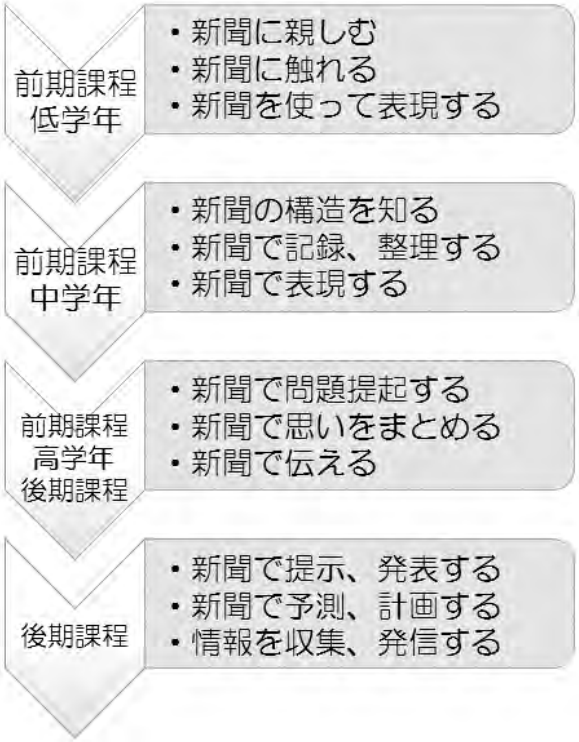
さて、新聞を教育の場で活用するというと、「授業でどんなふうに活用するか」とか、「どのように新聞を作ったり新聞にまとめさせたりして発表させようか」とかいう話題になりがちである。本校の新聞の活用方法や、児童生徒が新聞をどれくらい身近に捉えているのかを端的に表している写真が以下の写真である。

この写真は始業直後からの大雨で、前期課程（小学校）の生徒玄関が水浸しになったときの様子だ。児童たちは一目散に教室から古新聞をもってきて、雨の雫や湿気で滑りやすくなった廊下に新聞を敷き詰め始めたのだった。「新聞を踏んづけるなんて！」と思う諸氏も少なからずいらっしゃるとは思うが、身近に新聞があるからこそ、児童らは湿潤な廊下へ教室に置いてあった新聞を敷き詰め、安全安心な学校を取り戻そうと動いたのだと思われる。いつも、すぐそばに新聞があるからこそ、とっさに「湿気を吸い取ってくれる」とか「転倒のリスクを減らせる」と思い至ることができたのだろう。

本校では新聞を学びのアイテムとして活用することはもちろん、生活のアイテムとしても活用しようとしているのだ。

○　９年間を意識した新聞活用の流れ

前頁でも述べたが、本校は９年間を通じて、様々な情報から課題を発見し、自分事として考え、解決しようとする生徒の育成を掲げている。新聞を活用した学びの流れは以下の通りである。



一番大事にしたいところは、手を伸ばせば新聞がすぐそばにあるという環境である。そして、自らの学びを発信するツールとして新聞がいつでも有効的に活用できることが望ましいと考える。

・前期課程（小学校）の「つかう」

９年間の大まかな流れは、前述のとおりだ。実際にどのような取り組みを行ったかを少し紹介したい。

低学年の１年生では図画工作で「つかう」活動を行った。ちぎったり、破ったりした新聞を何かの形に見立てたり、紙面の写真や見出しの網かけ、さまざまな紙面上のフォントを活用して平面作品を作成した。こういった作業を通じて、紙面上の文字やデザイン、写真に興味関心を持ち、新聞がより身近な存在となっていく様子が見て取れた。

▼ 児童作品の一例、網かけが猫の首輪になっている。

２年生は少しステップアップし、新聞を活用して、造形活動を行っている。新聞に触れ、新聞に親しみ、新聞を使って表現活動を行う中で、新聞の素材そのものから、写真や文字が印刷された紙面にだんだんと児童の興味や関心が移っていくことが見て取れた。

そして、高学年になってくると、新聞が「紙」としてではなく「情報」をまとめたものとして活用が広がってゆく。手始めに紙面上の季節のたよりを報道する写真や、なかなか足を運ぶことが難しいような世界中の写真を活用した表現活動に始まり、新聞の中の文字情報や、数値に目を向けてゆくようになる。

上の写真は、５年生にて行ったまわし読み新聞の一例である。高学年ともなると、様々な社会課題や社会問題が時事問題の現在進行形な話題として新聞に取り上げられていることに注目し始める。児童たちはそれらに触れることにより、自らが立ち向かわなくてはならない課題であることに気づき、そのための学びを深めてゆくのだ。

・後期課程（中学校）の「つかう」

前期課程の高学年から後期課程（中学校）では地域の新聞販売店の協力により、全学級に新聞を配布している。活用の方法は多岐にわたるが、多く見られたのが、終学活等でその日のニュースやコラム等を紹介し、所感を述べるというものだった。

また朝学習の時間に、７年生では神戸新聞の正平調を書き写す正平調ノートの取り組みを、９年生では様々な新聞のコラムを生徒のICT 端末へ配信し、それを読み 100 字に要約するという取り組みを行った。

どちらの取り組みも最初のうちは非常に時間がかかり、生徒からは敬遠される声があったが、２カ月、３カ月と取り組むうちに、「今日は無いのか？」とか「他の話題が読みたい」という声が生徒側から聞こえてくるようになった。実際、７年生での取り組み後は生徒たちが自分の考えをまとめたり、ノートに何かを書き写したりする際の時間が短縮され、授業中の指導の質が向上したとの声がある。また、９年生での取り組みでは、進路に向けて指導する中で、掲載されたコラムの内容が印象に残ったという声や、こんな記事を読み考え方が少し変わったというような声を聴くようにもなった。また、取り組み初めの頃は 100 字に満たない感想文になっていた生徒が、最終的には、筆者の意図を捉え、最後の「オチ」までしっかりと理解できるまでになっていた。

この 100 字要約の取り組みの中では、添削等は行ってはいなかったが、90～100 字の模範要約をお昼ごろに配信すると、生徒たちはどこが重要なのかとか、自身の捉え方について生徒間で議論する様子が見られた。

また、特別支援学級においては、神戸新聞の「週刊まなびーワークシート」や中日新聞の「学習ワークシート」を活用し、読解力の向上や、聞く力の向上を目指して、さまざまな時間に新聞を活用していこうという取り組みがなされた。

▼ICT 機器を活用し配布することで、印刷の手間や模範の解答や要約を配布する手間が省ける。

○ICT を活用した取り組み

・ICT を活用して「つかう」

これまでは主に、新聞を「紙媒体」として活用した例を紹介したが、本校では ICT を活用した NIE の取り組みも積極的に行ってきた。「紙」と「デジタル」で、一見相性が悪そうな両者ではあるが、実はカメラや Web 記事を併用することにより、紙面から記事をピックアップし、視認性や判読性を向上させて、児童生徒に提供することが可能になるのだ。そのため、指導を行う上で一瞬に本題に迫ったり、要点をピンポイントに示したりすることができるので、児童生徒にとって理解しやすい資料となる。

また、一つしかない記事を写真に撮ることで、全ての児童生徒が共有することができ、より深い読みや気づきにつながるのだ。

▲新聞記事を写真に撮り、班内で共有する生徒の様子。この時はオンラインでまわし読み新聞を行った。

・ICT を活用して「つくる」

1 人 1 台端末によって新聞を「つくる」取り組み方法が大きく変化した。以前は新聞用の方眼紙に児童生徒がそれぞれ思い思いにレイアウトし、教員が用意した写真を貼り付けたり、イラストを各々が書き込んだりしていた。それはそれでまた味があり、良いものでもあった。しかし、指導に時間がかかったり、色鉛筆やペン、様々な道具が必要であったりして、個々の能力による差が大きく見られたりした。

しかし、ICT を活用すると、写真は自分で撮影したものをそのまま活用でき、出先で編集作業が可能となり、個別に担任や教科で時間を取らなくてもよくなった。また、「ことまど」や「朝刊太郎」といったアプリを活用することで、それぞれが体裁の整った新聞を作成することができる。

特別活動や普段の教科学習を行う中、新聞作成アプリで「こんな写真を使おう」とか「こんな紙面になるように活動しよう」という、まとめ活動を意識してそれぞれの取り組みを行うようになったのが、この ICT を活用する上で大きな発見となった。

また、新聞用のアプリを活用せずとも、プレゼンテーション作成ソフトなどを使い、新聞や通信を発行する姿が前期後期の校種を問わず見られるようになり、ICT によって自ら考えたり調べたりしたことを発信するために、新聞という媒体をうまく活用することができるようになったと言える。

▲「ことまど」活用の一コマ、これは個人で編集しているが、協働編集もでき、委員会活動で活躍している。

3．今後の課題と展望

○ 課題解決能力の育成に向けて

最初に述べた児童玄関での一コマを思い出してほしい。児童たちが廊下に古新聞を広げた後の話をしたい。児童たちは各々広げた新聞のそばにしゃがみ込み、記事についてそれぞれが話し合い始めたのだ。日常の中に新聞があるからこそ、児童たちは広げた新聞に目を通し、少し前に児童の間で話題に上った記事や、教員が取り上げた記事を話題にするのだろう。

上の写真を見ていただきたい、図鑑、中高生新聞、ICT の三つの媒体を開き、探究活動を行う生徒の様子だ。少々頭を抱えているが、彼はそれぞれのデータをどう活用し、どのようにまとめるのかを悩んでいた。

今後は、上記の彼のようにそれぞれの利点を活かし、情報の取捨選択を自らできるような児童生徒をどんどん増やしていくのが NIE の持つ役割であり、課題なのではないだろうか。

▼2 年生造形制作、NIE の中心には「愛」があります。

SDGs の視点に基づく全校的な教科横断的探究学習
－NIE を活用した課題設定と調査結果のまとめ－

兵庫県立兵庫高等学校　　校長　　福浦　　潤
教諭　　岩見　理華

１．はじめに

本校は、平成 27 年度より５年間、文部科学省より「スーパーグローバルハイスクール（SGH)」の指定を受けて、創造科学科（1 クラス 40 名）と普通科グローバルリサーチコース（課外選択 40 名程度）の生徒を対象に、SDGs の視点に基づく探究活動を推進してきた。令和２年度からは、普通科にも活動を広げ、高等学校新科目「総合的な探究の時間」を先行実施し、全校的に教科横断的な探究学習を展開している。同年度には、兵庫県教育委員会より「兵庫型 STEAM 教育実践モデル校」としても指定を受け、文理融合型教育の展開を目指す研究開発を進めている。

２．　本校の探究活動における NIE の位置付け

本校の「総合的な探究の時間」は、「兵庫型探究学習（ひょうたん)」という名称で、SDGs のテーマに基づく教科横断的・総合的な学習を通じて知識を深め、世界に繋がる地域の課題を発見し、地域の専門家や企業・団体等他者と繋がり、協働的に解決に向けた提案を行うことを目指している。また、学習成果をスライドやポスターにまとめて発表することで、ICT 活用能力を高めると共に表現力を養うことも目標としている。

NIE の活動は、研究課題の発見や、問題の現状理解といった関連する知識の習得と調査内容をまとめる機会として位置付けている。令和２年度からの２年間は「NIE 実践指定校」として、令和４年度は「NIE 独自認定校」として兵庫県 NIE 推進協議会より新聞の提供を受け（写真１)、記者派遣事業等を活用した講演会を実施した。

事前調査（調査対象生徒 275 名中有効回答数 249）の結果、本校生徒の家庭における新聞購読率は約 46%（うち２紙以上購読している家庭は３%）で昨年度調査結果の約 60%よりも少なくなっている。また、テレビ以外の情報の入手方法については、「インターネットから」が約 78%、「新聞とインターネットから」が 18%であり、昨年度結果同様、日頃新聞に目を通す習慣がないことがわかった。NIE に関する認知度については、「あまり知らなかった」が約 29%、「知らなかった」が約

写真１　HR 教室付近に設置した NIE コーナー

67%と昨年同様に低く、新聞記事を授業で活用したことがあるかということについては、「５回以上」が約４%、「年に数回程度」が約 50%であったが、「活用したことがない」という回答の割合も約 50%であり、授業における学習に新聞を活用した経験も少ないことがわかった。一方、教育で新聞を活用することに意義があるかという質問に対しては、「大いに意義がある」が約 24%、「ある程度意義がある」が約 71%と肯定的な回答が 95%以上（昨年度は約 84%）を占めたことから、昨年度同様に探究学習における NIE の活用の効果が期待できると考えた。

３．実践の内容

（１）朝日新聞主催「『ペタッと SDGs 付箋』を使ったワークショップ」

令和４年６月６日（月）に、朝日新聞本社 CSR 推進部 NIE 担当の遊佐美恵子氏を講師としてオンラインで「身近なことを世界とつなげる」をテーマにミニ講演会およびワークショップを実施した。この取り組みは昨年度に続き２年目で、SDGs 関連の新聞記事や写真などから世界との関わりを考え、SDGs の観点で記事を読み、SDGs 付箋で思考を可視化することによって、多様な意見や考えを学びつつ、身近なこととつなげていくプロセスを体感することを目的としている。SDGs に関連する新聞記事（表１）は、朝日新聞より提供していただき、クラスで読む新聞記事を変えて同じ方法を用いてクラス担任が次の授業でも行った。活動の手順は、まず個人で記事を読み、グループで一人一人の意見を出して話し合いながら付箋を A3 サイズのプリントに貼っていき（写真２）、再び大判のポスター（A0 版）に印刷した記事に付箋を貼り替え、クラスで共有する（写真３）。選んでいただいた記事については、SDGs の目標１つだけでなく、複数の目標が相互に関連するもので、読む生徒一人一人の視点も異なり、付箋を貼りながら意見を共有する場面では様々な気付きがあった（表２参照）。

表１　活動で使用した新聞記事（いずれも朝日新聞朝刊）

新聞記事タイトル	発行日	第 1 回（6/6）	第 2 回（6/13）
「チョコの不条理一緒に変える」	2022.1.30	2 年 1 組	2 年 2 組
「観光地客が戻ればポイ捨ても?」	2022.4.23	2 年 2 組	2 年 3 組
「難民は人材の宝庫未来つくる仲間」	2022.3.29	2 年 3 組	2 年 1 組
「医療から取り残されやすい人々」	2022.2.26	2 年 4 組	
「海の異変『適応』する漁師」	2021.11.30	2 年 5 組	2 年 6 組
「割れてもくっつく自己修復プラ」	2022.4.12	2 年 6 組	2 年 7 組
「バイオマス発電が生む可能性」	2022.5.23	2 年 7 組	2 年 4 組
「脱炭素『今すぐ』強調」	2022.4.5		2 年 5 組

表２　活動後の生徒の感想（一部抜粋）

・記事を読んで、一つの記事でも人によって捉える問題は違うのだと感じて、面白かった。
・同じ記事でも、色々な課題があり、自分の気づかなかったものも共有できて楽しかったです。
・新聞記事からたくさんの SDGs 問題を見つけ、たくさんの人と共有することで様々な観点

から問題について意見を探すことができた。
・様々な視点を意識しながら読み共有することで、思いもしなかった関連性が見つけられてよかったです。
・周りの子は皆自分とは異なった視点をもっていて、一人よりも深い学びが出来ました。一つの単純な問題に思えても、その中にはたくさんの問題点があるということがわかりました。自分達の行動がとても大切になってくるということもわかりました。
・一つの新聞記事でも SDGs に関連する課題がこんなにたくさん見つかることに驚いた。同じ記事でも人によって考える課題は違ってとても興味深かった。今回のワークショップを活かして、普段のニュースなどからも SDGs の課題を探してみようと思った。

写真２　グループで意見交換

写真３　クラス全体で共有

（２）兵庫県 NIE 推進協議会主催「記者派遣事業」

①「ウクライナ有事と新聞報道を考える」

ロシアによるウクライナ侵攻から３カ月が過ぎた令和４年５月 30 日（月）、神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーを講師として、標題の講演会を実施した。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によると、５月 20 日現在で、ウクライナの避難民は約 644 万にとなっており、そのうち 1,000 人が日本に逃れている。

生徒たちは、神戸がロシア革命時にウクライナ人を受け入れた深江文化村（神戸市東灘区）の説明を受けた後、グループで「戦争終結に向け、神戸の地から何ができるか」について意見を述べ合った。本校生徒会でも３月に取り組んだ人道支援のための寄付活動や、避難民受け入れの一層の促進という物理的な支援策だけでなく、「関心を持ち続けることが大切」といった意見も多かった（表３参照）。

表３　生徒の感想（一部抜粋）

・まずはもっと関心を持とうと思いました。戦争は早く終わってほしいと思うけど、心のどこかでは実感がわかず、他人事のように思ってしまうことがあるので、ニュースなどもっと見ようと思います。
・ロシアによるウクライナ侵攻は、経済面、スポーツ面など様々な分野で日本も影響を受けていて、それが新聞記事になっているということに改めて気付かされた。もっと戦争について関心を持とうと思った。
・ウクライナの戦争について、私たちに出来ることは必ずあるということが分かりました。

②「調べる、まとめる－世論調査－」

令和４年 10 月 17 日（月）、時事通信社神戸総局の水島信総局長による講演会を行った。本講演会は、探究活動で調べたことをまとめる段階でのポイントについて理解することを目的として実施した。水島氏からはメディア各社が行った安倍晋三元首相の国葬の賛否を問う世論調査を例として、テーマ設定の大切さや、性別や年齢など回答者の属性と回答を関連付けて分析を深めることをポイントとして話していただいた。SNS などを用いて容易に回答が集められることから、調査活動にアンケートを利用しようと考えていた生徒が多かったが、本講演を通して、慎重に質問を作成することや、深く分析する方法などについて学ぶことができた（表４参照）。

表４　生徒の感想（一部抜粋）

・質問を作る時は､答えが曖昧ではなく明確に分かれるものにし、誘導的な言葉が入らないように心がけたい。次からの探究に役立つ講演だった。
・質問の設定で得られる回答が随分変わってくるとわかった。また、細かく質問することで細かい分析結果も得られるとわかったので活用したいと思った。
・インターネットと新聞の両方のメリットとデメリットを知ることができ、探究の際にも各々の特性を生かして使い分けようと思いました。データを取ってそれを分析し、傾向を知ることができるという流れは探究にも役立つと思いました。

（３）新聞感想文コンクールへの参加

令和４年度は、神戸新聞主催「新聞感想文コンクール」に昨年度同様２年生普通科生徒全員が夏季休業中の課題として取り組み、校内優秀作品６点を応募した。

４．おわりに

探究活動終了後のアンケート（調査対象３年生生徒 279 名中有効回答数 258）で、各質問に対し、「4:そう思う」、「3：ややそう思う」、「2：ややそう思わない」、「1：そう思わない」の４段階で評価させ、「4:そう思う」と「3：ややそう思う」の肯定的な回答の割合を算出した。「意欲的に取り組めた」は約 93%、「知的好奇心を刺激された」は約 88%、「知識が深まった」は約 96%であった。また、身に付いたと思う力について、「教養・専門知識が身に付いた」が約 81%、「課題を発見し、問いを立てる力が身に付いた」が約 84%、「情報収集能力が身に付いた」が約 91%であった。「新聞ワークなどを通して SDGs とは何なのかというのが自分たちの中でしっかりと整理できたのでよかった」、「講演会や新聞ワークなどで、これからの人生でも役に立つことを知れたと思う」という感想もみられ、これらの結果の一部には探究活動における NIE の貢献があったと推察される。

学校現場における一人一台情報端末が普及していく中で、ますます新聞離れが進んでいくことが考えられるが、インターネットでは自分の興味・関心のある記事しか検索しないというデメリットもある。広く社会の課題に目を向けるためには、やはり国内・海外のニュースを網羅した新聞の紙面に目を通し、必要な情報を取捨選択することが必要である。今後も、新聞を読むことによって課題を深く掘り下げ、読解力や要約する力、調べたことや自分の意見を表現する力を育成していくことを目的に新聞の活用を奨励していきたい。

新聞を活用した「地域社会学」への取組み

兵庫県立西宮高等学校　　校長　　楠田　俊夫
教諭　　河辺　有希生

１．はじめに

本校は、六甲山系甲山の麓に位置し、関西学院大学上ヶ原キャンパスなどのある「文教地区」に所在する大変教育環境に恵まれた立地にある。全日制単位制普通科に加え、兵庫県の公立高校では唯一の音楽科を設置し、全校生徒数約 1,000 名の大規模校である。授業では単位制の特色を活かし、それぞれの興味、関心、進路に応じて共通教科はもちろん、商業をはじめ第２外国語、芸術等様々な特色ある選択科目を履修することができる。

ＮＩＥ推進事業では、新聞記事を活用した探究学習の実践に取組む。「総合的な探究の時間」の中で、新聞を活用して「ＳＤＧｓ」を理解するとともに、「地域社会を知る」をテーマに、身近な地域社会での問題を発見し、新聞ポスターにまとめる協働学習を行った。

本校生の新聞を購読している家庭はここ数年約 50％にとどまり、生徒の大半は情報をインターネットで得るなど、新聞を読む機会は減っている。教科「情報Ｉ」の授業では、インターネットの情報は信憑性に欠けることもあるということに触れ、情報の正しい獲得の方法を指導し、意識啓発を図っている。

２．実践の内容

（１）「新聞ポスター」の制作を通して

令和２・３年度から、NIE 推進事業により多くの新聞を提供していただき、「リサーチＩ・Ⅱ」（総合的な探究の時間）で活用している。

「リサーチＩ」（1 年次生）は「ＳＤＧｓ」17 分野の中から気になる課題を探究するために、新聞記事を探し、社会の動きを確認した。新聞ポスターのかたちで個人がまとめを行い、班内で発表を行い意見や考えを共有する活動を行った。また、「リサーチⅡ」（２年次生）で取り組む「課題研究」の研究テーマを見つける活動につなげている。

令和４年度は独自認定校に認定していただき新聞を活用した。生徒が新聞を通して社会に目を向ける機会として、1 年次の総合的な探究の時間「リサーチＩ」のなかで、ＳＤＧｓについて学び、新聞から関連するもの、興味を持った記事を見つける活動を行った。
先輩のポスターを例に取り組むことで、生徒はイメージがつかめ、よりまとまりのあるものになった。また、班で発表をすることで、他者の視点や新たな気づきが得られた。

＜新聞講読の趣旨＞

①新聞記事の中から、自分の興味・関心を持ったテーマの記事を探し出す目を養う。
②記事のいろいろなつながりをみつけ、課題の広がりをみつける。

③新聞記事を読解し、要旨をまとめ、他者に発信する力を身につける。
④他者の発表を通して、新たな考え方や視点を知る。

＜授業のねらい＞

①「ＳＤＧｓ」の 17 分野から、選んだテーマに関する新聞記事を選び、その記事に対する考えを意見文の中で述べる。
②社会で起きていることは地域でも起きていると考え、地域における問題提起に繋げる。

＜学習活動＞

第１時：・新聞を配付。（一人２紙以上）新聞から得られる情報を分類、分析する。
新聞は回覧し、なるべく多くの紙面に触れる。
・記事の中から自分が興味を持ったものを選び、「ＳＤＧｓ」１７分野のどれにあてはまるか確認する。
・新聞ポスターのタイトルを決定する。（例：「コロナで動く経済新聞」）

第２時：・各自のテーマに沿って新聞記事を切り取る。
・Ａ３×２のレイアウト、意見文やイラスト等も含めてレイアウトを考える。
・意見文の下書きをする。

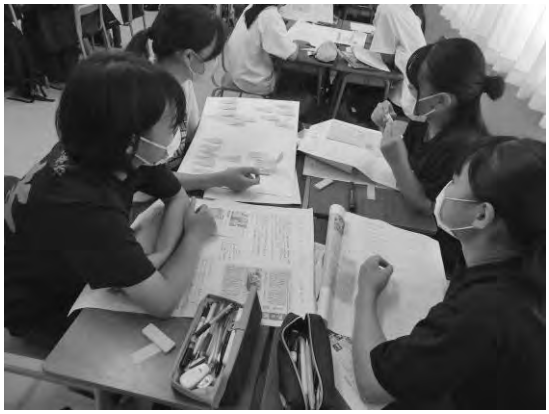
（新聞を読み、記事を見つける）

第３時：・意見文を清書し、記事とともにポスターに貼り付ける。
・次時に発表する内容を考える。発表の留意点は、意見文を読むのではなく、自分の言葉でプレゼンテーションをすることである。

１　なぜこのテーマを選んだか。　　２　どのような記事を集めたか。
３　それはＳＤＧｓのどの分野か。　４　自分はどのように考えたか。

５　今後、研究したいことは何か。

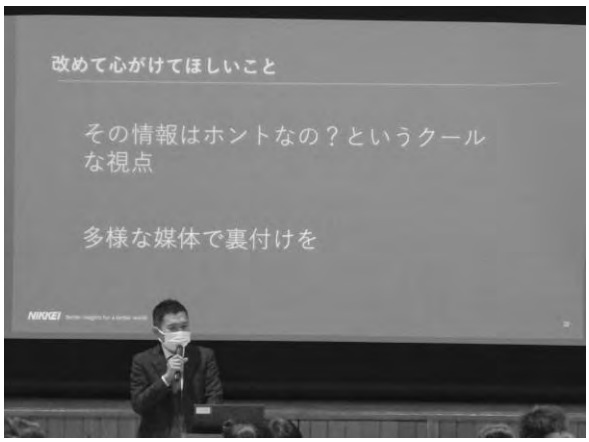
第４時：１人２分程度で、班内で発表を行う。



（新聞ポスター班別発表会）

（２）新聞記者派遣事業

ＮＩＥ新聞記者派遣事業として 12 月 15 日（木）日本経済新聞社神戸支社の岩本隆支局長をお招きし「裏付けの大切さ」というテーマで２年次生対象にご講演いただいた。新聞記者という情報を提供する立場から、情報の裏付けを取ることの必要性についてお話しいただき、これから実施する「課題研究」において、正しい情報を集めることの難しさ、その重要性を学んだ。また、自らの研究の信憑性を高めるためには、信頼できる裏付けが必要であることも気づかせていただいた。



（記者派遣事業　講演会）

＜生徒の感想より＞

・今までもたくさんの講演会を見てきて下調べや根拠となることの裏付けが大切ということは知っていて、今日改めて確認できました。私はあまり新聞を読まないのですが、新聞の読み方を知ることができたので、これから見出しだけでも見て、日本や世界の状況をもっと知ろうと思いました。大事なことから書いてまとめること、やってみようと思います。要点を見つけて言葉にすることは難しいけれど、常に物事のポイントを見つけながら生活したいです。

・今まで新聞は何となく堅苦しいイメージがあり、読みたいと思ってなかったのですが、どうやって新聞が作られているか、どれだけの手順を踏んで出来上がっているのかを知り、少しずつでも読んでみようと感じました。今はネットで様々な情報を手にすることが出来るけど、そ

れも全部が正しいわけではないので、新聞のような、しっかり正しい情報を出している機関を利用していきたいなと思いました。
・小学生の頃、校外学習で新聞記者の仕事について詳しく知ったが、今回改めて学習し、一からの情報を間違いなく人に届けるという過酷さを知った。記者が記事を書くにあたって下調べを十分に行い予測して、取材を行って情報の裏付けをするように、課題研究も入念な下調べと、自分が思う仮説や予想をしっかり立てて行わなければならないと思った。また、ネットの情報を第一に考えすぎず、調べ学習型にならないようにしたい。
・新聞はいつも最新の情報をスピーディーに的確に、見やすく分かりやすくできているのですごいと思っていたけれど、やはりその裏には多くの関係者やチェックが厳重に入っているということが分かりました。ぜったいに情報を間違えてはいけないから、多くの責任感が必要な仕事だと思いました。また、SNS の情報を鵜呑みにせず、自分でたくさんの情報を収集することが大切だと思いました。
・今日、岩本さんの講演をきいて、裏付けの大切さ、普段から目にするたくさんの情報に対して、その情報はホントなのかというクールな視点を持つことの大切さを学びました。新聞では裏付けを徹底していて、多様な媒体で裏付けをしている。ネットは SNS の情報を鵜呑みにせず、あくまで参考程度で活用する、または確認をとるようにする。

４．成果と今後の課題

本校の生徒は真面目に課題に取り組む力や常識的に物事を考える力は持っている。課題を発見し、自ら解決していく力をつけることを目標に探究活動を行っており、“新聞”を活用して、社会と身の回りの出来事に目を向けることを目標に行っている。今年度は、新聞ポスターのあと、地域の課題をより具体化させるために地域の方にお越しいただき 10 講座の講演会を開いた。残念ながらコロナの影響もありディスカッションの時間は取れなかったため、次年度は、生徒各自が新聞ポスターを持ち寄り、地域の方と課題について話し合う時間も設定したい。

ＳＤＧｓに挙げられた達成課題は、社会問題が一人ひとり、個人の問題であることを自覚するための最も効果的な課題である。新聞を手にした生徒たちは、ネットと異なりピンポイントでニュースを見つけることに苦戦しながら記事を探していた。しかし、自分が探している情報以外に興味深い記事を見つけて周りの友達に話しかけたり、記事をお互いに見せ合ったりする姿が多く見られた。

今後は、「課題研究」をはじめ、様々なレポートや小論文等に新聞を裏付けとした内容や意見が述べられるよう、また、多くの教科で活用、実践していけるよう、さらに活動を深化していきたい。

Newspaper in Education

◇教育に新聞を◇

2022（令和４）年度

『兵庫県ＮＩＥ実践報告書』

－2023（令和５）年６月発行－

兵庫県ＮＩＥ推進協議会　編

〒650－8571
神戸市中央区東川崎町１－５－７
神戸新聞社内
電話 078(362)7054　ファクス 078(362)7424
E-mail　hyogo-nie@kobe-np.co.jp
HP　http://www8.kobe-np.co.jp/nie/hyogo/

「教育に新聞を」実践　中学校編

◇新聞を活用した情報リテラシー教育実践　（神戸市立神陵台中学校）

◇新聞を活用し『言語能力・情報活用能力』の育成を図る　（尼崎市立南武庫之荘中学校）

◇NIE 活動を通して、時事問題に興味・関心を持たせ、主体的に学習を深めようとする態度の育成の継続　（加古川市立志方中学校）

◇新聞の良さを発掘する　（神戸市立丸山中学校　西野分校）

◇新聞から考えを深める～NIE スクールとしての取り組み～（加古川市立加古川中学校）

◇自分ごととして捉え行動できる生徒の育成　（南あわじ市・洲本市組合立広田中学校）

「教育に新聞を」実践　小学校編

◇「新聞の魅力を味わい、新聞を楽しく読もう」～自分の興味・関心に合わせて新聞を進んで活用していくことのできる児童の育成～　（神戸市立淡河小学校）

◇社会への関心を高め、自分事として考えを持つ　（尼崎市立立花南小学校）

◇NIE の実践を通した「対話力」の育成　（養父市立宿南小学校）

◇社会に目を開き、自分の考えを発信できる子供の育成　（神戸市立白川小学校）

◇新聞に慣れ親しむ子供たちの育成～主体的な学びにつながる様々な活動を通して～　（神戸市立横尾小学校）

◇新聞に親しもう！読もう！学ぼう！　（姫路市立大塩小学校）

兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校

◇NIE と学校図書館を中心とした課題解決能力の育成　（姫路市立豊富小中学校）

◇SDG s の視点に基づく全校的な教科横断的探究学習
—NIE を活用した課題設定と調査結果のまとめ—　（兵庫県立兵庫高等学校）

◇新聞を活用した「地域社会学」への取組み　（兵庫県立西宮高等学校）